

王墓山遺跡群

倉敷市教育委員会

1974年3月

序

倉敷市は昭和39年1月、新産業都市の指定を受け、急速に工業都市化してきました。そのため工場用地の造成とか、流入人口増による宅地需要の増加が急になり、市内の山野は虫食い状態に侵され、おだやかな風土は著しく侵害されております。

埋蔵文化財も例外でなく、大きく時代の波を受ける結果となりました。文化財保護法の精神だけでは、現実に文化財を守ることは難しく、行政の対応策についても、いろいろと議論されています。しかも、次代に伝えるべき文化財を現在の経済的理由を基準とし保存するか、破壊するかを決めているのが現実であります。実際にも開発か文化財の保存かという全く異質のことを同列に並べて価値判断を行ない、なおかつ両者の比較を試みる論がしばしばあらわれますが、そのような二者択一を大いに疑問に思うものであります。経済効果だけを追求するのではなく、それ以上に間接的にうるおいをもたらす経済外効果に大きな目を向ける必要があろうと思うわけであります。

この様な状態の中で、今回の調査において開発業者がそれなりに文化財保護保存の話し合いに応じてくれたのは幸いなことでありましたし、今後とも文化財保護については、話し合いを続けることで、少しでも前進させて行かねばならないという指針を得たように思います。

今回、倉敷市教育委員会が岡山県教育委員会の指導の下にとりくんだ王墓山遺跡群は、倉敷と岡山のほぼ中間に位置した丘陵部であります。ここに計画された「庄パークヒルズ」は面積約43ヘクタール、住宅戸数1,000戸の倉敷市内としては最大の宅地開発で、昭和44年開発計画がおこり、文化財の分布調査を行なったところ、最終的には約百ヶ所の遺跡が発見されました。業者の方も分布調査により発見された文化財を保存するため、敷度設計変更し、当初計画よりかなり修正が行なわれました。

しかし、そのうちの約十ヶ所の遺跡を記録にとどめて破壊せざるを得なかつたことは、団地造成技術上やむをえなかつたとはいえ、大変残念なことで、千数百年にわたって土中に保存してきた遺跡に対し深く謝罪せざるをえないであります。

なお、今回の調査に暖かい御支援御努力をいただいた「庄パークヒルズ」文化財調査委員会の方々、並びにその他関係者には衷心より感謝の意を表するものであります。

昭和49年3月

倉敷市教育委員会
教育長 三島 一夫

(題字は三島教育長)



(1) 平野中央が造成前の王墓山丘陵（南西より望む）右手上方の山が吉備中山



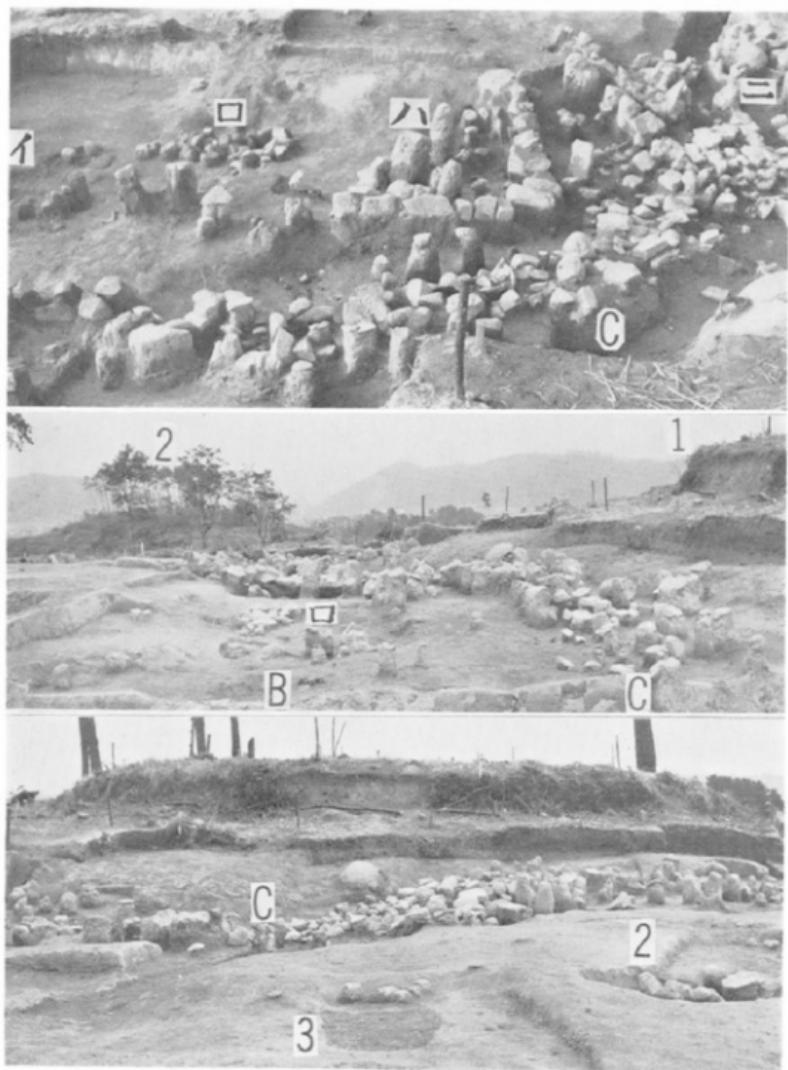
(2) 造成後の王墓山丘陵（南より望む）



(1) 女男岩(A)、社山田遺跡(B)を北東の向山より望む(手前の池は平俵池)



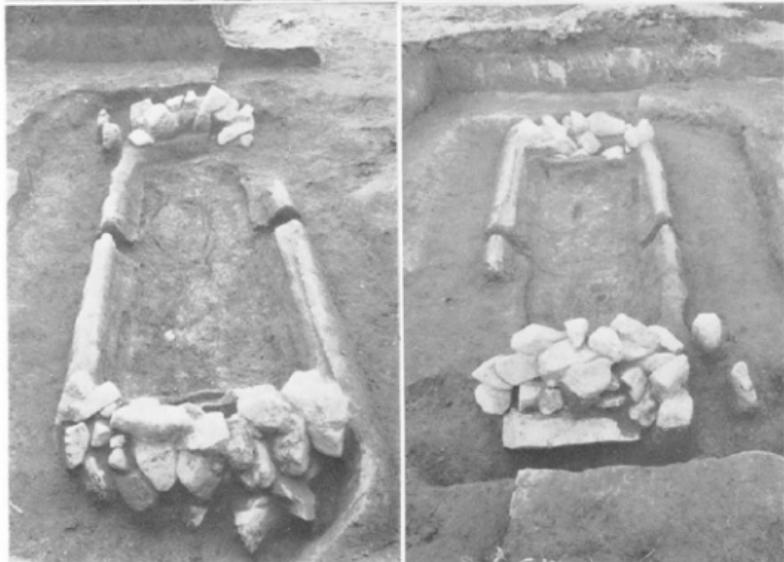
(2) 女男岩遺跡全景(南上方より)



(上) L字状石組を中心に戸C及び穴「イ」~「ニ」(南より見る)

(中) 戸B・Cを西より見る。1は中央土塚墓所在高所、2は法伝山

(下) 中央土塚墓所在の高所と戸Cを北から見る。2は土塚墓2、3は土塚墓3



中央土墳墓（土墳墓1）

下左・人骨出土状況（頭部より見る） 下右・鉄劍出土状況（足部より見る）



(1) 左上・特殊壺出土状況（溝C）



(2) 右・台付家形土器の家形各部分出土状況（溝C）



(3) 下・台付家形土器の台脚部出土状況（溝C）





(1) 正面全形



(2) (上から) 屋根上面、家部裏面、
妻の一面、妻の他面全形



(1) 溝A・家形土器片



(2) 溝A・壺



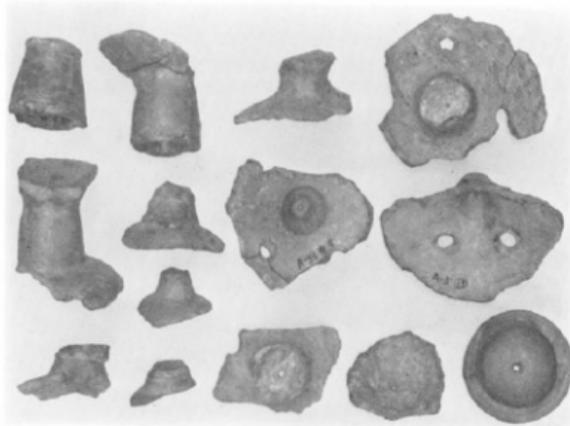
(5) 溝C・小鉢



(3) 溝C・特殊壺



(4) 溝C・特殊壺の中に入っていた土器



(1) 滿C・高环



(4) 滿C・壺



(2) 滿C・高环



(3) 滿C・台付小壺



(1) L石組上・小壺



(2) 穴「イ」・高壺



(3) 穴「ハ」・甌



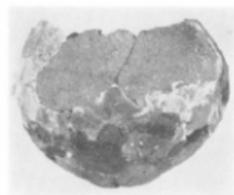
(4) 穴「ハ」・台付小壺



(5) 穴ハ・鉢



(1) 上、(2)下 共に穴「ニ」周辺・壺



(4) 穴「ニ」・壺



(5) 穴「ニ」・台付小壺



(3) 穴「ニ」・壺



(6) 穴「ニ」・土製勾玉



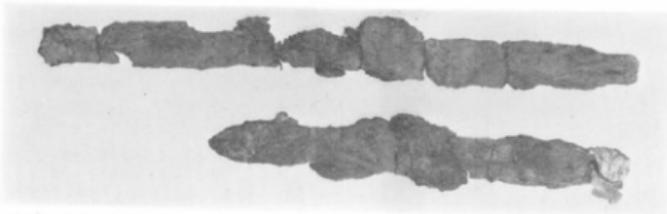
(7) 穴「ニ」周辺・壺



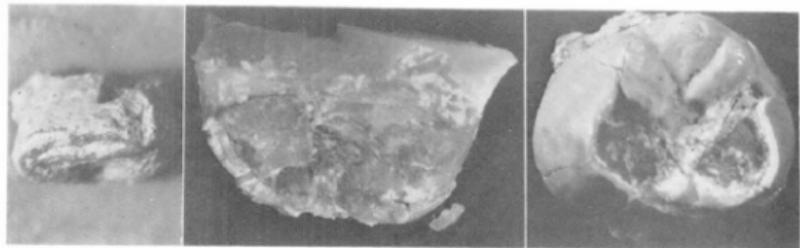
(1) 穴「ト」・台付小壺と碗



(2) 穴「チ」・鉢



(3) 中央土墳墓・劍



(1) 上顎側切歯切縁

(2) 上顎第2大臼歯遠心部咬合面

(3) 上顎第3大臼歯咬合面

(中央土壤墓人骨)



(4) 住居址・弥生中期台付壺



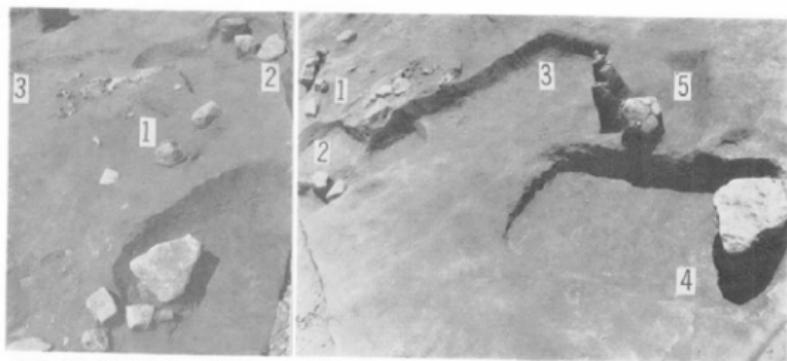
(5) 上、(6) 下 共に中世土器質土鍋



(7) 中世瓦質土器 壺

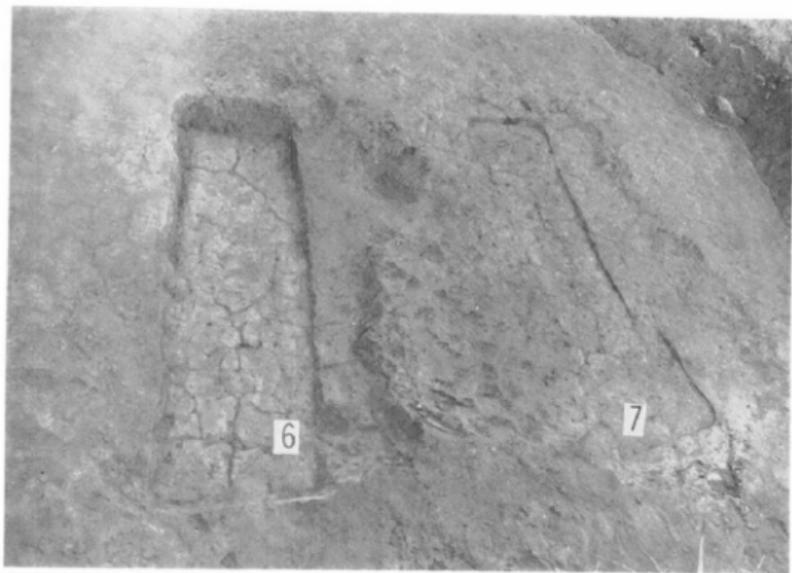


(1) 辻山田遺跡（南地点よりのぞむ）

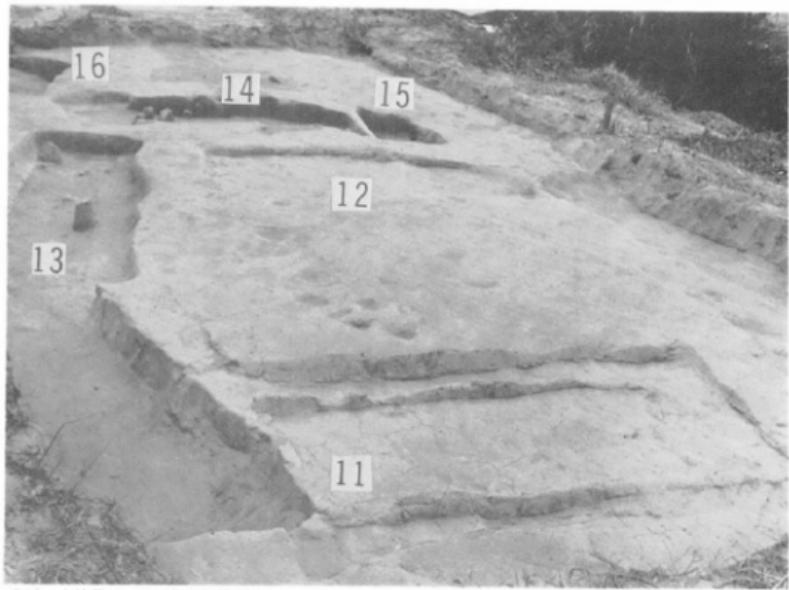


(2) 東地点土塚（東から見る）

(3) 東地点土塚（北から見る）



(1) 土塁墓6、7（西より見る）



(2) 土塁墓11—16（北より見る）



(1) 溝Fと土塙墓17(西より見る)



(2) 溝Fと土塙墓17(北より見る)



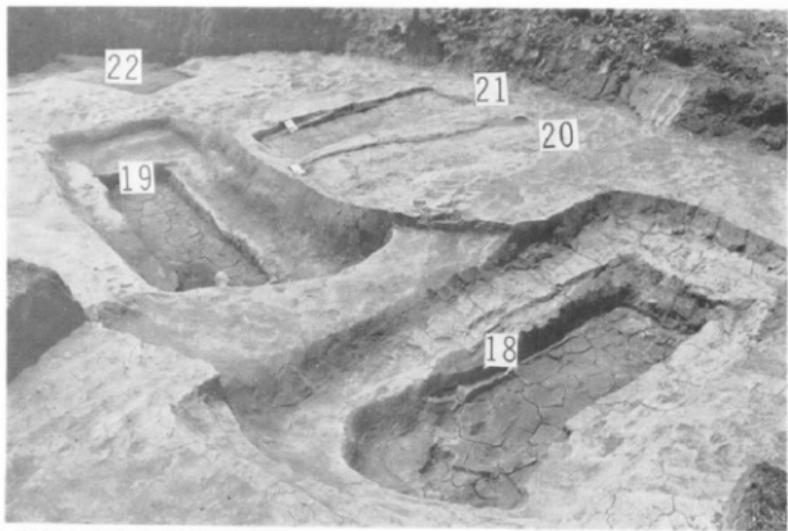
(1) 溝D（南から見る）



(2) 溝E（南から見る）



(3) 溝E 1（東から見る）



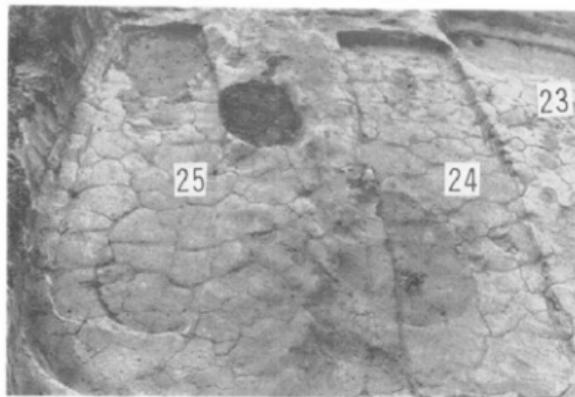
(1) 土 墓 18~22 (北から見る)



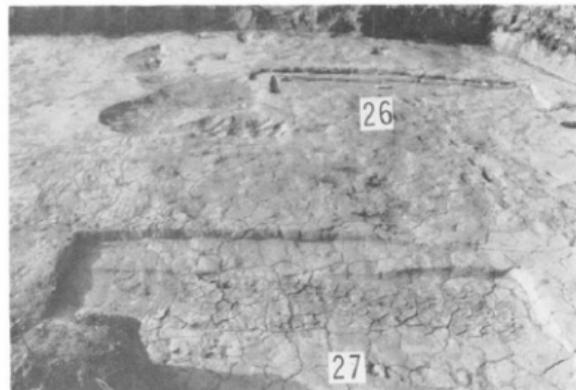
(2) 土 墓 19 (南より見る)



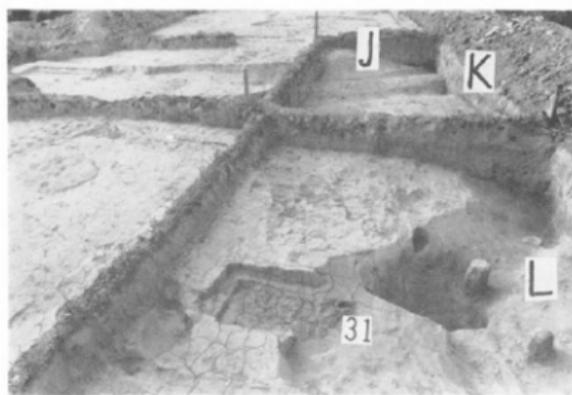
(3) 溝G (西から見る)



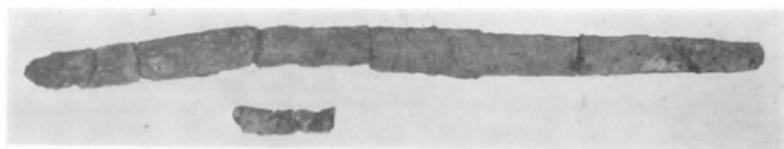
(1) 土 墓 番 23~25
(東から見る)



(2) 土 墓 番 26, 27
(南から見る)



(3) 土 墓 番 31、溝 J, K, L
(南から見る)



(1) 上・東地点土塚墓1、2の鉄器、刀子、劍



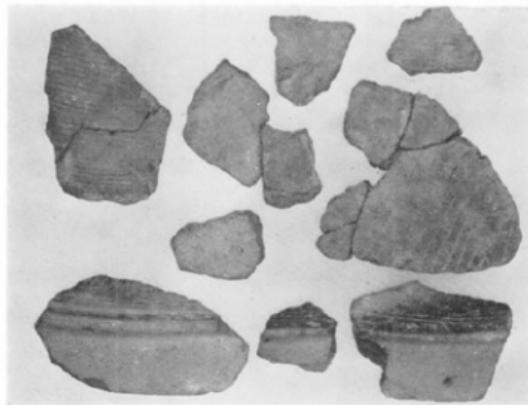
(2) 左・東地点の壺



(3) 上・北地点 E 1の壺



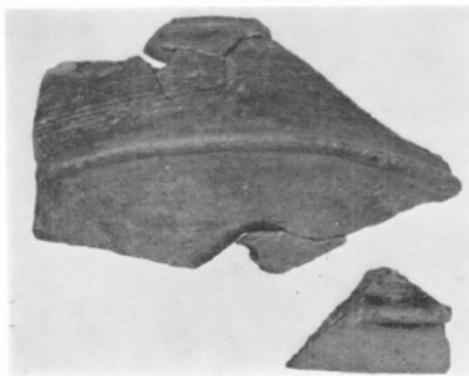
(4) 下・北地点 溝E 1
の器台



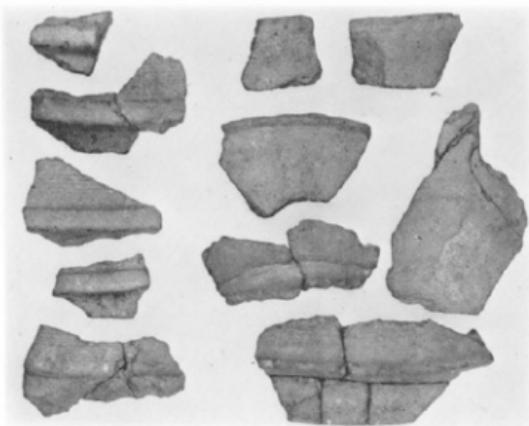
(1) 北地点 溝E 1 の半特殊器台



(2) 北地点 溝E 1
の高环



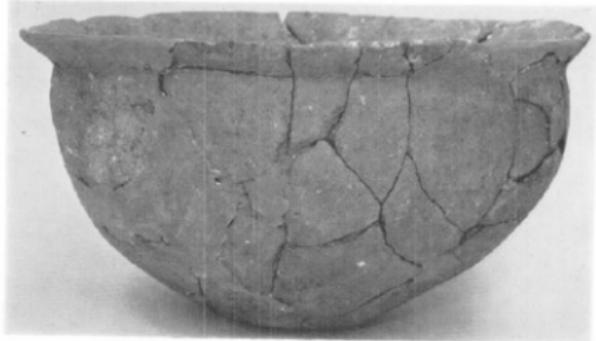
(3) 中地点 溝H の半特殊器台



(1) 南地点 溝Iの特殊壺と半特殊器台



(2), (3) 北地点 溝Dの壺



(4) 北地点 溝Dの鉢



(1) 左、北地点 溝F 2。右、南地点 溝Iの壺



(2) 北地点 溝F 2の壺

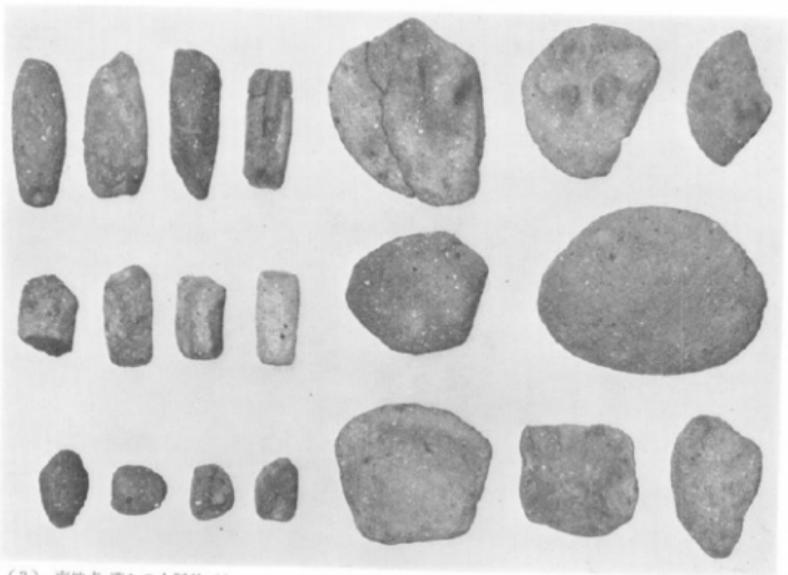


(3) 北地点 溝F 2の鉢

(1) 北地点 土壙墓10の玉類と鏡片(右下端)



(2) 南地点 溝Lの跡



(3) 南地点 溝Lの土製品(左・玉形、右上・鏡形、右中・不明、右下・手すくね形)



(1) 中央松林部分が法伝山古墳（南西より見る）



(2) 南側 トレンチ 2 内（南より見る）



(3) 南側 トレンチ 1 内（東より見る）



(4) 南側 墳輪周辺出土、須恵器・蓋



(1) 南側・朝顔形



(2) 南側・円筒



(4) 西側・円筒(線引き底)



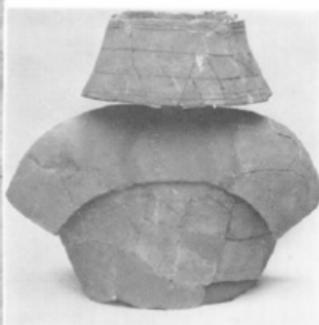
(3) 西側・朝顔形



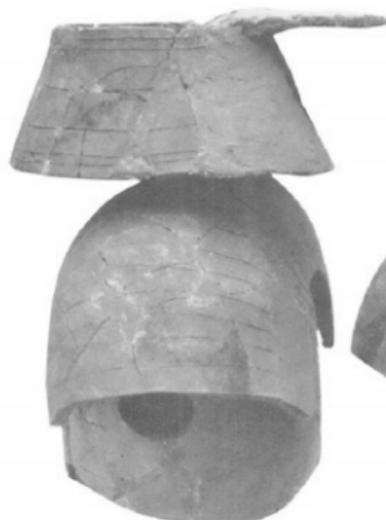
(5) 西側・円筒



(1) 墳輪出土状況（南より見る。向うは矢部部落）



(2) 墳輪甲冑・背面



(3) 墳輪甲冑・側面



(4) 同・正面



(1) 石室（東から奥壁を見る）



(2) 石室（西から狭道を見る）



(4) 北側、溝中の埴輪出土状況



(3) 西側、鉄斧・円鏡出土状況



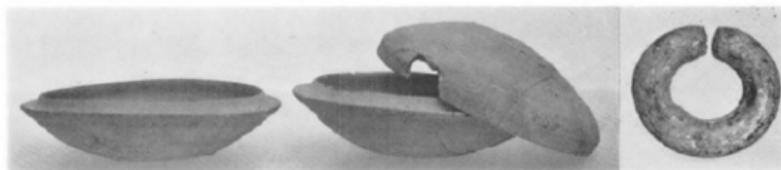
(1) 西側・円筒埴輪



(2) 西側・鉄斧



(3) 北側・円筒埴輪



(4) 游道・須恵器蓋坏



(5) 石室・金環

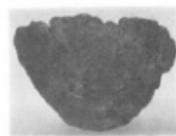




(1) 石室(狭道部より奥壁を見る)



(2) 石室(奥壁より狭道閉鎖部を見る)



(3) 土師器 手すくねの土器



(4) 須恵器 平瓶



(5) 須恵器 蓋杯



(6) 中世・土師器 梶



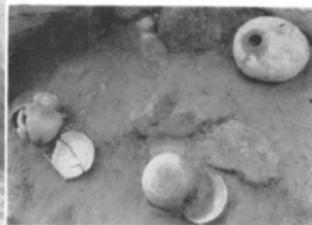
(1) 石室（淡道部より奥を見る。手前小石は淡通閉鎖石）



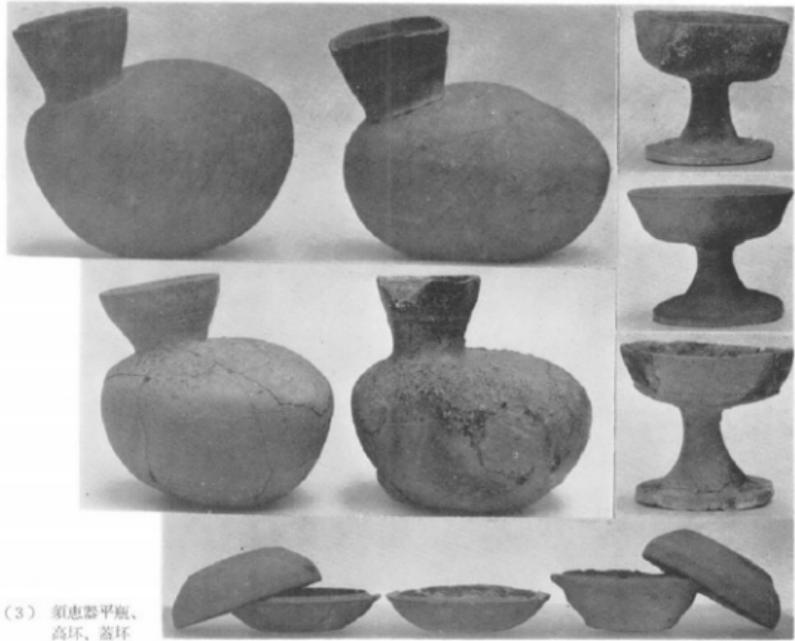
(2) 石室（奥壁より淡道部を見る）



(1) 石室（西側より奥壁を見る）

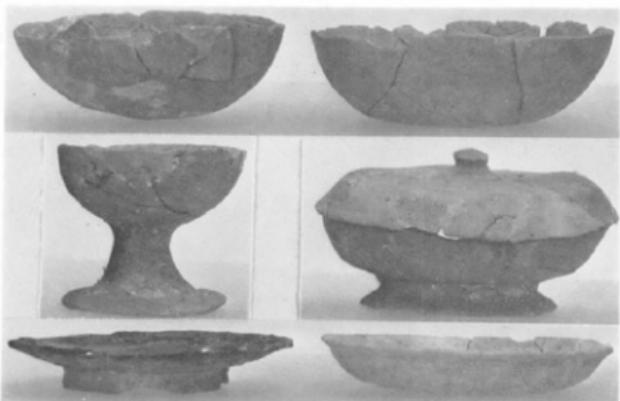


(2) 游道部遺物出土状況



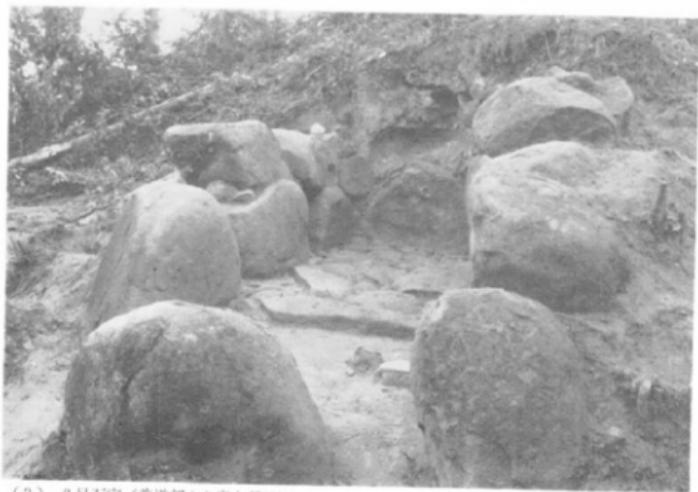
(3) 須恵器平瓶、
高环、蓋环

(1) 右・2号漢道部出土
土師器甌、高环、
蓋環など

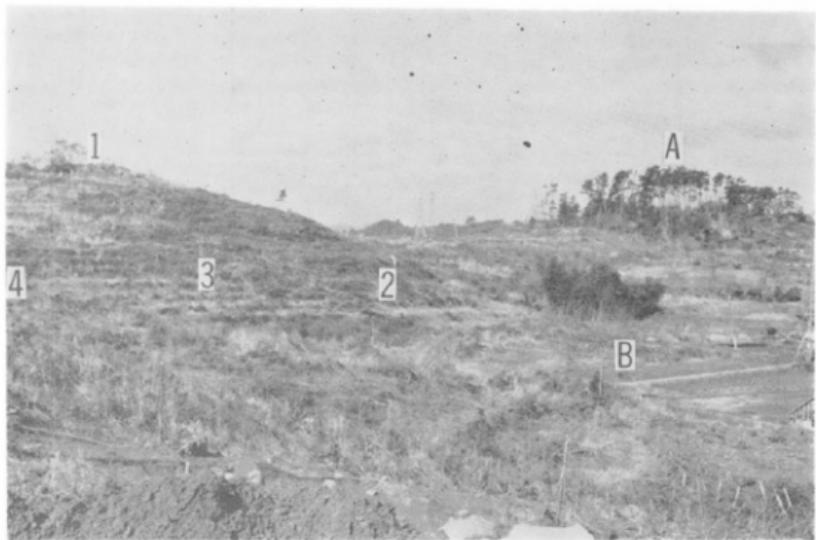


(2) 2号漢道部出土

中世 土師器・甌、土鍋



(3) 8号石室(漢道部より奥を見る)



(1) 赤井西古墳群1～4号遠望、Aは法伝山、Bは赤井廃寺址（赤井南4号上より見る）



(2) 石室（南より奥壁を見る）



(1) 石室（北より渡道部を見る）



(2) 馬具（銅鏡、絞具など）鐵鏃、刀子、釘、鍔



須惠器 台付埴、埴、高环、平瓶、罐、蓋环



(1) 石室（南より奥壁を見る）



(2) 石室内部隙床と排水溝（上方より見る）



(3) 左 同（渡道部より奥を見る）



(1) 赤井西4号出土・玉、刀子、鉄鎌、馬具(轡、銃具など)



(2) 左同・須恵器高环



(3) 赤井南3号石室(奥壁より渡道閉鎖部を見る)



(1) 渋道部排水溝（渋道入口より奥を見る）



(2) 左同・蓋石除去後（玄室より見る）



(3) 石室（渋道閉鎖部より奥を見る）



(4) 石室外周の封土下地山上の礫敷面



(1) 鉄 刀



(2) 左・鉄刀、馬具、金環

(3) 下・須恵器 台付埴



(4) 須恵器 高環、塗、蓋環

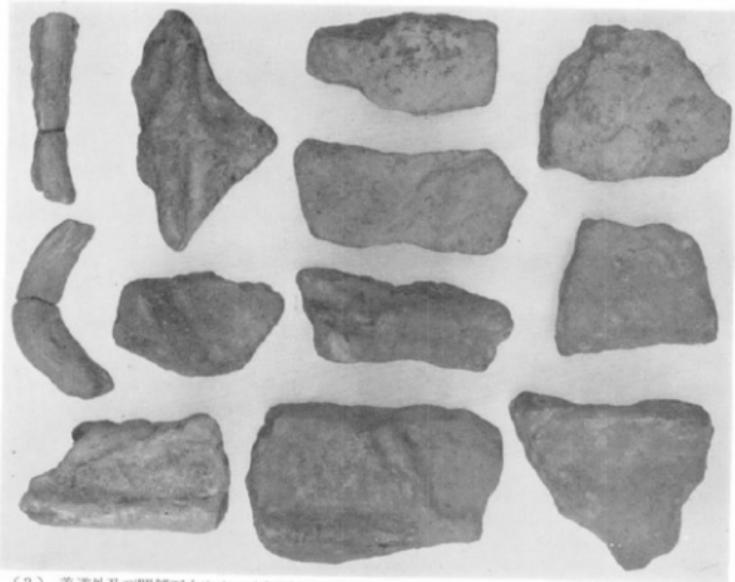




(1) 須恵器 平瓶、器台、提瓶



(2) 土師器 高坪、碗

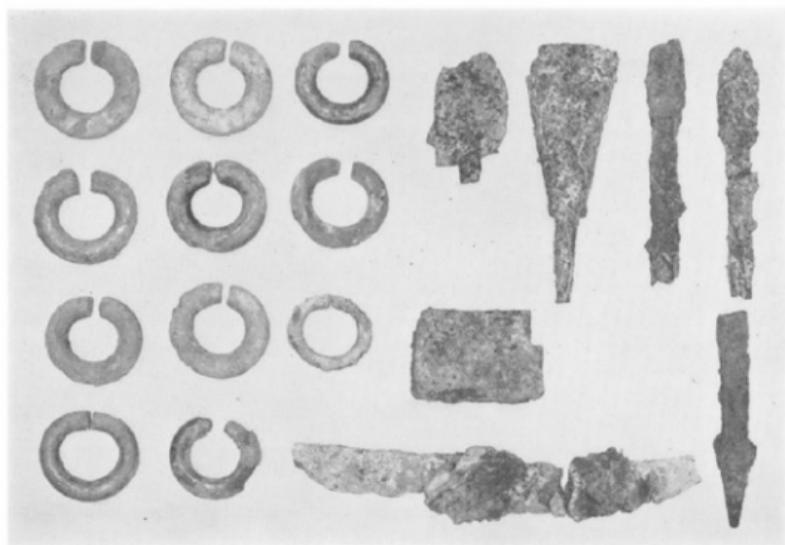


(3) 美道外及び閉鎖石中出土・土師質龜甲形陶棺



(1) 上・石室（羨道部より奥を見る）

(2) 下・石室（玄室より羨道閉鎖部を見る）



(1) 金環、鉄鎧、刀子など



(2) 瑙道閉鎖石除去後（玄室より見る）



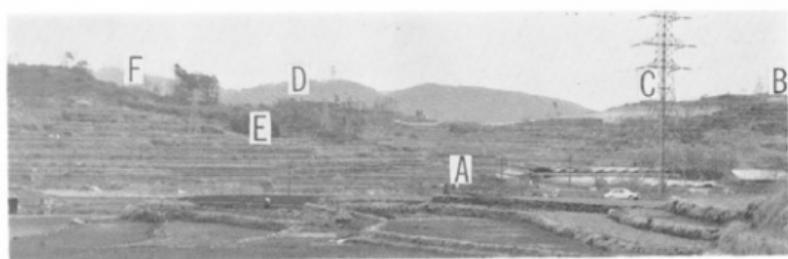
(3) 須恵器 平瓶、壺、蓋環



(1) 上・向山16号石室（傾斜部より奥を見る）



(2) 右・同上（奥より傾斜部を見る）



(3) 西方より矢部伊能軒遺跡と王墓山丘陵を見る（A・伊能軒、B・女男岩、C・王墓山古墳、D・法伝山、E・平佐古墳群、F・向山古墳群）



(4) 矢部伊能軒遺跡出土埴輪



(1) 東谷古墳群 12号



(2) 東谷古墳群 18号



(3) 真宮古墳群 6号



(4) 大池上古墳群 1号



(5) 左上・大池上古墳群 3号 (6) 右・同 4号 (7) 左下・同 5号





(1) 左上・大池上古墳群9号

(2) 右・赤井西古墳群5号

(3) 左下・赤井南古墳群2号



(4) 左上・平伏古墳群1号

(5) 右上・向山古墳群1号



(6) 左・西山古墳群1号



(1) 石 棺 (岡山県井原市浪形産貝殻石灰岩製)



(2) 同上 石棺の底石



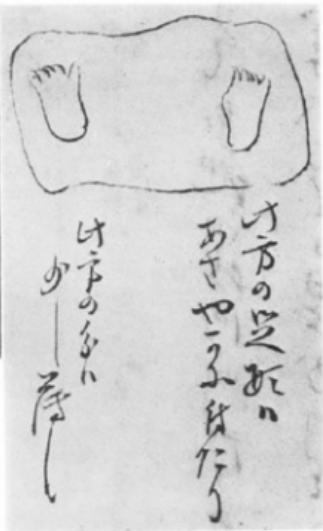
(3) 墳丘遠景 (木立の部分、南から見る)



(1) 立石群



(2) 神体石



(3) 神体石の図（備中誌大原家藏本より）

王 墓 山 遺 跡 群

I 王墓山遺跡群の環境.....	2
II 宅地造成にともなう遺跡対策と調査の経過.....	5
III 女男岩遺跡.....	13
IV 辻山田遺跡.....	50
V 女男岩・辻山田遺跡の問題点.....	98
VI 法伝山古墳.....	122
VII 西の平古墳.....	128
VIII 半俊古墳群 3号.....	135
IX 半俊古墳群 4号.....	145
X 真宮古墳群 5号.....	148
XI 大池上古墳群 2号.....	151
XII 大池上古墳群 8号.....	158
XIII 赤井西古墳群 2号.....	160
XIV 赤井西古墳群 4号.....	166
XV 赤井南古墳群 3号.....	171
XVI 赤井南古墳群 4号.....	181
XVII 向山古墳群 16号.....	186
XVIII 王墓山古墳(赤井西古墳群 1号).....	187
XIX 後期古墳群の概要.....	199
XX 中世の遺物散布地.....	207
XXI 周辺の遺跡.....	210

- 。この報告は、倉敷市の東北部にある庄地区の王墓山丘陵に、株式会社倉敷信販が庄パークヒルズなる住宅団地を造成するにあたり、倉敷市教育委員会の委嘱により、文化財調査委員会を構成して行った遺跡調査及び開発に対する遺跡保護対策並びに破壊の記録である。
- 。調査参加者全員の協力のもとで、記録を作成したが、調査後の整理の大部分と作図および編集は倉敷考古館で行い、間塙忠彦・間塙茂子・藤田憲司・山本雅靖が当った。執筆者は各項に明記した。
- 。既往の出土品のうちで、特に重要と思われる、東京国立博物館蔵の王墓山古墳資料に関して、三木文雄氏の解説をいただき、女男岩遺跡の人骨については、大阪市立大学医学部解剖学教室の寺門之隆氏をわざらわせた。なお、本報告作成に当って、鈴木嘉吉・佐原真・佐藤興治・名越勉・神原英朗・出宮徳尚・根木修各氏の御教示、御協力を頂いた。

I 王墓山遺跡群の環境

小野一臣・間壁茂子・間壁忠彦

王墓山遺跡群は、岡山県倉敷市庄地区の日畠・西尾・矢部にまたがる標高50mに満たぬ低い丘陵上に分布する。ここは昭和46年3月倉敷市に合併されるまでは都窪郡庄村であった。現在は、倉敷市の東北端にあたり、岡山市と接する位置にある。小丘陵の東には、足守川が南北に流れ、北には旧山陽道が東西に通じている。南は、古く総社平野を貫流して流れている高梁川とその後の足守川の沖積によって拓がった平地が続き、この平地の真中を東西に国道2号線、山陽線、山陽新幹線が平行して走り、西は倉敷市と総社平野を分つ山丘に連なっている。

この山丘周辺は倉敷市内でも、各期の遺跡が稠密に分布する地域として古くより知られた処であった。「王墓山」の地名自体も、実は、明治中頃より同丘陵上に多くの古墳が存在することから俗称として呼んだ名前が名称になったと考えられている。

この周辺の遺跡としてまず注目されるのは縄文時代の貝塚である。王墓山丘陵の南東裾、西尾地区内には、西尾貝塚と呼ばれる縄文後期を主体にする貝塚があり（註1）、矢部地区内では、王墓山丘陵と小さい谷一つをへだてて相対する位置の西側の丘陵裾で谷の奥まった位置に同じく後期と思われる矢部（中須賀）貝塚が知られている（註2）。また、同丘陵と沖積地をへだてた南約3kmの地点には広義で早島と呼ばれる独立丘陵が存在し、この丘陵の東北端で、王墓山丘陵に相対する位置に岡山市大内田貝塚（註3）が存在する。これも同じく縄文時代で、主に中期以降の遺物が知られている。またこれ等の貝塚を構成する貝で縄文時代に伴うものはカキ・小巻貝・ハイガイ等海産のものである。以上の状況より見て、縄文時代には、瀬戸内海が深くこれ等小丘陵の裾まで湾入しており、現在の沖積地すべてを覆い、王墓山丘陵も海に面すると云うより、むしろ古くは広かつた児島湾に突出した岬であったことが知られるのである。しかし、前面の海はかなり浅い泥海が続いていたものと思われる。いずれにしてもこのあたりが古い児島湾岸の縄文貝塚群の北端部に位置するのである。

弥生時代になると、当時は高梁川の本流でもあったと考えられている川で、現在も流れる足守川により、沖積作用が急速に進んで行く。王墓山丘陵のすぐ南裾に続く平地で最も早く沖積の進んだと思われる一角には弥生前期遺跡である岩倉遺跡が知られている。また、先の大内田貝塚の存在した早島の丘陵の東北先端には、弥生前・中期の岡山市大内田関戸貝塚があり（註4）、この貝の主体はすでにヤマトシジミとなっている。また先の大内田貝塚も上層で縄文晚期以降にはシジミが併存しており、これ等の状態は縄文末期より弥生時代初期には、急速に王墓山南面の海は泥海化し、陸化する傾向を示したものと言えるのである。さらに足守川河床の山陽線の鉄橋のやや上手でも弥生前期の土器片の採集が知られ、王墓山東南にひろがる沖積地が、弥生前期には点々とではあっても陸化していくと推定されているのである。これは山陽新幹線工事にともなう調査で足守川東岸の岡山市川入遺跡が弥生前期終末にはじまる遺跡であることがわかり（註7）、その想定はより確かなものとなった。また弥生時代中期となれば王墓山の東で足守川東岸に、高田遺跡（註6）、新邸遺跡（註5）と新たに沖積地へ遺跡が出現して来る。こうした状況は、弥生中期のころには、この付近の沖積地がかなり

拡がってきたことを示すのであるが、新郡遺跡でも、高田遺跡でも、一部に貝塚がみられ、ヤマトシジミを主としながらその貝の中に、泥海性の貝類を含むことが知られ、沖積地のごく近くには、なお泥海が存在したことを示すのである。

こうした沖積による陸化の傾向は、弥生時代後期になると、ますます顕著となり、遺跡の規模も大きくなってくることが知られている。岡山県の弥生時代遺跡として著名な上東遺跡は、弥生後期を中心とした大遺跡であるが、この遺跡も、この沖積平地の真中にあり、王墓山丘陵の真南1kmあたりに広く拡がっている。この遺跡は近年、新幹線工事に伴って一部が破壊され調査された(註8)。このほかにも、王墓山の東方ないし、東北方の平地には数多くの弥生時代遺跡が知られているのである。



図1 王墓山付近の地形と主な遺跡

- | | | | | | | |
|------------|-------------|------------|---------|----------|---------|---------|
| 1 王墓山遺跡群 | 2 造山古墳 | 3 矢部庵寺 | 4 矢部貝塚 | 5 矢部古墳群 | 6 日高山廃寺 | 7 二子古墳群 |
| 8 二子堂屋敷廃寺 | 9 二子御堂奥古窯址群 | 10 二子御堂奥遺跡 | 11 笹爪塔跡 | 12 高田遺跡 | 13 新郡遺跡 | |
| 14 中山茶臼山古墳 | 15 川入遺跡 | 16 岩倉遺跡 | 17 上東遺跡 | 18 大内田遺跡 | 19 関戸貝塚 | 20 西尾貝塚 |

古墳時代になると、王墓山丘陵自体が、古墳群の所在地として有名であったが、近くでは、上東遺跡の真西の丘陵の一帯にも二子古墳群があり、矢部貝塚の西に続く丘陵上にも矢部の古墳群が知られている。これ等の古墳群中には、古墳時代前半期の前方後円墳、円墳、方墳なども点在するが、主に後期の横穴式石室をもつ古墳が多い。そのうち古墳時代前半期にさかのぼることがほぼ確かなものは、矢部古墳群中の前方後円墳大ぐろ古墳（ひょうたん塚）と二子古墳群中で箱式石棺などを主体とした尾根上の古墳の一部であろう。それらも出土品の内容などがほとんど不明であるが、矢部古墳群に属すると思われる矢部貝塚の南側の丘で、仿製の神獸鏡一面が発見されていることが伝えられていて、これも前半期に属する古墳の存在を物語るであろう。

王墓山丘陵より西北約2kmの地点には、吉備最大の前方後円墳岡山市新庄下造山古墳が存在し、王墓山より東方に平地約2kmをへだてて吉備津神社の鎮座する吉備中山があり、この山頂には長約150mの前方後円墳、岡山市吉備津中山茶臼山古墳がある。また中山の東南端で、王墓山より直線距離で約4kmの地には長約140mの前方後円墳、岡山市尾上車山（ギリギリ山）古墳も存在する。

寺院跡としては、王墓山丘陵の東裾日畑地区に白鳳時代寺院址として、岡山县では著名な日畑赤井廃寺があり、矢部には、奈良時代寺院址の矢部廃寺がある。また両寺の瓦を生産した窯址や、古墳時代須恵器を生産した窯は二子の山裾にあり、ここも新幹線工事によって一部破壊された。また日畑赤井廃寺より足守川をへだてたすぐ北東の惣爪には塔心礎が存在し、これも移動したとは思われず寺院址と考えられる。また先に記した川入遺跡からも奈良時代瓦の出土が見られ（註7）、これも奈良時代の特別な建造物が考えられるのである。さらに、矢部古墳群のある丘陵の南西頂上に日差山廃寺、二子古墳群のある丘陵の北部尾根上に二子堂屋敷廃寺の山上寺院址も知られている。

以上、きわめて概略的に周辺の主要な遺跡のみ列記したが、これ等の遺跡が自から示すようにこの地域が古代吉備に於ける一つの中堅的な地域であったことは十分うかがえるのであり、その中における王墓山遺跡群の持つ重要な意味もまたうかがえるものである。

註1 清野謙次「日本原人の研究」岡書院（1925年）

2 平田英文「三備地方貝塚集成概説の3」吉備考古86号（1953年）

3 平田英文「三備地方貝塚集成概説の1」吉備考古81、2号（1951年）

4 平田英文「三備地方貝塚集成概説の2」吉備考古84号（1952年）

5 近藤義郎、鎌木義昌「岡山県高田遺跡」日本農耕文化の生成（1961年）

6 近藤義郎「備中新邱貝塚」古代学研究8号（1953年）

7 正岡、枝川、大谷「川入遺跡」山陽新幹線岡山以西の埋蔵文化財調査報告。岡山県教育委員会（1974年）

8 伊藤、柳瀬、池畠、藤田「上東遺跡」山陽新幹線岡山以西の埋蔵文化財調査報告。岡山県教育委員会（1974年）

II 宅地造成にともなう遺跡対策と調査の経過

武田俊宏・葛原克人・間壁忠彦

吉備地方南部にあって、歴史的にも地理的にも中枢部にあたり、遺跡の密集する王墓山丘陵に、宅地造成計画のあることがうわさされ、そのために遺跡の破壊が憂慮されはじめたのは、昭和44年頃からであった。昭和45年11月には、いよいよ株式会社倉敷信販から、庄パークヒルズという名称で王墓山丘陵のはば全城にわたる約43haの宅地造成計画の事業認可が岡山県に対し申請された。

王墓山丘陵上の古墳群については、遺跡の保存を目的とし、その所在を周知徹底させるために出版されている「岡山県遺跡地図」岡山県教育委員会（昭和41年）、「全国遺跡地図（岡山県）」文化財保護委員会（昭和42年）に、日畠古墳群・西尾古墳群として丘陵の大半をおおう地域が明示されていた。実際に両古墳群をあわせた既知の古墳の数が50基をはるかに越すものであることは、地元の人々や考古学関係者の常識となっていたのであった。これに対し、開発計画の事前申請では、遺跡地図の西尾古墳群中の1基（真宮神社前の古墳）と日畠古墳群中の王墓山古墳（赤井西1号）の2基だけを緑地内に残すという驚くべき計画であった。

当時、この地域は都窪郡庄村に属し（昭和46年3月合併により倉敷市となる）、専任の文化財担当者もいない状況であったので、岡山県教育委員会（当時社会教育課、その後文化課担当）が中心となり、計画申請後、遺跡の所在をより具体的に把握するための分布調査を主事葛原克人、中力昭、伊藤見、正岡謙夫、柳瀬昭彦らを派遣して行うと共に、倉敷信販との間で遺跡保存交渉を開始した。

当初の分布調査は、草木の茂った状況で行われたため作業は大変難行し、そのうえ、王墓山丘陵の地表には無数の岩が露呈しているので自然の露岩であるか、あるいは古墳の石室の一部であるのかを、見分けることの困難なものも大変多かった。そうした中にあって、一応の分布調査の結果として王墓山古墳をはじめ、石室の石材を想定させる個所を含めて63カ所を古墳として指摘したのである。その結果に立脚して、丘陵の北東部の権現神社、丘陵の東面した谷あいにある日畠赤井庵寺址を含めて、遺跡保存のための造成計画変更を倉敷信販に求めた。そうして、庄村が倉敷市へ合併した直後の昭和46年3月に、倉敷信販、岡山県教育委員会、倉敷市教育委員会の三者で、造成工事にともなう遺跡問題について下記の内容の覚書をとりかわした。

- 1 権現神社周辺は、公園緑地として保存する。
- 2 赤井庵寺址は団地の区外に除外する。
- 3 63基の古墳中、現状保存50基、法面に被覆するもの9基、発掘記録を作成破壊するもの2基、調査確認のうえ、適当な措置をとるもの2基。
- 4 発掘を要するものは、倉敷市教育委員会の指導で行い、発掘には専門研究者をとて、その経費は倉敷信販が負担する。
- 5 工事中の発見遺跡については、ただちに協議して、適宜の措置をとる。

上記覚書にもとづいた調査と遺跡の保護保存を行うため庄パークヒルズ文化財調査委員会を結成して、対処することになった。文化財調査委員会は、倉敷市教育長を委員長とし、岡山県教育委員会文

化課長、倉敷市教育委員会社会教育部長を副委員長として、委員に倉敷市教育委員会文化課長と倉敷信販代表取締役をあてた。専門委員としては、三宅千秋（倉敷市文化財保護委員長）、小野一臣（岡山県立玉島高校教諭）、間壁忠彦（倉敷考古館）、間壁茂子（倉敷考古館）に加えて、岡山県教育委員会文化課の葛原克人、新東晃一、伊藤晃らを委嘱した。それとともに調査委員会に対して、専門委員は必要な助言と指示ができるることを調査委員会規約に明記して、専門委員の性格を明確にした。調査委員会は、昭和46年5月に発足し、覚書であきらかにされた古墳のはかに、さらに1基の古墳が存在すること、覚書を実行するにあたって注意すべき事項などについて専門委員から指摘があった。それを受けて昭和46年6月には覚書にもとづく同意事項として、新たに加わった1基の古墳の現状保存を含めて、県・市教育委員会、倉敷信販の三者間で協議が成立した。

昭和46年夏頃から、丘陵上の山林部については、旧地主が立木を売却し、伐採業者の材木切り出し作業が始った。これにともなって、当初の分布調査で、見落した遺跡を発見する目的で再度分布調査を専門委員と県・市教育委員会関係者が協力して開始した。再度の分布調査は、その後も長期にわたって続行し、当初の分布調査であきらかになったものを含めて、古墳と思われるもの約100か所と土器の散布する場所1か所を数えるに至った。これらは、仮に№1～№70、A～Z、及びいろはに、などで記号を付し、1000分の1地形図に記入すると共に、現場を明示する棒杭と立札を立てた。また工事中にあやまって破壊することなどのないように、工事を担当した熊谷組の技術者のうち主に二沢敏明が常に立ちあって、遺跡現場の確認を行い、遺憾のないよう配意した。

昭和46年9月から、昭和47年8月に至る間の前後四次にわたる発掘調査は、やむなく破壊されるもの、法面被覆されるもの、及び古墳としてチェックした場所で露岩との見分けがつきにくいものについての確認調査、並びに遺跡の状況によって保存を含めた措置を検討し協議すべきものに限って行われた。その間、県教育委員会、市教育委員会、及び倉敷信販の三者協議と調査委員会の合同会議が三十数度にわたって開かれ、遺跡の取り扱いについての協議を重ねた。当初の覚書によって、遺跡の取り扱いについての原則は、三者間で合意に達していくても、当初の覚え書きどおり、工事の実際にあわせて具体化し施工中に現実化するには、法面の角度あるいは全体的な土量問題との兼ね合いなど、困難な条件が少なくなかった。そこで、設計図の変更を含む三者協議は時としては、団交にちかい様相を呈したが、それを幾度も繰り返していったのである。

発掘調査、確認調査、及び数次にわたる分布調査の結果明らかになった遺跡と工事中発見された1基の古墳は、図2と表1に示した通りである。

遺跡は、從来知られていた遺跡名を出来るだけ生かしながら、あらたには主として小字名をもついた名称を与え、分布調査時の仮ナンバーと対比した。後期古墳については、遺跡地図で從来西尾古墳群、日畠古墳群としていたものを8つの古墳群に区分した。確認調査の結果、露岩などであって遺跡と認められなかったものは省略したので、仮ナンバーに欠番が生じている。図2には、工事の結果、削平されたり、法面に被覆された部分を茶色にぬって示し、削平部分は法面の上端から、埋め部分は法面下端まで色づけした。表1にも保存、被覆、破壊など個々の遺跡の団地造成後の結果を明示した。尚、当初の覚書では、法面に被覆されることになっていたものの中に調査後、法面外に保存されることに変更されたものもあった。

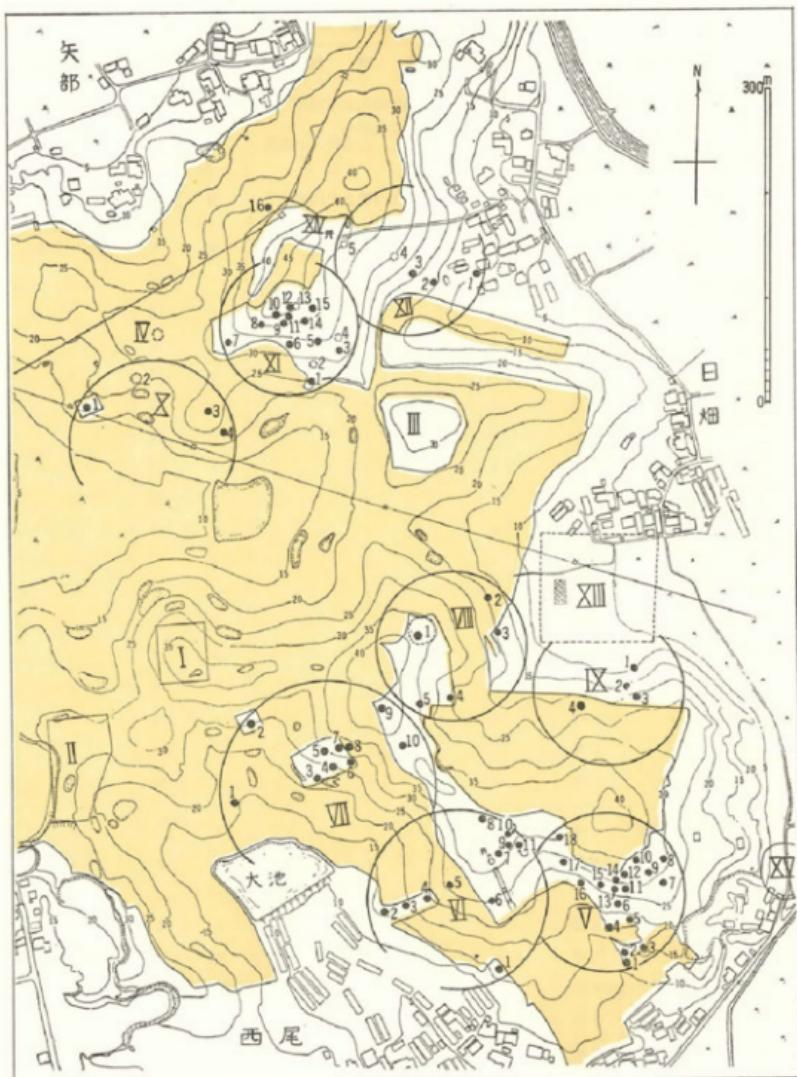


図2 王墓山丘陵の地形と遺跡

I 女男岩遺跡、II 辻山田遺跡、III 法伝山古墳、IV 西ノ平古墳、V 東谷古墳群、VI 真宮古墳群、VII 大池上古墳群、VIII 赤井西古墳群、IX 赤井南古墳群、X 半俵古墳群、XI 向山古墳群、XII 西山古墳群、XIII 日畠赤井廻寺、XIV 梶篠神社、XV 西尾貝塚

表1 王墓山丘陵の遺跡

No.	遺 跡 名	大 字 名	遺 跡 種 類	発掘調査 の有無	仮番号	工事後の結果
I	女男岩遺跡	西尾と 矢部の境	弥生時代末土墳墓	有	65	削平破壊
II	辻山田遺跡	西 尾	弥生後期～ 古墳時代土墳墓	有	65延長	〃
III	法伝山古墳	日 煙	方 墳	一部	69	域外保存
IV	西ノ平古墳	矢 部	もと円墳または方墳？	有	V	削平破壊
V 1	東谷古墳群 1号	西 尾	後 期 古 墳	無	W	保 存
V 2	〃 2号	〃	〃	〃	19	〃
V 3	〃 3号	〃	〃	〃	18	〃
V 4	〃 4号	〃	〃	〃	X	〃
V 5	〃 5号	〃	〃	〃	17	〃
V 6	〃 6号	〃	〃	〃	16	〃
V 7	〃 7号	〃	〃	〃	24	〃
V 8	〃 8号	〃	〃	〃	25	〃
V 9	〃 9号	〃	〃	〃	Z	〃
V 10	〃 10号	〃	〃	〃	23	〃
V 11	〃 11号	〃	〃	〃	Y	〃
V 12	〃 12号	〃	〃	〃	22	〃
V 13	〃 13号	〃	〃	〃	21	〃
V 14	〃 14号	〃	〃	〃	20	〃
V 15	〃 15号	〃	〃	〃	15	〃
V 16	〃 16号	〃	〃	〃	14	〃
V 17	〃 17号	〃	〃	〃	13	〃
V 18	〃 18号	〃	〃	〃	12	〃
VI 1	真宮古墳群 1号	〃	〃	〃	1	〃
VI 2	〃 2号	〃	〃	〃	2	〃
VI 3	〃 3号	〃	〃	〃	3	〃
VI 4	〃 4号	〃	〃	〃	4	〃
VI 5	〃 5号	〃	〃	有	5	破壊削平移築
VI 6	〃 6号(真宮古墳)	〃	〃	無	6	保 存
VI 7	〃 7号	〃	〃	〃	7	〃
VI 8	〃 8号	〃	〃	〃	8	〃
VI 9	〃 9号	〃	〃	〃	9	〃
VI 10	〃 10号	〃	〃	〃	10	〃
VI 11	〃 11号	〃	〃	〃	11	〃

II 宅地造成とともに遺跡対策と調査の経過

No.	遺 跡 名	大字名	遺 跡 種 類	発掘調査の有無	仮番号	工事後の結果
VII 1	大池上古墳群 1号	西 尾	後 期 古 墓	無	64	埋 没
# 2	# 2号	#	#	有	M	保 存
# 3	# 3号	#	#	無	41	#
# 4	# 4号	#	#	#	42	#
# 5	# 5号	#	#	#	43	#
# 6	# 6号	#	#	#	44	#
# 7	# 7号	#	#	#	45	#
# 8	# 8号	#	#	有	70	破壊削平移築
# 9	# 9号	#	#	無	27	保 存
# 10	# 10号	#	#	#	26	#
VIII 1	赤井西古墳群 (王墓山古墳) 1号	日 烟	#	#	62	保 存
# 2	赤井西古墳群 2号	#	#	有	O	法面埋没
# 3	# 3号	#	#	無	36	保 存
# 4	# 4号	#	#	有	35	#
# 5	# 5号	#	#	無	29	#
IX 1	赤井南古墳群 1号	#	#	#	38	#
# 2	# 2号	#	#	#	39	#
# 3	# 3号	#	#	有	40	#
# 4	# 4号	#	#	#	I	法面埋没
X 1	半依古墳群 1号	矢 部	#	#	I	保 存
# 2	# 2号	#	#	確認のみ	Q	破壊削平
# 3	# 3号	#	#	有	S	破壊削平移築
# 4	# 4号	#	#	#	R	#
XI 1	向山古墳群 1号	#	#	確認のみ	P	保 存
# 2	# 2号	#	#	無	59	#
# 3	# 3号	#	#	#	61	#
# 4	# 4号	#	#	#	55	#
# 5	# 5号	#	#	#	56	#
# 6	# 6号	#	#	#	58	#
# 7	# 7号	#	#	#	47	#
# 8	# 8号	#	#	#	48	#
# 9	# 9号	#	#	#	50	#
# 10	# 10号	#	#	#	49	#
# 11	# 11号	#	#	#	52	#

No.	遺跡名	大字名	遺跡種類	発掘調査の有無	仮番号	工事後の結果	
						保存	削除
XI 12	向山古墳群	12号	矢部	後期古墳	無	51	保存
# 13	#	13号	#	#	#	T	#
# 14	#	14号	#	#	#	53	#
# 15	#	15号	#	#	#	54	#
# 16	#	16号	#	#	有	1001	破壊削平移築
XII 1	西山古墳群	1号	日畠	#	無	63	保存
# 2	#	2号	#	#	#	ろ	#
# 3	#	3号	#	#	#	1002	#
# 4	#	4号	#	#	#	57	#
# 5	#	5号	#	#	#	い	#
XIII	日畠赤井廬寺址	#	寺院址	#	無	#	#
XIV	橋築神社	矢部	神社	#	#	#	#
XV	西尾貝塚	西尾	郷文貝塚	#	#	地域外	#

分布調査の開始から、発掘調査の終了まで約一年半にわたったが、その間、開発行為の許可は、関係法規の改正時にあたったこともあるって当初の予想に反して県段階においていちじるしく遅延し、昭和47年6月ようやくにして正式工事許可となった。工事申請から工事許可、正式着工までの期間が長期化したため、開発サイドの思惑とは逆に、調査の間に順次、明確にされてくる遺跡の状況と関連させながら、当初の覚書に記された遺跡のほかに新たに発見されてくる遺跡についてもその取扱いの協議を重ね保存努力をすることが出来た事実は、特異なケースとして指摘できよう。図2や図版第一の(2)にみるように、丘陵上で削平され宅地化された範囲が広大であるのに較べ、実際に保存された遺跡の数が多いのは、数群の後期古墳群が比較的まとまりをもった地点に集中していたことが、工事計画を変更して保存遺跡を多く出来た主要な原因であったと考えられる。しかし、削平部分が広大であったため、遺跡の環境としての丘陵の旧地形は、著しく変更されてしまった事実をおおうことは出来ない。

以上が、開発行為に対応した概略であるが、以下その間に行われた発掘調査とその後の経過の要約を示す。発掘調査には、専門委員間壁忠彦・間駒蔵子が終始たずさわり、専門委員小野一臣と、補助調査員山本雅靖（当時岡山大学学生）が調査期間の大半にわたって加わった。また、調査期間の一部に岡山県教育委員会の伊藤晃、新東晃一が参加し、補助調査員として玉島高校地歴部O・B、武政基、三宅幸治、中野隆重、片山康夫、藤原昌史、白神一義、守分幸弘とそれに加えて古谷野寿郎（当時北海道学芸大学学生）、竹田勝（当時立正大学学生）、島巡賢二（当時明治大学学生）、力武卓治（同前）が一部期間参加したほか、玉島高校地歴部員と藤田憲司（当時倉敷民芸館）も一部期間調査に加わった。さらに、調査の全期間を通じ、熊谷組及び四俵工務店の協力を得た。その間、倉敷市教育委員会の三宅展夫、佐藤喜佐士、三宅正広、武田俊宏、中桐貞子は終始庶務関係を担当した。尚、

発掘調査の届出は、文化財調査委員会から文化財保護法第57条にもとづいて届出を行い、調査後さらに協議を行って、やむなく破壊に至るものについては、あらためて倉敷市から文化財保護法第57条の2にもとづき届出のを原則とした。

〔第一次調査〕 昭和46年9月13日～22日

真宮古墳群5号（仮5号）封土と蓋石を失った横穴式石室、既に盗掘を受けていたが、若干の遺物が床面に残存。団地の南から入る中央道路予定地にあたり、この古墳の東西にも一連の古墳が存在し、どうしてもさけられないという。石室は、団地の縁地内に移転復原することになる。

女男岩付近の上器片発見地点（仮65号）の調査は、当初の地点周辺は再堆積土と判明したが、その西方から北方にのびた小台地上に有機土とともに弥生後期末の遺構を確認したので、女男岩遺跡と名づけ、覚書以後新発見遺跡として、保存を含めた取扱いの協議を必要とするので調査を中止した。ほかに数か所、分布調査で、チェックした場所で、古墳か露岩か不明な地点を調査し、露岩であることを確認した。

〔第二次調査〕 昭和46年12月24日～昭和47年2月21日。

新規発見の女男岩遺跡が協議の結果、さらに遺跡の性格をあきらかにして再度協議を行うことになったので、この調査を行う。弥生時代終末期の土墳墓群遺跡で、古くより既に畠地として削平が進み、遺構検出が困難な部分が多く、検出される遺構がきわめて複雑な様相を示したので、寒気厳しい中を長期間にわたる調査となつた。

西尾大池上古墳群2号（仮M号）、同8号（仮70号）、日烟赤井南古墳群3号（仮40号）を調査、いずれも横穴式石室で天井石を失ない、床面もあらされてしまっていた。西尾大池上古墳群8号（仮70号）は特に石室残存部すら少なかったが、日烟赤井南古墳群3号（仮40号）は、談道部から外方にむかって排水施設が残存していた。赤井南古墳群3号は、協議の末、法面外に保存、大池上古墳群2号は、団地内に保存とされる。大池上古墳群8号は移築になる。

仮69号地点は、再分布調査で埴輪片一片を採集されていただけであったが、トレンチを入れ、一部埴輪列を確認、埴丘は著しく変形しているが、本来は大形の方墳であったことが判明したので調査を打ち切り、協議の結果、団地外の地蔵として残された。この方墳は、從来その存在が知られていないかったものであったから、土地の人々の呼び名に従って法伝山古墳と呼ぶことにした。

また、法伝山古墳から西方へ延びる尾根上でも埴輪を採集した地点仮V号があり、トレンチ調査を行ったところ、埴丘を全く失い、再堆積した埴輪片が出土する地点を一か所確認した。本来は、この尾根上に1基の古墳が存在したことが知られ、これを西ノ平古墳と呼ぶ。この西ノ平古墳の存在する尾根上で西方にのびる台地上全体にわたり広くトレンチ調査したが、他に遺跡は見当らなかつた。

そのほか、西尾大池上古墳群周辺で、露岩か石室か不明な場所数か所を確認調査したが、1個所で中世上器片が含まれた地点を認めただけで、他は露岩であった。中世上器片を包含した地点も、畠などで削平が進み、遺構の性格を知ることが出来るほどのものではなかつた。

〔第三次調査〕 昭和47年6月9日～6月17日

半依古墳群の調査を行う。3号（仮S号）は、横穴式石室の床面と奥壁がかろうじて残存したものであり、4号（仮R号）は、横穴式石室の奥部のみが残存していた。他に1号（仮は号）は、横穴式

石室の残存が認められたので、発掘せず協議の上緑地内保存とされる。2号（仮Q号）は畠の岸に本来、横穴式石室を構成していたと思われる石1個がようやく残っているだけであった。3号（仮S号）4号（仮R号）は、破壊・移築とされる。

そのほか、造成地内、北西部一帯で、古墳か露岩かを決定すべき地点、数箇所を調査したが、向山古墳群1号（仮P号）をのぞき、全て、露岩であるとわかった。向山古墳群1号（仮P号）は、一部造成計画を変更して、保存地域にとりこむことになった。

〔第四次調査〕 昭和47年7月17日～8月18日

赤井西古墳群（王墓山古墳を含む古墳群）の2号（仮O号）、4号（仮35号）の調査を行う。2号は、斜面に山側片側の壁だけが残った横穴式石室で、4号は天井石の大部分と羨道部を失った横穴式石室であった。2号（仮O号）は、法面に被覆されることになったが、4号（仮35号）は、保存地域の末端に保存されることになった。そのほか、赤井西古墳群中で、露岩か石室かを確認する必要あるもの数か所を調査し、露岩であることを確かめた。

赤井南古墳群でも、数か所で露岩か古墳かの確認調査を行い、4号（仮I号）1基をのぞき他の場所は露岩であると判明した。4号については調査を行い、山側の片壁だけがおもに残る横穴式石室であった。4号（仮I号）は、法面に被覆されることになった。

第四次調査中、造成地内の矢部に属する北斜面で、あたかも箱式石棺を思わせるような形骸化した横穴式石室向山古墳群16号（仮1001号）が工事中発見され、遺跡発見届を提出するとともに、これを調査した。のちに協議の末破壊移築とされる。さらに、女男岩遺跡西方の尾根上で土器散布地が発見され、調査の結果、畠によって著しく削平されてはいるが、土墳墓群であることがわかり、台地上を広範囲にわたり発掘調査した。この遺跡は小字名をとて、辻山田遺跡としたが、女男岩遺跡と共に削平され宅地化されることになった。また、工事終末期に緑地内に通路を造成中、西山3号墳（仮1002号）が発見されたが、これは保存とされる。

以上が、開発計画の申請以後、遺跡問題にとりくんだ経過と、発掘調査の概要である。その間また、その後にわたり関係者による現場確認とそれにもとづく協議を重ねたにもかかわらず、例えば、若干の埋土をして保存すると決定していた西尾大池上古墳群1号（仮64号）が、埋土したのち、宅地として売却されてしまうというような失敗も生じたのであった。これを受け、昭和48年11月に、県・市教育委員会、倉敷信販の三者の間で、保存遺跡の取扱いについて、最終の覚書をとりきめた中に、倉敷信販は、買収地内で遺跡が保存されている土地は、国あるいは地方公共団体以外のものには譲渡しない旨を書き加えたのである。

III 女男岩遺跡

間壁忠彦・間壁蔵子

一、遺跡の立地(図版第二の(1)、図1、2)

王墓山丘陵は先に記した通り、倉敷市西尾、日畠、矢部のそれぞれの地区にまたがっている。西尾地区は、丘陵の南面した一帯で、その南面した山裾には西尾部落がある。日畠は、西尾地区を除いた丘陵の東半に当たり、ここも東面した裾に日畠部落がある。矢部地区は西北部に当たる。

女男岩遺跡は西尾地区内の北端部で、標高30mばかりの東から西へのびた小尾根上の一峠にある。この尾根上に矢部と西尾の境界があり、遺跡の中心はむしろ矢部地区内にひろがる。遺跡上からのぞむと南には広い沖積地が眺められ、上東遺跡は真南の眼下である。また北に目を転ずると、東側の平野から西に入り込んだ矢部の平地が見られ、そこには旧山陽道及び、その道近く奈良時代の矢部廃寺址も上東遺跡とはほぼ同じ近さに見られる。北西には造山古墳の雄大な前方後円墳の墳頂部が矢部部落西方の峠越しに小丘陵のようにのぞまれる。東に尾根をたどると女男岩の尾根より10m弱高い南北の尾根筋に達するが、この尾根の北端近くに王墓山古墳(赤井西1号)がある。

女男岩の地名は、巨大な二つの転石が、やや平坦な尾根上に相接して立つことから由来したとも思われるが、遺跡はこの二つの岩より、なお西に50m近くのびた地点で、1mばかり段状に高くなった部分と、そこから北へ、20mあまりのびた舌状の尾根上、及び、段状に高くなった部分の南で、小さい溜池が掘られていた部分に拡がっていたものと思われる。北の舌状部周辺は畑となり、周辺は段々畑に変形されていて、遺跡は最上段と、二段目の畑に拡がっていた。

二、遺跡の状況

A 弥生時代終末期の墳墓構造(図版第二の(2)、図2、3)

遺跡の主体は山林と畑であったが、宅地予定地となった段階で数度にわたって行われた分布調査では、遺跡として全く確認されない状況にあった。しかし山林伐採が始まり、木を切りおろすための道路が付けられた段階で、尾根に立つ二つの岩近くで、全く小片の弥生とも土師とも判定出来ぬ状況の土器片を採集したことでの可能性が推定された。最初は、二つの立岩が、いずれの時期かの信仰の対象である可能性も考えられ、この岩の周辺の調査を行った。しかし、岩周辺の尾根上の平坦部は、山の地肌がすぐ露出しており、全く何の遺構、遺物も発見されなかつた。また、最初に発見された土器の小細片も、尾根のやや凹部になった部分に、再堆積状になって入ったもので、極めて僅かなものである事が確認されたのである。しかし、再堆積ならば、特に遠隔地より土砂が運ばれた状態でないため、本来の遺構が、何処か近くにあるものとの推定で、特に二つの岩より、西に長く延びたやや平坦な尾根上に、トレンチを入れて確認調査を行った。このトレンチ調査は、遺跡の可能性の考えられる尾根上全域に及んだ。これにより、二つの岩より、40mも西寄りで、先の小土器片出土地と同様に、再堆積の遺物包含層を発見した。ここは本米、尾根幅のせまかった部分に、土砂を加えて、平坦な畑地にしたものであった。ここに遺物は、有機土層と共に運ばれていて、本米、遺物は、有機土層中に包含されることが知られたのである。

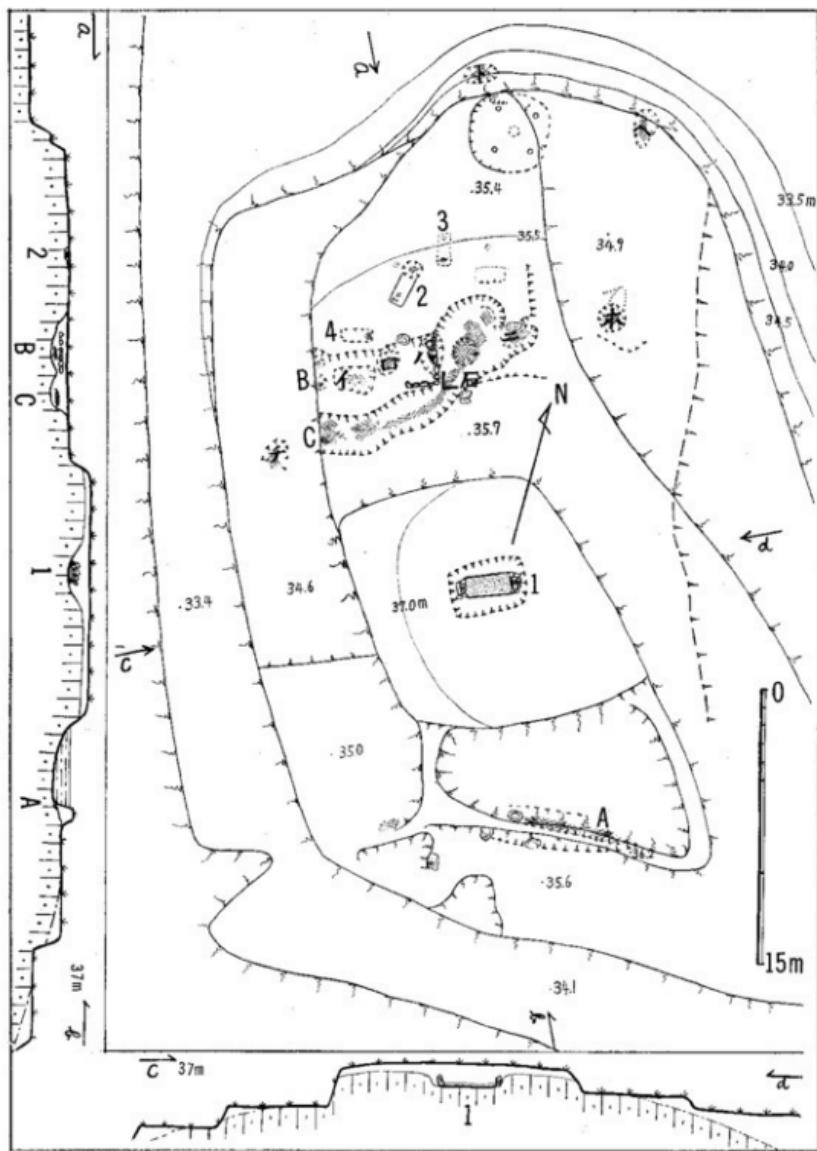


図3 女男岩遺跡全形図

続いて、1mばかり段状に高くなった部分と、そこより一段低くなつて北に延びた小尾根で確認調査を行つたが、北にのびた舌状の台地上で始めて本來の遺跡が確認出来たのである。しかし、これ等の尾根上面には、全く遺物の小片すら認められず、ここの以前の地主が調査により明らかとなつた遺構に伴う石や土器を見て、70年来類として使用して來たが、全く予想も出来ないことだった、と話した様な状態であった。

現存した遺構の概略を見ると、一段高くなつた中央部の高所にはほぼ中央に一個の巨大な土壙が存在したのみであった。これに対し、南は小さな溜池になっており、この池の南側土手の下に、わずかに有機土層が残り、この中に土器を包含していた。なお、池は、旧地主の言によると、明治末年頃作られたらしい、ここを掘った土を、先に見た尾根上に廃棄している旨で、先の再堆積の遺物は、すべてこの部分のものと思われた。また実際に、池の南で残存したわずかな包含層中の土器片と、再堆積の土器片中に同一個体と確認されたものがあり、この伝えは正確と考えられた。そのため、中央の高所部分の南側の一段低い地点は、かつてはかなりな有機土と土器を包含する状態だったと思われた。

北に延びる舌状の台地上では、遺跡は複雑な様相を示した。高所部のすぐ北側では、ほぼ東西に尾根を切る様に溝が掘られ、この中に有機土が厚くつまり、その中に多数の土器、礫が放置されていた。また、この溝も単純に東西に延びるだけでなく、途中で北にカーブしていた。また、それより北方には土壙墓敷基が認められ、台地の北端では、弥生時代中期の住居の一部が発見されたのである。またこの地点より一段低い畠面にも遺構はのびていたのである。

以下、各遺構についてそれぞれに記述する。なお図3に示した略号は、正確に土壙墓と推定されるものは「1、2、3……」溝状遺構は「A、B、C……」その他穴状に掘られた墳墓か否か不明の遺構

及び土器溜り状の遺構は「イ、ロ、ハ……」で示した。

1) 中央土壙墓(土壙墓1)(図版第四、図4)

女男岩の尾根の西端近くで、一段と高くなつたこの地点は、東、北及び南の小池の土手などとの比高が1m前後である。西面では2~2.5mの差を持って、下段の畠になる。この高所は不整形な菱形を呈し、北で

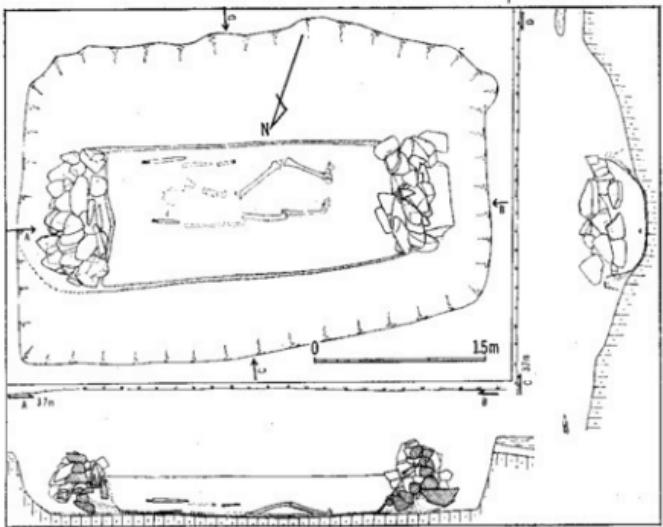


図4 中央土壙墓(土壙墓1)

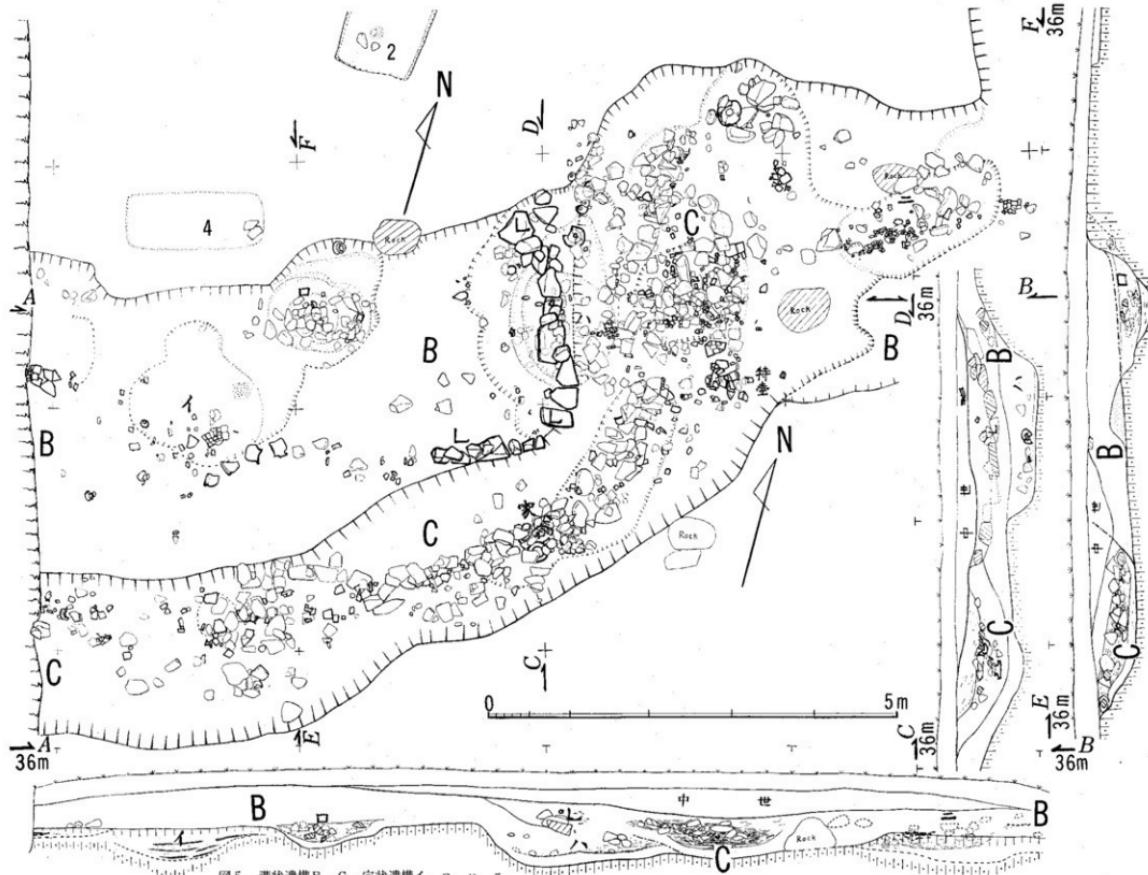
約10m、南と東で13m、西12mを計る。上面はほとんど平坦である。発掘により明らかになった地山面のみで見るとここは尾根上の自然の盛り上り部の状況を示しており、段状の部分は、明らかに下段の畑地の面で地山が切り込まれ、古い時期からの畑造成の為の変形がうかがえた。また高所頂部は、他の下段の畑地部分より地山までの土層が厚く、30~40cmあり、このほぼ中間に厚さ5~10cmにわたって、黒灰色を帯びた土層が続いている。土壤墓は、この高所平坦部のはば中央に東西に長軸を置いて掘り込まれていたが、この土壤墓の掘り込みの上面には、黒灰色バンド状の土層は見られないことから、土壤墓の掘り込みはこの黒灰色土層を切って掘り込まれたことが知られる。また、周辺に比して、ここが最も高所であることから、黒灰色バンドより上の層が、後に周辺より流入したとも思われず、土質が周辺の地山に近似して他の混入物を見ない点などから見て、土壤墓を作った際の盛土の可能性が強い。黒灰色の土層は他の地点の有機土層と比較するとかなり異ったもので、この面で特殊なことが行われたとみるより、土壤墓を掘り込む時の地表だったものと思われる。

また、四周の状況は畑地によって変形されており、本来の形態は不明であるが、地山の様子などから、いわゆる地山を削り出した台状形をすぐ予想することは出来ない。ただ、この土壤墓が作られた時、この部分は、明らかに、周辺より高所であり、それが、あたかも、円ないしは方形に見えうる状態であったことはうかがえるのである。

土壤墓は、掘り込みの上端で長約4m、幅2.5m、底面はゆるい凹形を呈して大きく地山面を掘り込んでおり、この掘り込みの真中に小口に石積みをした粘土床が見られた。粘土床のみの幅は東で125cm、西で105cm、長さは約250cmであるが、この短辺部の両側に主に長30~40cm位の自然石を積んでいる。粘土床の床面はU字底であるが、かなりゆるいカーブを呈する。粘土は、1~4cm位の厚さで、床面全面を覆っているが、肉縁の部分で厚く、底はうすい。全面に朱が使用されていたが、この朱の面の上面には、僅かな粘土が覆われるのみであったため、ここに元来木棺が使用されていても、棺の蓋の上面まで全面粘土で被覆したとは思われない状況であった。

この粘土床上には、東に頭を置いた一体の人骨の残欠が認められ、脚部の一部は粉状になりながらようやく形をとどめていたが、上半身は全く骨粉状態であった。頭部周辺は特に朱が濃厚であり、頭部の両側に剣形鉄器が切先を足の方に向けて夫々一本ずつ納められていたが、他の副葬品は一際認められなかった。

頸部と脚部の小口に当る石積は、粘土床の幅をほとんどはみ出すことなく、詰め込む様に土壤壁と木棺の間にきっちり積まれていたと推定される状況にあり、足部の最下段には、かなり大きい上面の平たい石を置いていたが、積み方に特に規則性は見られない。また粘土も明らかに石の下面に括がっており、石と石との間にも一部詰め込まれていた。粘土床上に置かれたと思われる木棺は、粘土床底断面がゆるいU字形で一方がやや括がる状態から、底面の丸い木棺を想像させる。石積みのある面には、粘土床に小口板の存在を思われる痕跡は認められなかった。要するに粘土床の状況から見て、土壤下面に粘土を敷き、その上に幅125~105cm、長さ250cmの底面がゆるやかなU字形をした木棺をおき、その小口両端に石が積まれた状況であった。その石積みは、単に形式的に棺の両側に石をおいたと言う以上に、木棺の小口を石積みで覆うという機能的な意味をもつものの様に見られたのである。この土壤墓を遺跡全体の様相から、中央土壤墓と呼ぶことにした。



2) 南側溜池の土手部造構（溝A）（図6）

中央高所の南側の小溜池は長さ約13m、幅8~5m、深さは最深部でも土手上面から2.5~3m程度であった。しかし、池の底面はただちに地山であり、全く造構は認められず、南の土手の下部分にのみ僅かに造構が残存した。土手の上半0.7~1mは後の盛土で、その下にかろうじて本来の土層を残しており、黒色の有機分の強い土層がほぼ土手に平行して東西に約7m残されていた。また、この土層は土手の南側では認められず、もともとはあたかも中央土墳墓の長軸に平行するかのような溝状の掘り込みのように思われた。しかし、部分的に深かったり、有機土層の状況にちがいがあり、綺麗に掘り込まれた溝とは認めがたいし、池の底で破壊されてしまっていると推定される多くの部分の状態が不明のため、正確な造構の形状は不明である。西と東の土手には造構は存在しなかった。

3) 北台地上の造構（図版第三）

a 溝状造構（溝B、溝C）（図版第五、図5）

中央土墳のある高所の北側は、地山まで切り込んで段々畑として平坦に整地されていたが、この段部より3mばかり北寄りに地山を掘り込んで溝状造構がほぼ東西に尾根を切っていた。しかし、これは単純に尾根を区切ったものではなく、幾度かにわたる造構の重なりが見られる状況であった。

溝状造構は西端で段々畑によって切り取られ、下段に続きが確認されないところから、従来の地形で北にのびた尾根の高い部分のみに掘られていたものと思われ、現状より大きく西へ延びていたものではないであろう。東は西端より12~13mあたりで、地山面が下るのに従って自然に消滅している形

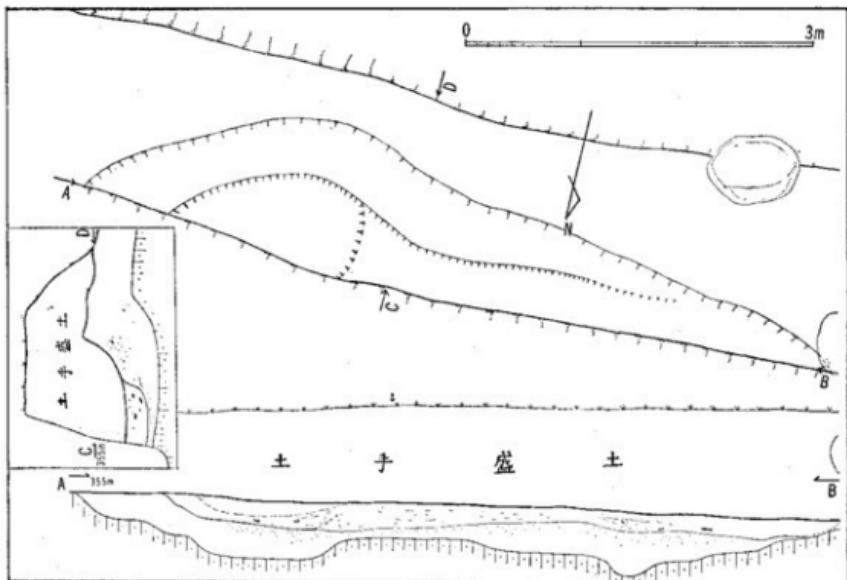


図6 南側溜池の土手部造構（溝A）

である。溝幅は西で6m、東では3mであるが決してこの溝は一続きのものではない。特に溝の西半部の状況を見ると、二つの溝がほぼ平行して切り合っている。溝の北半部で幅4mの間は、南側2m幅のものと比較して全体に底面が20~30cm浅く平坦になっており、その中には数か所にわたり深い円形か梢円形の掘り込みがある。これに対して溝の南半はU字状の底で続いている。この北半の溝を溝Bとし、南半のものを溝Cとした。北半の溝Bと一連と思われるものは東端では直角に北に曲るようと思われ、この部分では溝幅は3mになり自然消滅している。これだけを見ると舌状の尾根の北半をあたかも地山を削って方形台状にしたかにも思われるが、西側は下段の畠により変形され、北側は自然地形が徐々に低くなるだけで尾根への加工は認められず、溝Bが台状部を作る加工の跡だとも言えない。また、この溝Bは地山を20~50cm掘り込んでおり、有機分を含む土層で覆われているが、あまり有機分は多くなく、特にこの溝に伴うと思われるような多量の土器片は見られなかった。

一方いま一つ、溝Cとしたものは同じ溝の中にありながら、幅2m前後で不整形な曲線を描きながら先の溝Bを横切るように北へ向いてカーブしており、尾根中央部付近で最も深くなつて終っている。全体として地山を50~60cm掘り込み溝Bより深い。

また、この溝Cの中には濃い黒褐色の有機土がつまり、溝の底面より10~30cm上部で、最も有機分の多い土層中に数多くの径10~20cmの自然石が投棄されたように存在し、この石と共に多数の土器も放棄された状況で破片となり重なり合つて包含されていた。この状況は、明らかに溝Bの部分と異質であり、有機土の堆積状況は明らかに溝Bの南側部分を侵削して溝Cが作られたことを示していた。

溝Cについていま少し詳しく見ると、西側部分では溝Bの南側を切っていたが、東に移るにつれて溝Bを横切るようにカーブして来る。しかし、この溝Cも底面は同じ深さでなく10~20cmの高低が見られ、部分的に多少グループ化できる状況を呈し、むしろ数度にわたって掘りつがれた観もある。特に、西端部分とカーブした部分および北に向きを変えた部分では底面の高さと共に有機土、土器の入り方に多少変化が見られた。しかし、これ等を正確に区別出来るほどの変化は見られないものであった。ただこの溝Cの中で、中央部のカーブした付近からは台付家形土器（図11の1）の台脚部が石にはさまれながらあまり散乱することなくほぼ原形をとどめて発見され、その近くから大壺（図12の76）の主な部分も発見され、これ等が同時に使用されここに置かれたものであることは疑えなかつた。ただ家形土器の家の部分は溝中に散乱していたが、主に台脚より西部部分の溝Cの中に散布していた。また同地点出土の大壺においても同様の結果が窺えた。これは、この家形土器などが置かれた時、溝の中には有機土層となるもの及びその土を覆うように置かれた大小の自然石の間に多くの土器が混在し、特に家形部分は露出して置かれた可能性が考えられる。これが後に倒壊して、特に上部に当る家の部分はより多く溝の中に散乱したものであらう。しかし散乱する場合、溝Bの方へ入らず溝Cの中だけで、それも台脚部が東に向いて倒れていたにもかかわらず、上部の家形が西半部に主体を置いて散乱することはかなり偶然性があるかも知れないが、この土器が倒れた頃に溝Cの西半はすでに溝状になっていたが、溝Bの方はすでに埋まって溝Cより高かったことが考えられる。ここにも溝Bより溝Cが後の遺構と思われる根拠がある。

家形土器の出土した部分よりすこし東寄りで、溝Cがやや不明瞭に括りかけるあたりは石の密集

度が少なくなるが、ここに大形の特殊壺（図15の1）が破片となりながらもほぼ原形を保って存在した。これが台付家形土器と全く同時に置かれたものか否かは遺跡の状況では不明であるが、この土器及びその近くで発見された大形壺（図14の34）の二点の破片は、その周辺とそこより西へ続く溝Cの中だけで発見されている状況は、先の家形土器の場合と同様であった。なお、特殊壺の頸部の中に碗形土器一個がすっぽり入っていた。大きさから見て決して壺の口から入れることの出来ないものなので、土器が破損した折りたまたま傍に置かれていたものが入ったのであろう。

特殊壺の出土地点のすぐ北側の一画には溝C中でも最も深く最も厚く濃い有機土層と多量の土器・石の出土した地点である。特にこの部分で注目されるのは、多数出土している、特に水漉した土を用いたと思われる高杯の表面が著しく磨滅していることである。これはかなり長期にわたって露出していたことを物語るように思われ、この地点は長く溝状のままであったことが知られるのである。またこの部分の最上部だけにレンズ状に中世の有機土層が残存することは、ここが他の地点より長く凹部になっていたことを示すものであろう。

なお溝Cは、この最深部付近で形が不明瞭となり北や東にも続くかに見えるが、溝底の状態や石、土器の包含状態にややちがいがあり、特に東のものは別の遺構と思われるものである。

また、この溝C中で発見された土器は、かなり原形に近い形で発見されるものもあったが、それすら破片が散乱しており全体として破片が周辺に散っている。特に大型の壺などがかなり細片となっていることから、長期の間に崩れたり土圧で割れたと言う状態でなく、意識的に否かにかかわらず一緒に入れられた石などで破碎されたもの様に思われた。

b 溝内の穴状遺構（図5）

溝B、溝Cが複雑に切り合った状態の中で、さらに遺構を複雑にしたのは溝Bの中に存在する数個の穴状遺構である。これ等は溝がある程度埋まつたか、埋められたかした段階で改めて掘り込まれた様相を呈する。径1~2mの不整形な円や楕円に近い形をしており、底の深さはまちまちである。多くのものは有機土と石、土器を伴っており、その意味では溝Cの性格に類似する。しかし溝Cの様な溝状は作らず、それぞれ単独に独立しており、形からだけでは上墳墓の可能性もある。しかし後述するように、同一地点近くに長方形の確実に墓域と思われる土壤の存在から、一応土墳墓とすることを避けて区別するために穴状遺構として別に扱ったものである。

穴状遺構（イ）

溝B中では一番西寄りにあり、明瞭な掘り込みは不明だが1.5mばかりの不整形な円形をし、底は溝Bの底面よりなお40cmは下つてゆるい凹形を作っている。この穴状遺構（イ）は、底より20~30cmにわたって焼土・灰・炭の層が幾層かに互層を成していく、その上部に土器を伴うが石は数少ない。女男岩の遺構全体を通じて焼土や炭を明瞭に伴つたのはこの穴状遺構だけである。

なお、この穴状遺構（イ）の西で畠の縁にあたる部分が多少凹部となり、やや有機分を含みここにも一群の土器が存在した。ここにも別個の穴状遺構があったものと思われるが、畠になる際大部分が切り取られたものと思う。

穴状遺構（ロ）

穴状遺構（イ）のすぐ東に接する様に、径1.2~1.3mの不整形な円形の凹部を作るものである。

溝Bの底面より30~20cm深い。この凹部では底面より10cmばかり上から有機土層がレンズ状に堆積しており、その中にかなりの量の自然石が集中して見られた。有機土層面は、溝Bの底面より明らかに上から存在するので、これはこの穴が掘られた際、溝Bの掘込み上にはかなり土砂が堆積していたことを示したものにほかならない。

穴 状 遺 構 (ハ)

穴状遺構(ロ)の東1mのあたりから幅1.5m、長さ3m近くに及ぶ大変不整形な楕円形をなす大型の掘り込みがあり、これを穴状遺構(ハ)とする。この東半部分は、溝Cが溝Bを横切って北向きになる部分と切り合っており、明らかにこの穴状遺構(ハ)が溝Cによって切られており、溝Cより以前の遺構であることを示している。穴状遺構中では最も深く、溝Bの底面より50~60cm深く、溝Cの最も深い部分よりなお僅かながら深い。この穴状遺構(ハ)も凹み底で、特に深い部分は径1.5m前後の円形だったと思われ、この部分に特に有機土層、石、土器が多くあった。この土壤の掘り込み縁の部分に小形の高杯などと同質の胎土をもつ台付小壺形土器が一個完形で置かれていた。なお、この土壤に伴う土器の同一個体片が穴状遺構(イ)の周辺まで散乱していたが、溝C中では全く発見されなかった。

穴 状 遺 構 (ニ)

穴状遺構(ハ)から溝Cをへだてて更に東に短径1m、長径2mばかりの凹部があり、ここにも有機土層、石、土器の集まりが見られた。ここは溝Cとの区別が分明でなく切り合いも判明しないが、溝Cの状態からまずこの凹部は他の穴状遺構と同じ性格のものと思われた。

この穴状遺構の中の土器は特に細片が多くあたかも破碎されたかの様子を呈するが、一個、これも胎土が高杯などと同じで大変小形の台付小壺形土器が掘り込みの縁近くではほぼ原形で発見された。

また、土製の勾玉二個もこの中から発見された。

いま一つこの穴状遺構と、溝Cとの交点の北寄りで石と土器が集まつた部分がある。溝Cの土器や石の群とも穴状遺構(ニ)ともやや離れているので、あるいは別の穴状遺構が一個存在するのかも知れない。しかし、或いは溝Cの延長であるかも知れないが、溝C自体が一時に作られたのでない可能性の強いことから、この北端の一帯のまとまりも別個に掘られた穴状遺構の性格が強いものかも知れない。ここの一帯の土器の中には、無頬壺で、胴部がやや偏平に横に張ったほぼ同形の壺が二個あり、そのうちの一個は天地が逆転しながらも完形で発見された。壺底には用い得ない大きさである為に他の土器と同様に考えられるが、多くの土器が細片化した中にあってはほぼ完形であったのは注目される。

c 溝外の穴状遺構(図7)

以上(イ)~(ニ)までの穴状遺構と、この外にも二個存在したかも知れない穴状遺構はすべて溝Bの中に作られたものであった。しかしこの二個は溝Bよりはずれるものである。

穴 状 遺 構 (ホ)

穴状遺構(ホ)よりさらに東に3m強寄つたあたりに径1.5m弱の掘り込みがあり、この掘り込みは北に浅くなりながらやや延びている。不整形な円形に掘られた部分は、地山が10~20cm掘り込まれていた。他の土壤と同様に有機土が多く、土器を含むし、その上面近くに自然石がかなり置かれていた。

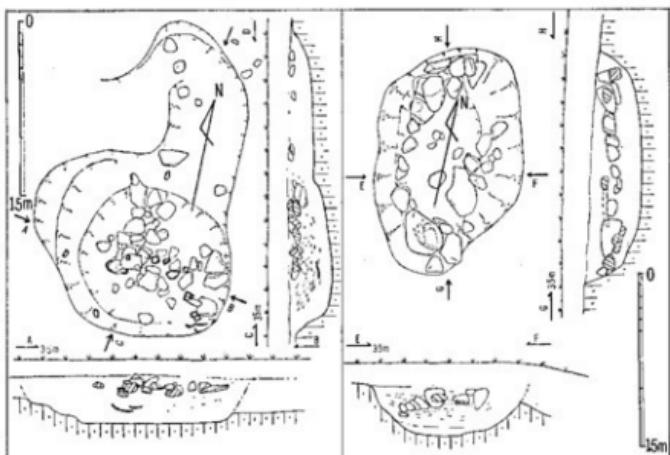


図7 穴状遺構 左「ホ」右「ヘ」

た。丁度溝Bの延長上にあり、性格的にも（イ～ニ）までの穴状遺構と全く同じもの様に思われる。

穴状遺構（～）
穴状遺構（ホ）
よりほぼ北に8m
ばかり寄った所に
いま一つ穴状遺構
がある。これも南北に長く、長径2m、短径1.3mの

やや不整形な椭円形を呈する。底面は地山より40cmは掘り込まれている。この穴状遺構も有機土があり石を伴う。しかしこの土壤の石は、他の土壤内の石に比べて大形のものが多く、特に穴の西側縁辺近くに並べたように置かれていた。やはり底面より20～30cm高い位置である。土器も僅かながら伴う。

穴状遺構（ト）

北に延びた舌状台地のはずれで、ほぼ台地の中央部にあたり、段々畑の上段より下段にうつる途中のややゆるくなつた斜面に一個の土器溜りが発見された。だが、これは畑のため削られて一部が残存したのみのため詳細は不明である。しかし、他の土壤と同様に円または椭円形で同規模であり、有機土と石を伴うものであった。

d L字状石列（図5）

溝B、Cのほぼ中央部で、ちょうど穴状遺構（ヘ）の直上でもあり、溝Bと溝Cが切り合う部分でもある地点の上部に、北は溝Bの北側縁辺から始まって、南は溝Bを溝Cが切る部分の直上まで約3m、そこで西へ直角に曲って約2mの間にやや大形で、かなり整った形の自然石が南と東に面をそろえるような形でL字状に並べられていた。この石列は、溝の中の石の面よりやや高く、溝の中の不規則に入れられた石とは明らかに性格を異にしていると思われる。

また、この石列は溝Bの中の穴状遺構などよりはるかに上にあり、また、あたかも溝Cがカーブを描いて曲るその角の縁の上にL字に置かれたかにも見える。溝Cは、このL字状の石列をさかいにして掘り込まっているかにも見えるのである。

この石列の上部にはなお一部有機土層があり遺物も包含するが、他の溝とか穴状遺構で石の周辺と下の部分に多くの有機土層が存在した状況とは全く逆である。この点から見ても、また石が並んでいる点から見ても、他の石と同様には扱えず、むしろ、溝Bが埋まって来てその外に溝Cが掘られる段階で、溝Bだった部分の上に溝Cを掘った時、土が柔らかいために形が崩れないよう角の部分を補強

しているかとも思われる状態であった。L字石の上の有機土はおそらく溝Bや、そこに掘られた穴状遺構の上部で、現在では流失してしまっている部分に包含された有機土から流出したものであろう。

e 土 墓 (図8)

溝Bがほぼ東西に延びている北側は、浅い耕土の直下はすぐ山肌となっていた。しかしここの部分に掘り込まれた土壙墓の痕跡を僅かにとどめるものが2、3存在した。

土 墓 (2)

土壙墓(2)は、台地の平坦部のはば中央に長軸を南西—北東に置いて、長辺1.8m、短辺1mのほぼ長方形に掘り込まれていた。残存する深さは、地山面からの掘り込みが5~10cmにすぎない。底面は、北西方向に僅かに傾斜しているが平らである。この点は同じ土壙でも、溝Bの中などで発見された穴状遺構とは大きな違いがある。

南東側に二個の小さい自然石と、その石の北寄りに径20cmばかりのうすく朱の散った面が認められただけで他に何の出土品も見ない。石はおそらく枕石か木棺の下のつめ石であり、朱は頭部近くに存在するものであろう。まず墓壙とみて間違いないものである。

この土壙墓で注目されるのは、長方形の土壙の足の部分の一部と切り合って、径1mばかりの円形の穴状遺構が存在することである。切り合いの様子からは両者の先後関係は付け難い。この穴状遺構も他の穴状遺構同様に凹み底で有機土を含み石が入れられていたが、確実に伴う土器は発見されなかつた。

土 墓 (3)

土壙墓(2)の北端より1mばかり東寄りに南北に長軸を置いた形で、幅60~70cm長さ推定2mばかりのやはり長方形だったと思われる掘込みがある。しかし、上面の多くは削平されたか流失したかにより長方形の輪廓さえも明らかでない。ただ、南側部分が深く、ここには有機土と数個の石があり、北側ではやや浅くなつて地山面にわずかに朱の散った部分が認められることで、ほぼ形の推定がつ

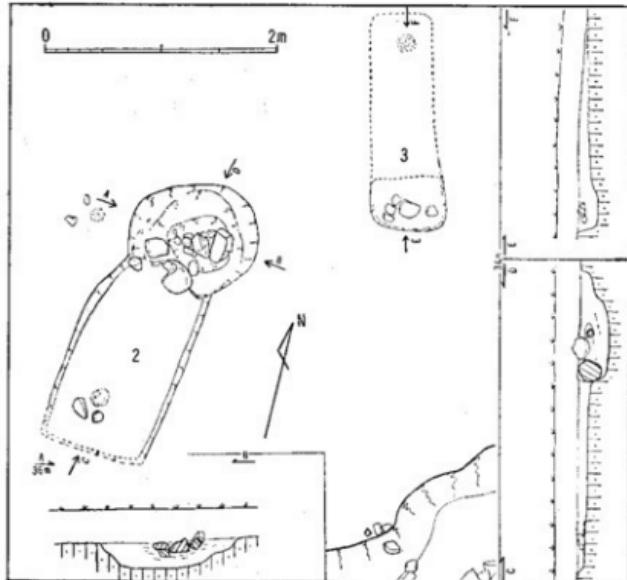


図8 土 墓 2, 3

く。底面は傾斜はするが平らである。他に何の伴出品もないのは土壙墓（2）と同様である。この土壙も南側で足部と思われる部分の続きにやや深く有機土や石を持つ部分があり、土壙墓（2）に付隨した穴状遺構と同様の性格のものかも知れない。

土壙墓（4）

溝Bの西端近くのすぐ北側に、溝に平行するかのように存在した長方形掘り込みの痕跡も、長さ1.7m、幅0.7mぐらいと推定され、東側に小さい自然石を二つ伴うこと、僅かながらその石の近くで朱が認められたことで土壙墓と推定したが、詳しい状況は判明しなかった。

その他にもこの北側で溝より北に位置した地点では、耕土を除くと山肌上にすぐ僅かに朱の散った部分が数か所発見された。これ等の周辺にも土壙墓のあった可能性が多い。いずれにしてもこの台地上は、かつて墳墓が存在した時期よりかなり上面が削られているものと思われる所以、この部分にはかなりの土壙墓が存在していたものと思われる。この状態は大きな土壙墓をただ一つのみ作った、中央部の高所との意味の違いを物語るものであろう。

4) 西側遺構

北側の舌状の台地と中央高所もふくめた地点の西側は、一段低いほぼ同高の段々畑になっている。中央高所との比高は約2.5m、北側台地との比高は約1m前後である。

この段々畑作成のため溝B、Cは共に断ち切られていて、末端の状態は不明である。溝が畑の西端に現われて来ないことから見て、本来溝底は多少高低差はあっても、従来の地形の高低にそって掘るようなことをせず、高い部分にだけ掘られたと思われる。現状では、一段低いこの西側では、溝Bが尾根を切るだけの形か、或いは、角を作つて曲り北にやや高い方形部を作るようになっていたのか不明と言わざるを得ない。

この西側の段々畑では、ほぼ中央部にあたる部分で、北端はあたかも溝Cの延長した部分かと思われるあたりからやや南へ不整形な浅い窪みがある。これを穴状遺構（ト）とする。この部分は有機分を含み、土器も包含したが深さは15~20cm程度だった。

これが元来溝Cに連らなっていたものか、穴状のものか或いは別の溝があったものか、上面を削られているため現状では判明しない。現状で穴状に残存するため、一応穴状遺構とした。なお、この穴の南側には統いて溝状のかなり深く長い掘り込みがあったが、有機土、土器、石などを含まず、他の溝とは全く性格を別にしているし、近くに近來、石を割ったくず石を入れる穴などがあったことから、この溝状のものは新しいと考えた。

また、この段々畑の南端で、溝Aを西に延長したあたりで、土器と有機土層が僅かながら認められたが、周辺の残存状態は悪く、遺構として正確にはとらえ得なかった。

なお、ほぼ遺跡をめぐる一帯は全面的に調査を行つたが、以上に記した遺構のほかには同時代のものは全く認められなかった。特に中央高所の東側部分では尾根に統いているため、或いは溝状の遺構でも存在するのではないかと思われたが、全く遺構は見られなかつたのである。

B 弥生時代住居址（図9）

女男岩遺跡は上記の墳墓遺構の他に弥生時代住居址も存在したが、全形のほぼ残存したものは、北

に舌状にのびて
畠となつた台地上の北端にある
一基のみであつた。この台地上
では他にも地山面に一、二柱穴
を思はず円形の
掘り込みがかす
かに認められた
がきわめて浅く、相互の関係
は確認されない
状態だった。そ
の他、弥生中期
の土器片若干が
発見されてい
る。

残存した住居
址は推定径約5
m、円形ではあ

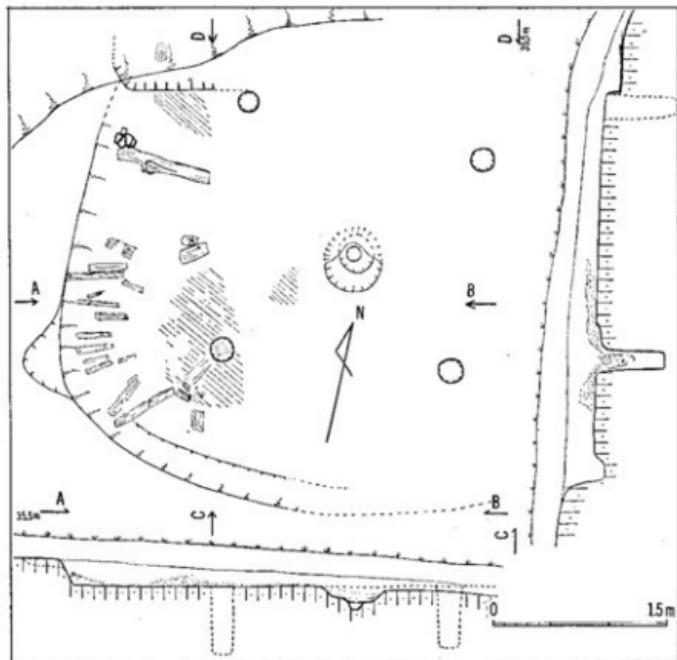


図9 弥生中期の住居址

るが、やや隅丸方形に近い。柱穴は四か所で、中央にやや深い穴を持つ。堅穴の掘り込みの深さは明らかなないが、現状では表土から床面まで40~30cm、地山面からだと20cmを計る。柱穴は床面より約55cm、円柱状に掘られ、径20cm、四本共同様である。火災を受けた状況を示したが、内部の遺物は大変少なく、使用時の火災か、放棄されて後の火災かは不明である。僅かに残存した遺物は図(24)に示した通りで、弥生時代中期末のものである。

C 中世の包含層

なお、これ等の遺構の最上面、ほぼ台地の中央部で、一部厚さ10~20cmに中世の生活面を思わず別の土層が見られた。この土層の下は溝Cが最も深くなっていたあたりに当り、ちょうどレンズ状の堆積が見られた。これは有機分を含むが、溝中の有機分とはかなり異っており、層位的に区分された。この層の中からは中世の土器が発見され、ほかにも、この台地の上面近くでは中世土器片がかなり点在していたのであるが、それに伴う遺構は残存していなかった。

三、遺物

1) 溝A(図版第七、図10)

遺物は土器のみである。この中には池を作るため、掘り取られ再堆積した部分より採集したものも含み、これと溝出土の土器が接合したものもかなりある。この遺構では、主体の大部分は小溜池で失

なわれているため、遺構に伴う遺物の全体量は不明であり、他の遺構との量的な比較は出来ない。

壺形土器（図10の23～25）

口径約30cmの大形壺（24）は内傾するやや長い頸部に細いヘラ描きの沈線を不整形にめぐらしている。口縁部は、いわゆる二重口縁が口縁外反部上に貼り付けられ、やや外反気味に立ち上る。口縁外面の下端と中間にめぐらされた沈線の間に、極めて細く浅い幅1cmばかりの波状の櫛目文を数段めぐらしている。全体的に茶褐色を呈し、部分的には黒褐色で、やや硬質である。（23）もほぼ同大の口縁部だが表面の磨滅が激しく、詳細不明、色調は茶褐色を呈し、やや軟質。（25）は特殊壺の胴下半と思われ、胴部にたが状凸帯一条が残存する。土質からみて（23）に近く、（24）の胴部ではない。破片のため、焼成後の穿孔の有無は不明。

壺形土器（図10の26～28）鉢形土器（図10の29）

口径14～16cm、口縁端をわずかに上部に拡張し、外面に横なでによる凹部を作る。内面は、頸部以下ヘラ削り、外面は細い刷毛目。鉢（29）は口径36cm、口縁部にわずかの立ち上りを持つ。淡黄褐色で、砂粒少く、表面の磨滅が激しい。

底部（図10の30～33）は、すべて小さいながらも明瞭な平底で外面の刷毛目も底部には達しない。（30）のみ内面刷毛目、他は内面ヘラ削り。（32、33）には焼成後外面からの穿孔がある。

高坏（図10の1～22）は、残存部はほとんど脚部でこれ等はすべて2cm前後の短い脚柱である。口縁部の作りは不明だが、かなり大きな坏部に、外反してやや長い口縁部が付くものが多いと思われる。脚端は（1～4）に見られるようにやや中ぶくらみで、端部にくせを持ったぬものが多いが（9）のように、端部にわずかに面を作り、その上に細いヘラ描き線を入れたものもある。孔は四孔が原則。脚の柱状部上端には、坏部内面まで達しない棒さし痕と思われる焼成前の細い穴がほとんどのものに認められる。（16）は再堆積土中の資料で、表面の磨滅が激しいため、焼成前か後か不明であるが、棒さし穴の上端を坏部内面まで、意識的に穿孔されたものである。

家形土器（34）は、床と壁部の小断片と、棟おさえの一部と思われる断片が残存するのみである。特に、その大部分が再堆積土中の出土のため表面の磨滅が激しい。詳細については後述する溝Cの家形品と共に説明する。

2) 溝C（国版第六～八、図11～図15）

溝Cは最も遺物の多い遺構であったが、やはり土器のみである。

a. 台付家形土器（国版第六、図11の1）

台付家形土器（1）は全遺構を通じて最も注目される出土品である。これは従来全く類例の知られていない器形をしており、器台形で高坏の台脚にみられるような円形の透し孔と、たがを持つ台脚の上に、すぐに家形品を作り付けたものである。全高49.5cm、台脚部高35cm、家の下端は、平で21cm、妻で16cm、床より棟まで14.5cm、壁の高さ3.5cm、屋根軒先で長さ24.5cm、幅19cmを計る。台脚部下端の径は25.5cmで、据をひろげた形で広がり、端部に立ち上りを持ち、この部分に二条の鈍い凹線をめぐらす。家の筒形部には三段のたがをめぐらして、四段に分けられており、各段の四方に径1cm強の円孔を持つ。

たがの上二段は、筒形に作られた胴部の上端を外反させることで擬口縁を作り、この擬口縁端部分

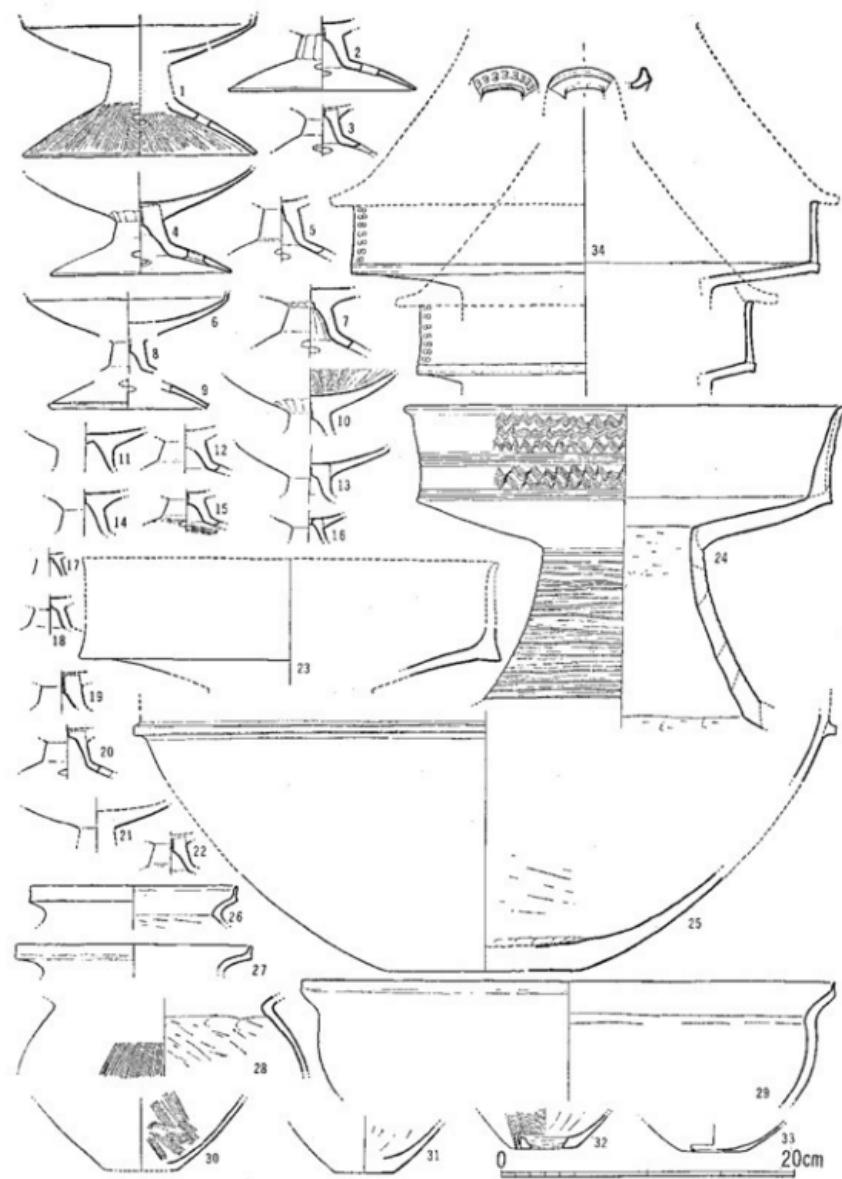


図10 溝 A の 土 器

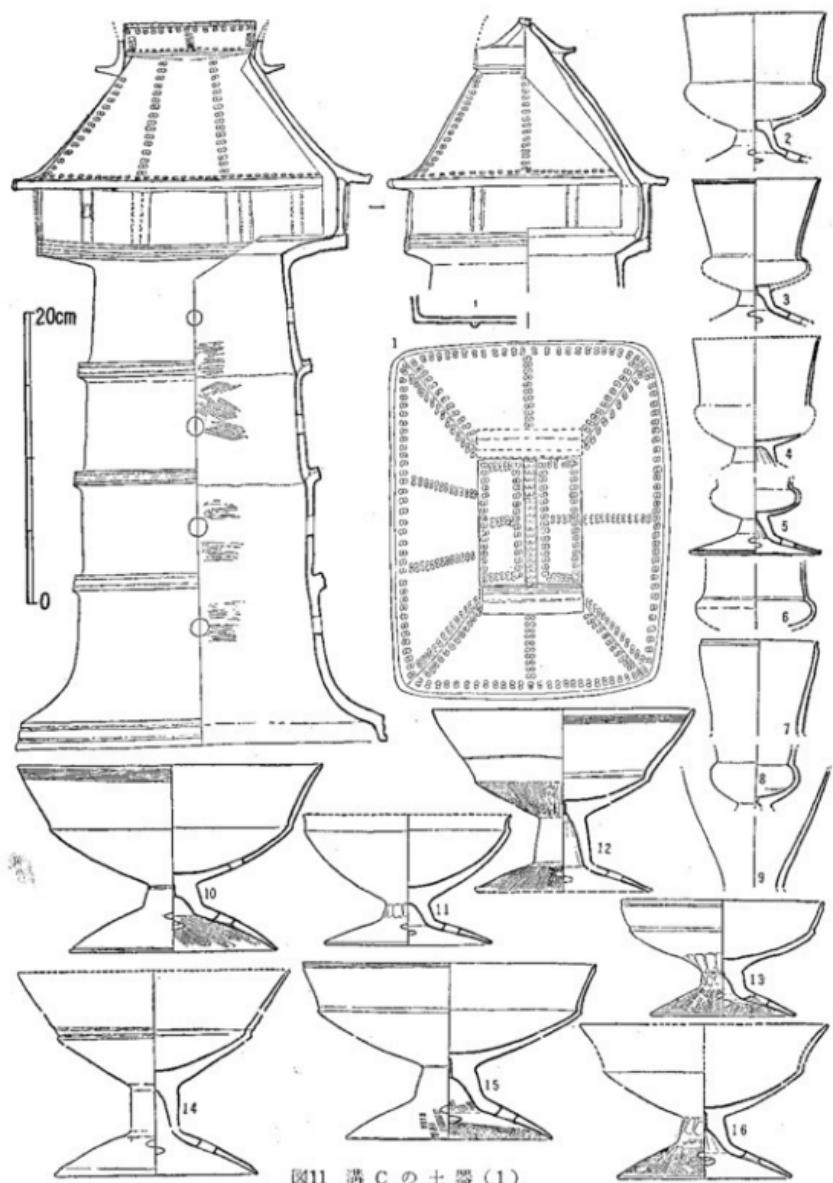


図11 溝Cの土器(1)



図12 溝Cの土器(2)

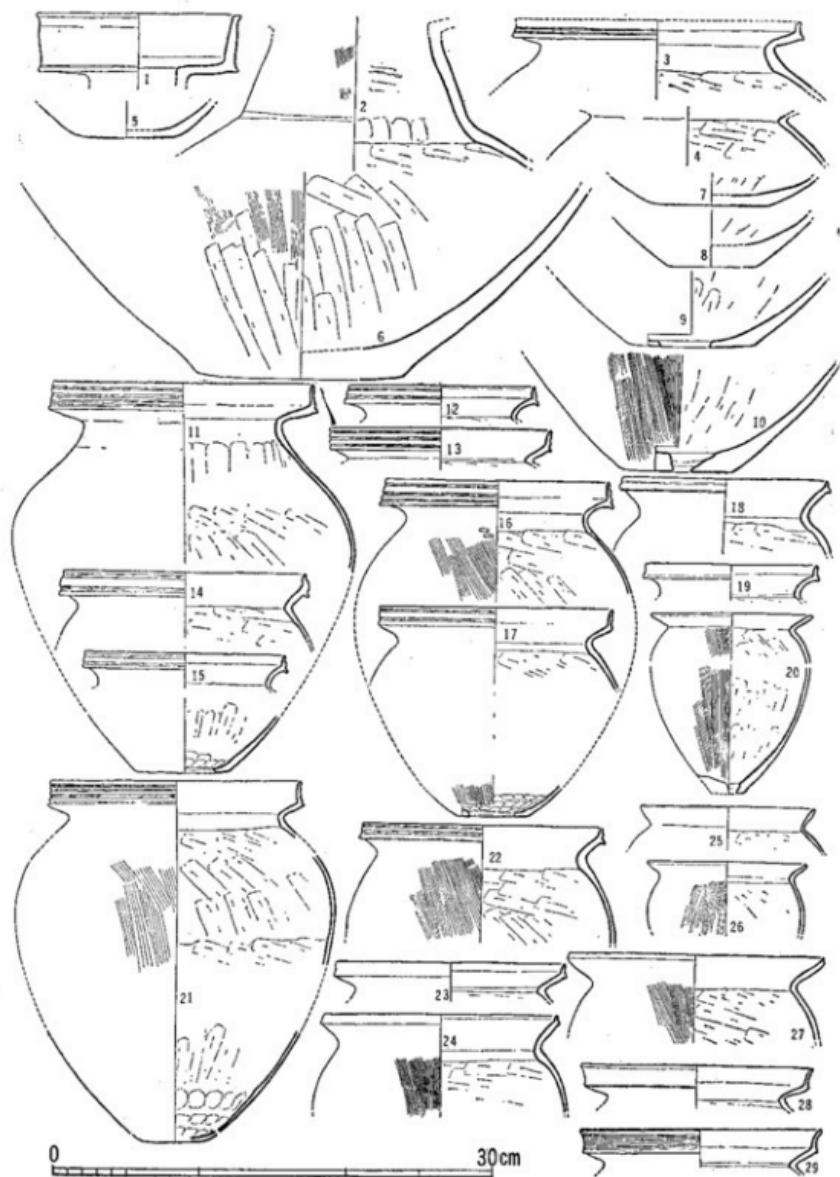


図13 满Cの土器(3)

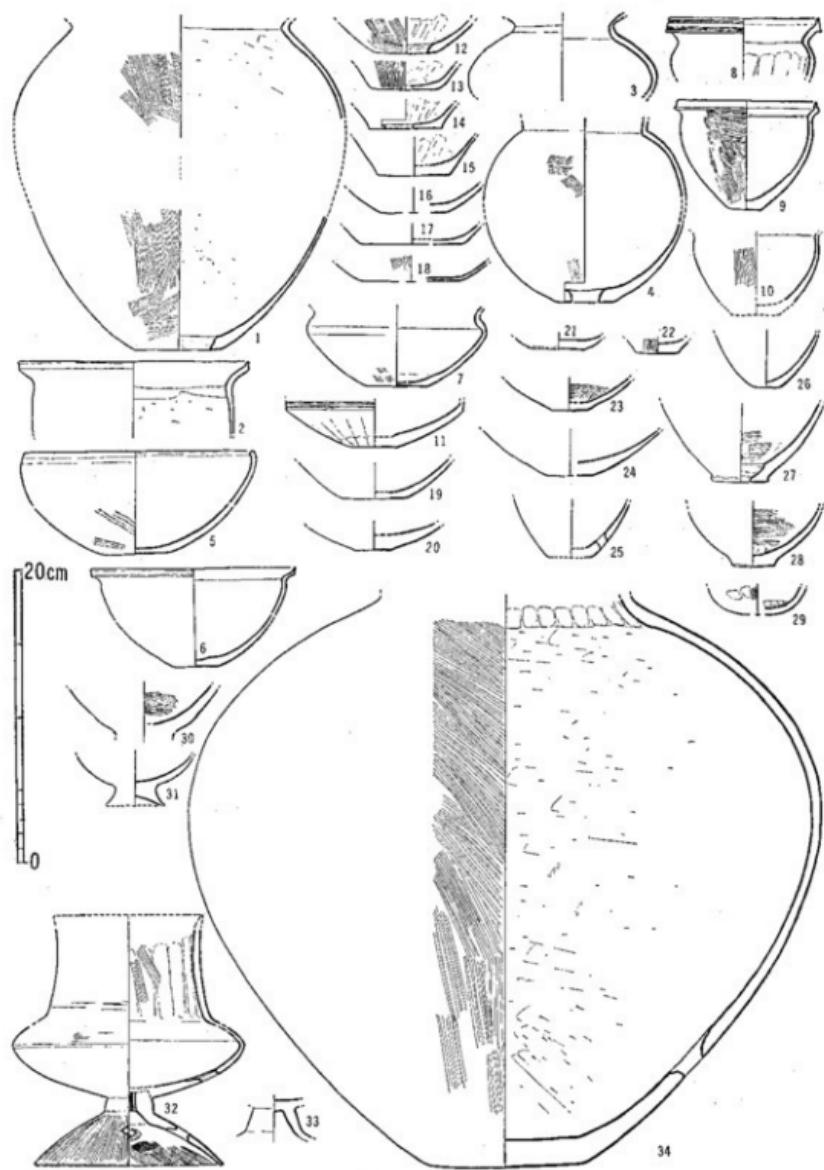


図14 满Cの土器(4)

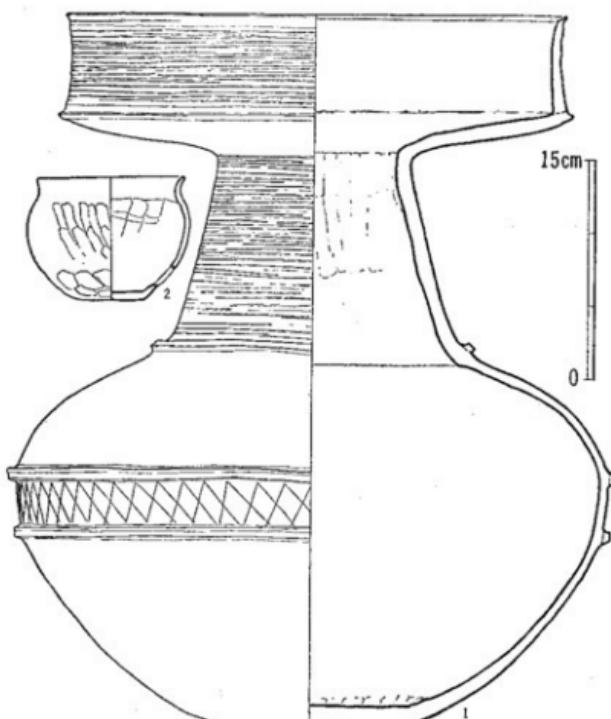


図15 溝Cの土器(5)

口縁状の端部外面には、凹線が三本めぐっており、その擬口縁端上面に家の壁部分が、二重口縁と同じ手法で貼り付けられている。脚部外面は綺麗になでて仕上げられており、内面も横ハケの上をかなりなでられている。外面には、わずかに丹の痕を残しており、丹彩りされていたものと思われる。

家の部分は、壁、屋根、屋根軒先、棟おさえなどを、それぞれ別個に作り、これを接合したものと思われる。台脚の直角にひろがった擬口縁状の上端と、壁、あるいは壁と屋根などの縫目が綺麗にはがれており、それぞれの端は、一見あたかも、それだけで独立したものの端部を思わすように作られていて、かなり粘土が乾いた時に接合したもののように思われる。外面はすべて、なでて綺麗に仕上げられているが、屋根部内面の一部には細かい刷毛目の見られる部分もある。屋根の四辺部分も数個に分けて作られており、角に当る部分の内面には、粘土の貼り付けによる補強も見られる。

家形は平四間、妻三間で、入口は平の中央にある。柱は細い粘土を貼り付けて表現しているが、これも、はげ落ちた痕が、大変なめらかなことから、かなり壁面が乾いて取り付けたものであろう。柱を貼り付ける部分には、柱幅に二本の細い線を描いていて、これの間に、二本の線の幅よりせまく凸出した柱を貼付しているが、角の部分には柱の表現は無い。

が、たがの下半を作っている。その上に次の胸部をのせ、その縫目外に、粘土紙を貼りたして、たがの上半を作っている。ただし最下段のものは縫目が明瞭でなく、内面の状態なども考へると、たが全体が外からの貼り付けの可能性がある。たがの外面は横なでによる鈍い細い凹線が上下二本めぐる。また、この台脚部は上まで器台のように筒抜けで、上端はほぼ90度近く外に屈曲し、長方形部を作っていて、これ自体が上部の家形の床となっている。そのため、家の床中央に円形の穴があいたものとなつて、筒状部に続いている。この長方形部分の蓋

平四間と言っても、一面は柱三本で四等分しているが、入口のある面は、中央に幅約5cmの口を切り開き、この口の両側近くに二本の柱、残りをそれぞれ二等分するように柱を入れているため、柱は四本となり、入口部も入れるならば五間となる。このように平側壁面は両面が不对称である。

屋根は棟に小形の屋根形品を取り付けて棟おさえとした寄棟作りと考えられ、妻の側にも、下端部が強く反り返って上る破風飾り様のものが付く。棟をおさえる小屋根状のものは長さ9cm、下端部がこれも反り上っている。屋根自体も端の軒先部分で、外反して、反り返っており、このため深い形の屋根は裾部でひろがって優美なカーブを持ったものになっている。

屋根及び、棟おさえの角とか縁の近くの表面には径3mmばかりの細く小さい竹管状の工具を二つ合わせたもので、8字形の浅い刺突文を付けており、これは屋根の中央にも付されている。ただ入口のある側の屋根には、この口に合すように二条の同じ文様が付けられている。

また、棟おさえの棟にもあたる最上端部は幅が1cmばかりの平坦面を作るものと思われ、ここにも8字形の刺突文がある。

なお、先に記した溝A出土の家形品断片について、この家形品を参考にして復元してみると、推定復元、平31cm、妻23cm、壁の高さ4cmとなり、床面の断片から、溝Cの家と同様、底に円形の孔を持ち、下部に同様な台脚のあったことが窺える。大きさから見れば、溝Aのものが一まわり大形品となるが、全体の形は類似したものと思われる。ただ部分的に判明した違いは、溝Aのものは、床に当る台脚部の先端外面に、溝Cの家のような凹線を付さない。また、溝Cの家と全く同じ大きさの8字形の刺突文を、この溝Aの場合は、壁の端にも付けており、この点も異なる。また、長さ4cmばかりで両側が隅丸に彎曲し、反り返りを持ち、その外反面に8字形の刺突文様を付けた小断片がある。これは溝Cの家には認められない部分であった。或いは、溝Cの家では失われている棟おさえの破風とも思われる部分の上端ではないかとも考えられるが、確証はない。もし、これが推定するような棟飾りであれば、溝Cの家と、やや屋根棟の形が異っていることになる。細部を見れば、このようにかなりな違いはあるが、いずれにしても、溝Aのものは小断片であり、これで見る限り、両者はかなり類似した形で、溝Aのものが溝Cの家より一まわり大形であった、といえるだろう。また溝Aの家も、Cの家と同様丹塗りされている。なお、土質は両者とも茶褐色、他の土器より、やや細い砂を含んでおり、両者で多少の違いもあるが、かなり緻密である。しかし、他の土器に比較して、特に運んだ土で作ったとはいえない。

b. 特殊壺(図版第七、図15の1)

高さ49cm、口径34cm、胴径42cmの大形の壺は、胴部が扁平で横張りが強く、最大径附近に二本のたが状の凸帯をめぐらす。胴部と頸部との境にても凸帯がめぐり、頸部は細く、わずかに内傾した長頸状を呈し、その上部で急に屈曲して外反し、広く拡がった口縁部には、ほぼ垂直に立ち上った口縁端部を付ける。この器形は、当、吉備地方で、特殊壺とよばれてきた大壺の典型である。

胴に二本貼り付けたがの間には、細い先端の鋭い工具により、鋸歯文を重ねながら連続してえがいたような線描きの斜格子状文がめぐり、頸部には、刷毛目を思わすような、細く浅い、へら描き沈線が数多くめぐらされている。これと同一工具によって、口縁部の立ち上った外面にも沈線がめぐらされている。

底部は、胴との境があまり明瞭でないままに、径10cm強の平底となり、中央部は、わずかに中凹みになる。器胴外面は、へら磨きや、なでにより綺麗に仕上げられ、器胴内面も、へら削りの上を、なでた部分がある。

土質は、やや淡い黄褐色で、家形品と比較すれば、砂粒が大きく、軟弱である。表面および、口縁内面や一部頭部内面まで丹塗りされている。

図15の(2)の橢形品は、上記特殊壺の頸部内から発見されたものだが、口径10cm、最大部では径11cm強ある。特殊壺の最小口径と、わずかな差はあるが、やや大きいため、どうしても壺の口から中へは入らない。橢は、底面を壺の口縁部の方へ向けて、すっぽり頸部に詰め込んだ様に入っていたが、これは大壺が壊れてから、頸部の下方から入ったと見なければならない。

橢は、口縁部のみでられており、外面には指圧痕が残り、内面はへら削りされているが、全体としては丁寧な仕上げである。胴の底近くに、外から焼成後に打って穿孔している。

c. 壺形土器 (図12の76、図13の2~10、図14の34、3、4)

図12の(76)は、口径26.5cm、高さ55cm、胴最大径42cm、底径11cm、図14の(34)は頸部以上を欠くが、胴最大径約43cm、底径11cm、頸部以下の高さ約39cm、この高さは図12の(76)では、40cmであり、両者はほとんど同形同大の壺だったと思われる。土質も、両者とも軟質で、黄色の強い、黄褐色を呈し、両者の個体分離が困難な状態であった。図12の(76)は前記した通り、家形土器と、まず同時使用のものであり、図14の(34)は特殊壺の付近出土であった。両者とも、胴下半に、焼成後、外からの穿孔がある。器胴外面は、やや粗い刷毛目、内面はへら削り、両者とも胴と底面は明瞭な稜線を持って区別され、底面はへら磨きされている。

図13の(6)は、先の大壺より、一回り大形で、最大径60cmくらいのものと思われる。図13の(2)は大形壺の頸部であるが、土質、出土状態からみて図13の(9)の底部と同一個体の可塑性がある。図13の(10)は、(9)と同様壺の底と思われ、(9、10)ともに焼成後外部からの穿孔がある。図14の(4)は、胸部がほぼ球形をした平底の壺で、高环などと同質の、きめの細かい土質である。器胴外面は、刷毛目の上をなでて整形し、底部に、焼成後、外からの穿孔がある。同図(3)の小壺も、土質はきめの細かいものである。

d. 器台形土器 (図13の1)

特殊壺と、特殊器台は、従来ほとんど同じ遺跡から発見されているが、女男岩遺跡では、まったく特殊器台の存在を思はざるものなく、器台形土器といえど、溝Cの中では、わずかに図13の(1)のみが存在し、女男岩全体でも、同様の小型品が三個体分あるのみであった。

これは、口径14cm、器壁外面は、へら磨きやなで仕上げで綺麗に作られ、丹塗られている。

e. 菱形土器 (図13の11~29、図14の1、2、12~18)

菱形土器には、口径15cm~18cm前後のものが多く、薄い作りの口縁部を上方に拡張して、そこに数条の浅い四線風の線をめぐらすものや、口縁端を、わずかに上方にひき上げて、その面を横になでただけのものが多い。口径10cm前後の小菱形には、口縁をく字に外反したのみのものもあるが、それも多くは先端に、小さい面を持っている。全体に茶褐色から灰褐色を呈し、外面は刷毛目、内面は頸部以下へら削り、底部(図14の12~18)は明瞭な平底であるが、時に刷毛目が底部にまで及ぶものも

ある。底に、焼成後穿孔した例がかなり多い。

f. 椽及び小鉢形土器（図14の5～11、19～31）

これ等小形土器としたものの中には、小壺形品や、甕の底部らしいものもかなり含まれている。

図14の（5）は、径16cm、赤褐色の胎土の上に、内外面とも丹塗り、砂粒を含んで焼成は良好。図14の（6）は、表面をこまかくへら磨きしており、土質は高坏などと同様、細かい土質。（7、11）も共に土質は、きめが細かい。（30、31）は小台付椀で、台脚の底面はなでられた整形痕を示す。小鉢か甕の底と思われる（27、28）などは、底部がわずかながら突出する。小形品には内面に刷毛目を持つものが多い。（29）は表面に指圧痕を残す小形土器である。

g. 台付小壺形土器（図11の2～8、図14の32）

上方に長く伸びた口縁部の下に、小さな胴張りのある扁平な胴部を持ち、下には高坏と全く同様の台脚を付けたものである。この器形は、弥生時代後期、上東式の時期から、すでにかなり発見されているが、上東式のものに比較すると、口径が大きくなり、胴部分が、はなはだしく縮少されている。

図14の（32）は口径約10cm、台脚の柱部には、下から棒さしのあとが二個所ある。色は赤褐色に近く、土質は高坏と全く同じで、きめのこまかい土である。他のものは、口径5～8cmで、前者と同じく、赤褐色のものが多いが、淡い黄褐色のものもある。すべて土質は前者同様きめがこまかい。脚柱部に下から棒さしされたものが多い。

h. 高坏形土器（図11の10～16、図12の1～75）

個体数にすると、他の器種に比較して、しば抜けて多い。図11と図12にあげたものがその主体である。多くの破片の検討から、坏部の口縁が、長く外方に斜に延びたものがほとんどで、図11の（11）や（13）のような、口縁の短い立ち上りのものはきわめて僅かである。坏部と口縁の立ち上り接合部に、浅い細い沈線を1～2条めぐらすものや、口縁端近くに、口縁に平行に刷毛目をめぐらすものもある。口径は、ほぼ15～20cmの間である。

脚部は、口径の大小にあまりかかわりなく、全体に「ハ」状に下開きの形をした大変短い柱状部の下が強く外に屈曲して、平たく折り、先端部には特に特徴を持たないのが一般である。中には脚端に面取りをして稜線を持つものとか、細い線をめぐらすものなどもあるが、全体としての脚部器形を大きく変えるものではない。ただ中に図11の（12、14）、図12の（7、8、13、15、16、17、18、21、22、24）のように、柱状部が、やや長いもののが存在する。このうち（16）（溝Cの西端部出土）一個を除き他はすべて、L字状石列の東側直下の、溝C中で一番有機土の多い地点で集中して出土していた。また、これ等の高坏の中には、大変激しく表面の磨滅したものが多かったのである。もちろん、台脚の短いものとも混在し、この地点では両者とも、同様な器壁の荒れ方を示してはいるが、柱状部の長いものは、あるいは一括して用いられ、それも地表にあって風雨にさらされて器面が荒れた状態を思われるため、この女男岩遺跡の最終段階に用いられて、長く地表に露呈していたのではなかろうか。

高坏は、判明するもののすべて、脚台に四孔を有し、柱状部の下から、細い針状のものによる棒さし痕を有するものが多かった。棒さし痕だけではなく、明らかに、坏部底に穿孔したものも數例存在する。壺・甕の底部を打ち欠くのと違い、焼成後、先の鋭い工具で、棒さし痕をあたかも利用したかのように、綺麗に穿孔されていた。

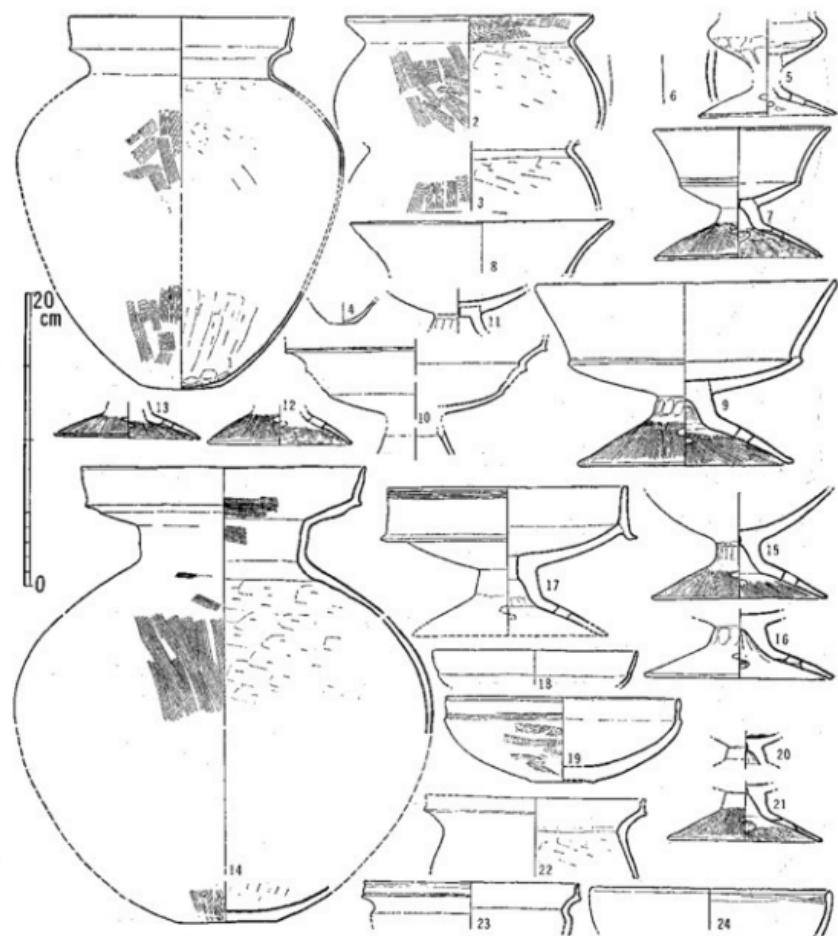


図16 遺構「イ」とその西側遺構および遺構「ロ」、土壤墓2～4付近の土器

全体に胎土は、きめが細かく、水洗した粘土のようで、赤褐色、茶褐色のものが多いが、中には淡黄色のものもある。内外面とも、刷毛目整形が多い。

3) 溝B中の穴状遺構

遺構「イ」及びその西側遺構（図版第九、図16の1～19）

この遺構には、炭・焼土を伴ったが、残存する遺物は、やはり土器のみである。土器は図16の（1～13）であるが、ここでは壺形品は見られず、甕・高坏・台付小壺が数点ずつ発見された。

甕は、口径約15cmで薄い口縁が上方に立ち上がるものと、く字に外方へ屈曲し、先端に小さい面を

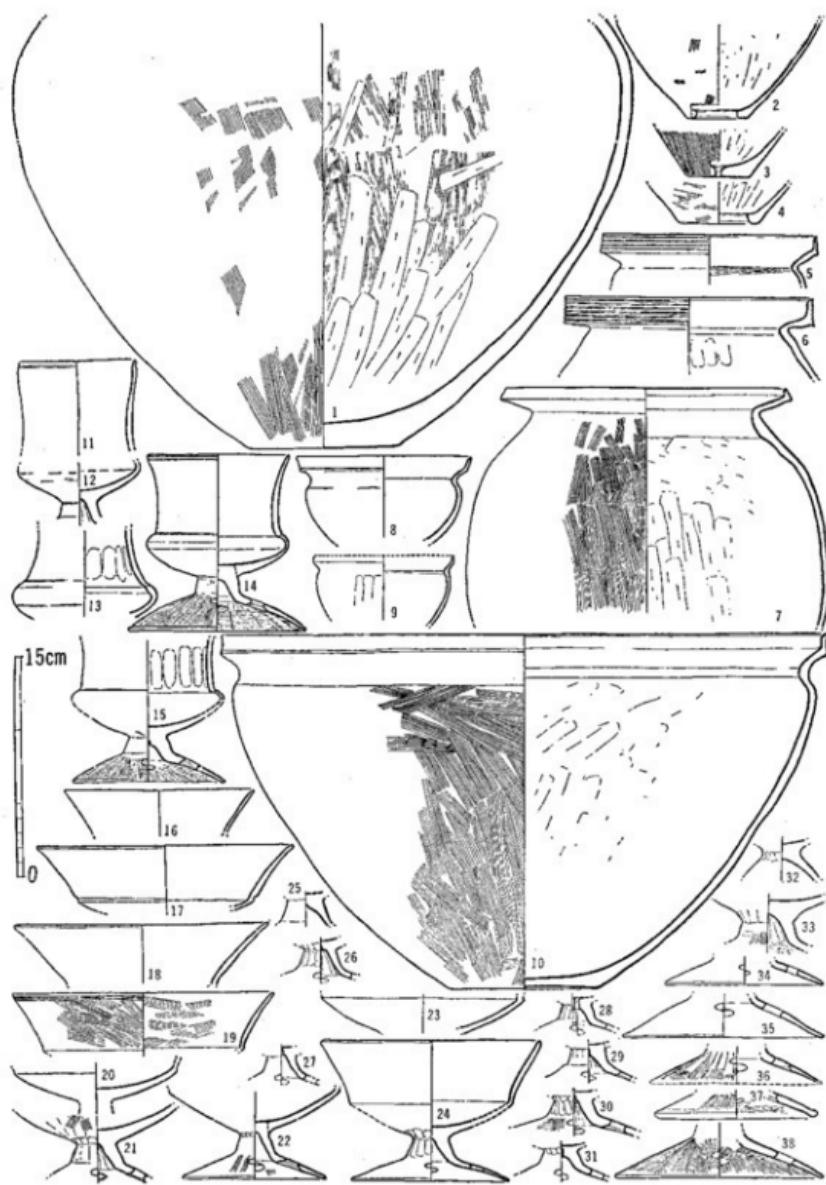


図17 遺構「ハ」の土器

持つものがある。底部はやや中ふくらみであるが、明瞭な平底である。

高坏・小形台付壺は、ともに満Cのものと全く同様の土質、作りであり、混入すれば互に区別は出来ない。ただ図17の(10)は、小片で明らかではないが、坏部に二本の稜を持って、二段に屈曲する形になる可能性がある。図16の(7)の高坏には焼成後穿孔がある。

遺構「イ」の西側に有機土層が続き、一括の土器が存在したが、これと遺構「イ」の区分は明らかでなかった。これらは図16の(14~19)に示すもので、ここには壺(14)、器台(17)、鉢(19)など、「イ」に見られなかった器種がある。壺(17)は口径約20cm、口縁部は上方に立ち上り、短い脚部を持ち平底である。器台外面は刷毛目、内面は頭部までへら削り、器台(17)は、比較的小型のもので、口径約16cm、上方に立ち上る壺の口を思われるような口縁に対し、高坏の脚を思われる短い脚柱の台部を付けており、脚に四孔がある。口縁端外面にはこまかい四本の沈線がめぐる。茶褐色で、胎土には、砂粒を含む。鉢形品(19)は、浅い高坏の坏部を思われる形で、平底が付く。土質は黄褐色で、高坏同様のこまかい土、外面に丹塗りが見られる。高坏は他の場合と同様である。

遺構「ロ」(図16の20、21)

この遺構は、石の集積や形がかなり明瞭だったにもかかわらず、明らかに伴う遺物は大変少なく、高坏二点のみであった。この高坏も、他遺構のものと全く同じである。

遺構「ハ」(図版第九、図17)

この遺構は、現状で穴状の中の中では最も大きく遺物も多かった。一部満Cで切られ、遺物の一部は西方に散乱していたが、この遺構のものと接合した。

壺形土器図17の(1)は、胴最大径43cmで、満Cなどで発見された大壺(図12の76など)と、ほぼ同大であるが、頭部以上の器形は不明、外面は刷毛目の上をへら磨きしており、内面はへら削りしている。内面のへら削りの削り痕に、刷毛目と同様な痕跡が見られるが、へら削り工具の先端による痕跡と思われる。胎土は砂粒を含み黄褐色を呈する。

變形土器(図17の2~4、6、7)では、(7)が口径20cm、く字に屈曲した口縁部に、やや内斜した小さい端部を作っており、色調は黄褐色である。これに対し、(6)は共に口縁端をほぼ垂直に上方へ拡張し、ここに細く浅い凹線風の線数条をめぐらす。底部は平底で、焼成後穿孔があり、底面一ぱいの大きな孔が開けられたものもある。

鉢形土器(図17の5、8~10)のうち、(5)は下半が不明のため、器形は明らかではない。この上方へ立ち上った口縁部には、櫛目を思われる数条の線がめぐる。(8、9)は小形で底部は不明だが(10)は口径41cmを計る。これの口縁部は短かく上方へ立ち上っており、底はやや中凹みぎみの平底。

台付小壺形土器(図17の11~15)のうち、(14)のみ、ほぼ原形で穴状遺構の縁辺部で発見された。口径10cm、高さ12cmで、口径が大きく、胴部が萎縮した形で、低い台脚が付く点など、他の遺構のものと全く同じであり、茶褐色や黄褐色を呈し、水漉した土を用いている点も同様である。

高坏形土器(図17の16~38)でも判るように、ここでも高坏形が大変多い。坏部、台脚の作り、その他も、他の遺構の場合と同じである。脚柱部には棒さし痕があるが、明らかに焼成後穿孔を加えたものも存在する。

遺構「ニ」及びその周辺(図版第十、図18、19)

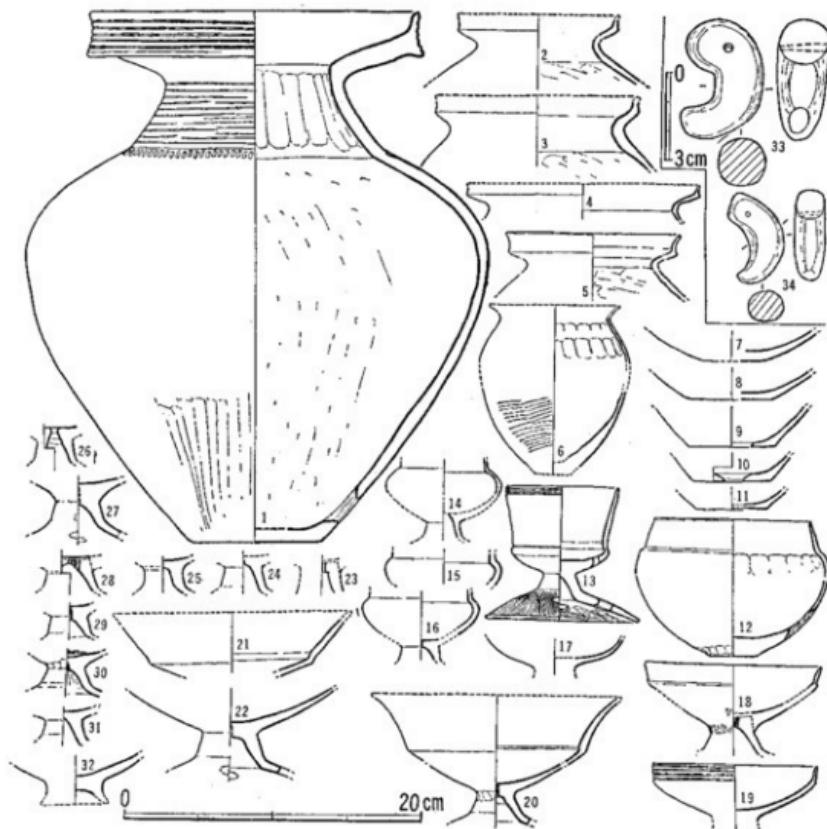


図18 遺構「ニ」の遺物

溝Cの中では最も東にあったこの遺構では、土器のほかに、土製勾玉二個を伴った。図18の(33, 34)であるが(33)は長さ約4cm、断面円形で、一方から穿孔されている。(34)は長さ3cm強、断面は円形だが、これは頭部と尾部がやや細くなり、牙状を呈する形となっている。土質は、他の壺や甌と同質で砂粒を含む。

壺形土器(図18の1)は、口径22.5cm、高さ36cm、胴が張り、頸部が短くなりながらも、なお長頸壺の形態を残している。しかし頸部沈線は大変細く、亂れや途切れが目立つ。胴部と頸部の境には断面長方形の工具で、刺突がめぐらされる。口縁端は上方に立って拡張されながらも、やや下方へも拡張されており、ここに5~6本の沈線がめぐる。器内面は頸部以下へら削りされ、外面はへら磨きされる。底面近くに、外から穿孔あり、胎土は茶褐色で砂粒を含む。

甌形土器(図18の2~6)は、(6)の小形品を除き、口縁部を短く上方へ立ち上がらせて、その

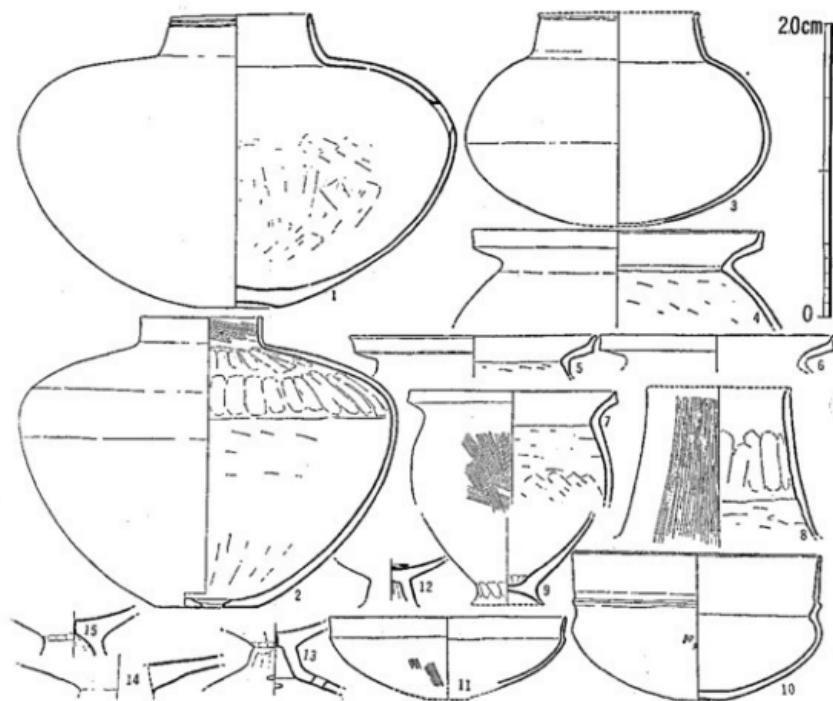


図19 造構「ニ」周辺の土器

面に横なでによる凹部を作る。(6)は底部と口縁端を欠く小断片であるが、底部近くに横の平行叩目を残し、内面に指圧痕を見る。この遺跡全体を通じて、きわめて類例の少い叩目の土器である。

(7~11)の壺底部と思われるものの中には、明らかに焼成後穿孔のものもあるが、全体にこの地点の土器は、細片になっており、器形、整形法は不明の部分が多い。

高坏及び台付小壺形土器(図18の13~31)は、他の地点のものと、全く同様の形態や作りを示すが、強いていうならば、台脚の脚柱部の長いものは、全く見られず、高坏の坏部立ち上りが、やや短くて、強く外反しているといえるだろう。(19)の高坏の坏部縁辺には細い凹線風の線がめぐる。

台付小壺(13)は、穴状造構の縁辺近くで、原形に近いまま発見された。造構「ハ」でも同種の土器一個が、同様な状態で出土したので、この種器形の中でも、他の破片となって出土する土器と、多少違った扱いを受けたのかも知れない。焼成後、壺状の底面に先の鋸い工具で、明らかに穿孔したあとがあり、内面の一部分のみに朱の痕が見られる。外面その他の保存がかなり良いにもかかわらず、外面に丹塗りが見られず、内面の朱痕も、主に底面と、この器を斜にした場合、あたかも底に残った朱が流れて付いた様に、斜に付着している。わずかにこのような状態から類推することではないが、この土器は、あるいは朱を入れて墓地に運ばれ、葬送の最後に、他の土器などを打ちこわして祭りを

すませたあと、穿孔のみして、土器、石その他を入れた穴状遺構のへりに放置されたのではなかろうか。他の土器の出土状態や破碎状況と比較して、この土器が完形なことは注目される。

椀(12)は、かなり細かい土質で、暗茶褐色。焼成後内面からの穿孔がある。

図19の土器は、遺構「ニ」の北で、一部は溝Cの北端に当る部分で一括出土したものである。「ニ」と区別がつき難い部分が多かったので、独立した穴状遺構としては扱わなかった。無頸壺形土器(図19の1~3)は、大小の違いはあるが、ともに立ち上った短い口縁部に横張りの強い胴を持つ。(1)は胴径30cm強。口縁端に、細く浅い沈線を二本めぐらし、底部は小さい凹み底となる。最大径部よりやや上に、外面からの穿孔がある。茶褐色で、表面は綺麗にへら磨きされ、内面はへら削り。

(2)は(1)よりやや小形で、胴径約26cm、土質、整成はほぼ両者とも似ている。しかし(2)の方は、底は平底で、底に焼成後、外より穿孔がある。ともに丹塗りは見られない。(3)は、やや土質が前二者より軟かく、これは外面に丹塗りがある。底部は不明だが、小さい平底の可能性が強い。

壺形土器(図19の10)も、ほぼ原形近い形で発見された。小さい、わずかに中凹みの底を持ち、外面へら磨きや、なでにより綺麗に整形されている。土質は、高坏などと同じで、砂粒が少く、茶褐色である。

壺形土器(図19の4~7)は、口縁端を短く上方へ拡張したもので、その外面に、横なでによるにぶい凹部がめぐる。高坏などは他遺構のものと同様である。

4) 溝外の穴状遺構「ホ」~「チ」

遺構「ホ」(図20の1~3)

大変遺物が少く、わずか三点のみである。鉢(1)は、口縁がかなり上方に立ち上り、底は平底である。器壁がかなり剥脱しており、整形はあまり観察出来ず、外面の一部に刷毛目が見られるだけである。(2)の口縁部は壺と思われ、上方への立ち上りが強い。(3)の底部は、内、外面に刷毛目が見られ、底はぶ厚くなるが丸底である。

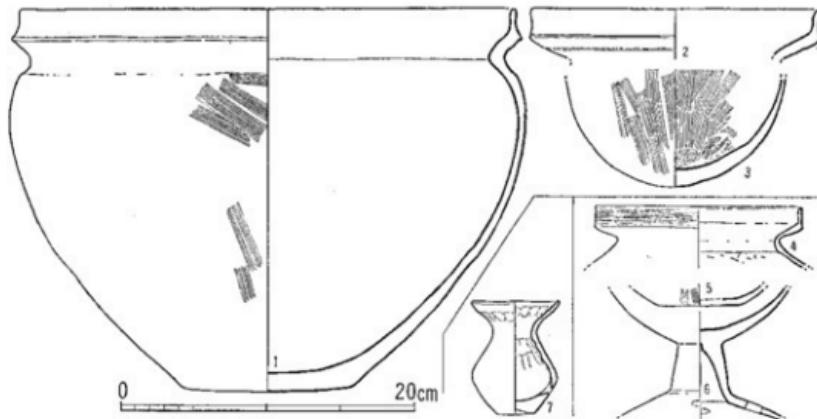


図20 遺構「ホ」「ヘ」およびその他の土器

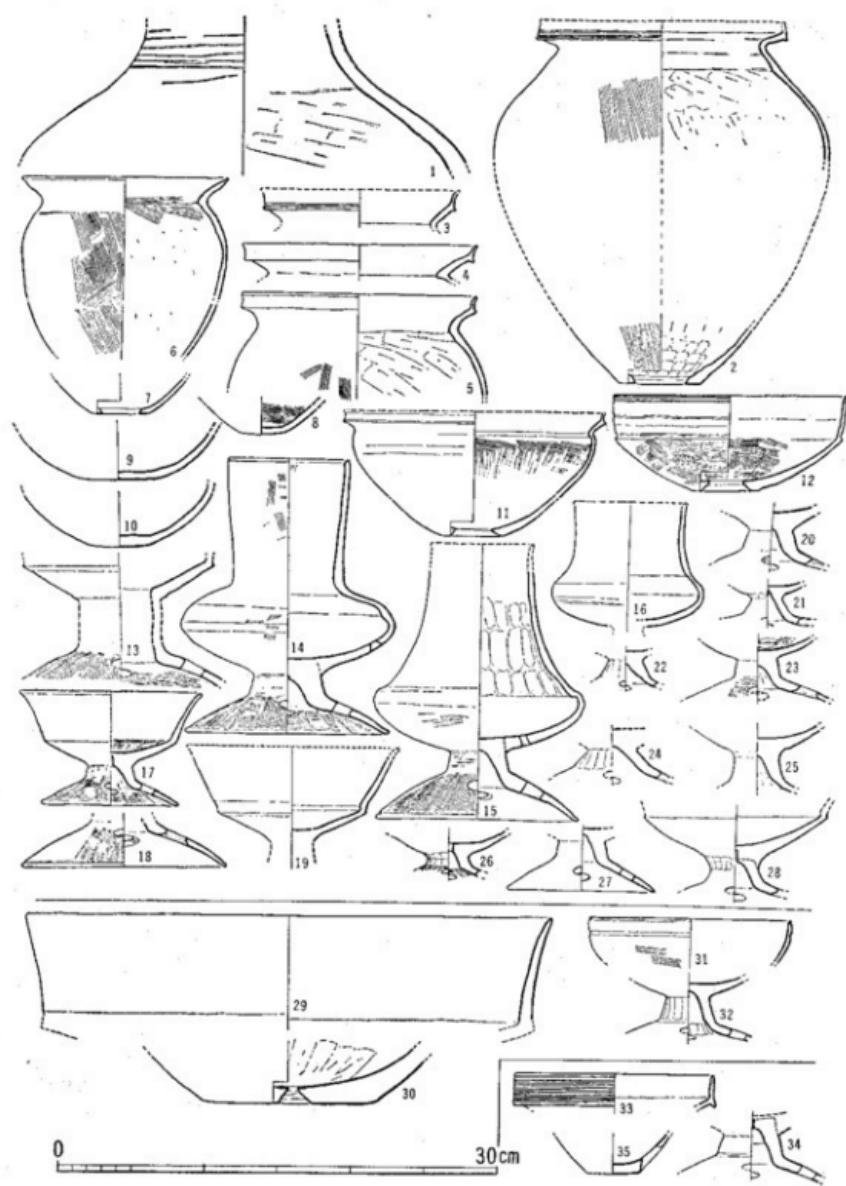


図21 遺構「ト」の土器と遺構「チ」の土器（1）

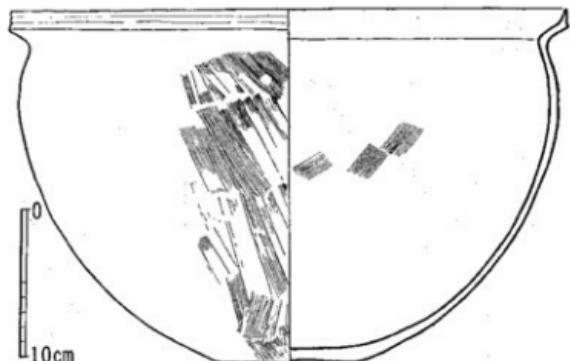


図22 遺構「チ」の土器(2)

遺構「へ」(図20の4~6)
この遺構も、遺物は大変少い。甕(4)と底部(5)は同一個体の可能性もあるので、高坏と二点だけになる。甕は口縁外面に刷毛目を想わすような工具で、平行の線をめぐらし高坏の脚柱は、やや長いものである。

遺構「ト」(図版第十一、図21の1~28)

壺形土器(1)は、頸部をや

や長く作り、細く浅い沈線を乱雑にめぐらす。菱形土器(2~6)のうち、(2)は口縁外面に浅く細い四線風の線数条を持つが、(3~5)は上方に拡張されただけであり、(6)は、外方へく字に屈曲するのみである。(2)とか(7)の底は、明瞭な平底で、外から焼成後穿孔がある。底部のうち(9、10)などは、平底が不明顯に見えるが、これは、小鉢、又は椀形土器で、土質も高坏などと同質の砂粒を含まぬものであり、壺、甕の底と同様には論じられない。(11、12)の碗又は小鉢形土器は、ともに細かい砂粒を含むが、表面が丁寧に整形されている。(11)は外面へら磨き、内面は横刷毛目の上に縱に暗文状のへら磨きがあり、(12)は内外とも刷毛目。口縁端には、細いへら描きの沈線二本がある。(11、12)ともに平底で、焼成後、内側より穿孔している。

図21の(13)は、器台であるが、上・下端の作りは不明。(14~16)は台付小壺形土器であるが、(14、16)などは、他の遺構出土の同類の小形品にくらべると、胴張りがかなり強い。(15、16)とも壺部外面は綺麗なへら磨きである。高坏(17~28)は脚柱部が、みな短い。脚柱に捺さし痕のみられるものもあり、(26)は明らかに焼成後の穿孔である。

遺構「チ」(図版第十一、図22、図21の33~35)

わずかに残存したため、確実に伴出したのは図22の鉢のみである。他の図21の(33~35)は周辺部分の表土近くより出土。図22の鉢は口径38cm、口縁部は上方に短く拡張されている。底はわずかに中凹み状の平底であり、内外とも刷毛目整形。赤褐色を呈する。

図21の(33)は、口縁部に細い沈線をめぐらしている。(35)の底部は、内側より焼成後穿孔。

5) その他地点出土の遺物(図21の29~32、図16の22~24、図20の7)

南溜池の、溝Aが残存した土手を西に延長した畠の縁近くで発見された土器は、図21の(29~32)に示したが、畠の縁で出土状況が悪く遺構として確認出来ず、量も僅かであった。これ等の遺物も他地点出土のものと、同じ様相を示している。(30)の大形底部は焼成後、内側から穿孔されていた。

また、図16の(22~24)、図20の(7)は、伴う遺構が明らかでない。図16の(22~24)は北の土壤墓群周辺の表土より発見された。土壤墓自体、現状では、土器の伴存が明らかでなかったが、上面の流失が激しいので、埋葬時どの様な状態であったかは判明していない。これ等の土器は、あるいは

土壇墓群の上部に伴存したものかも知れない。図20の(7)は、L字状石列の直上の有機土層中から出土し、高さ8cmの小形壺である。内外面ともに、指圧痕が顯著であり、底は中凸み、砂粒を含む胎土で、暗黄褐色を呈する。胴下半に外から、焼成後穿孔がある。

6) 中央土壇墓(図版第十一、図23)

遺物は人骨とともに棺内にあったと思われる鉄剣2本、図23の(1、2)のみである。(1)は人骨の頭部右側付近に、(2)は左側で、腕に近い位置で、ともに切先を足の方へ向けて出土した。

(1)は長さ25cm、幅は2.5~3cm、鍔のため不明瞭だが、剣身の断面は菱形と思われる。茎は4cmばかりである。茎には木把の痕跡が見られ、木質が刃部へ三角に突出しており、いわゆる呑口の把を示す。現状では剣身の鞘の有無は不明である。剣の出土状態から見て長い柄であると棺内に入らないもので、もしこれを槍身とすれば、埋葬時柄は切られたことになる。

(2)は、長さ38cm、刃部21cm、身の断面は菱形で、稜線が明らかである。把は(1)と同様に先を三角形に作ったものようである。これの剣身には一部に木質がわずかに付着するが、鞘か棺材か不明である。また切先を足の方へ向けていたことから、埋葬時あまり長大な柄は付いていなかつたと思われる。

土壇墓内の床の粘土はすべて入念に調べたが、他には何も発見されなかった。なお床面全面に残存した赤色顔料は、鮮明な赤色で、水銀朱と思われた。

なお、ここ出土の人骨は、すでに記した通り、大変保存状態が悪かったが、大阪市立大学医学部解剖学教室の寺門隆之氏の御尽力で青年男子と判明した。同氏の報告を最後に別記する。

7) 住居址関係(図版第十二、図24)

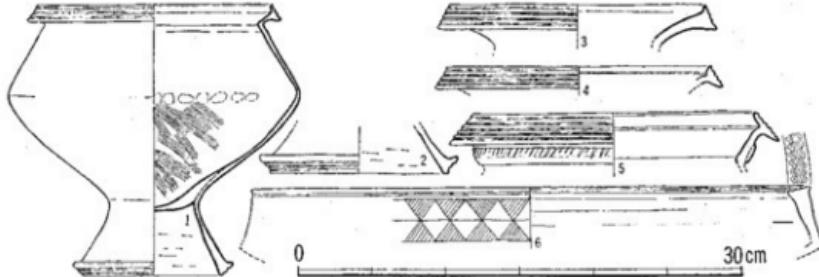


図24 住居址関係の土器

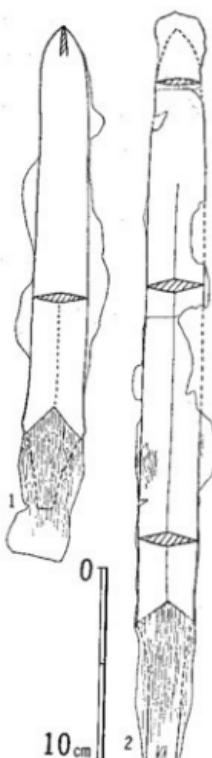


図23 中央土壇墓の鉄器

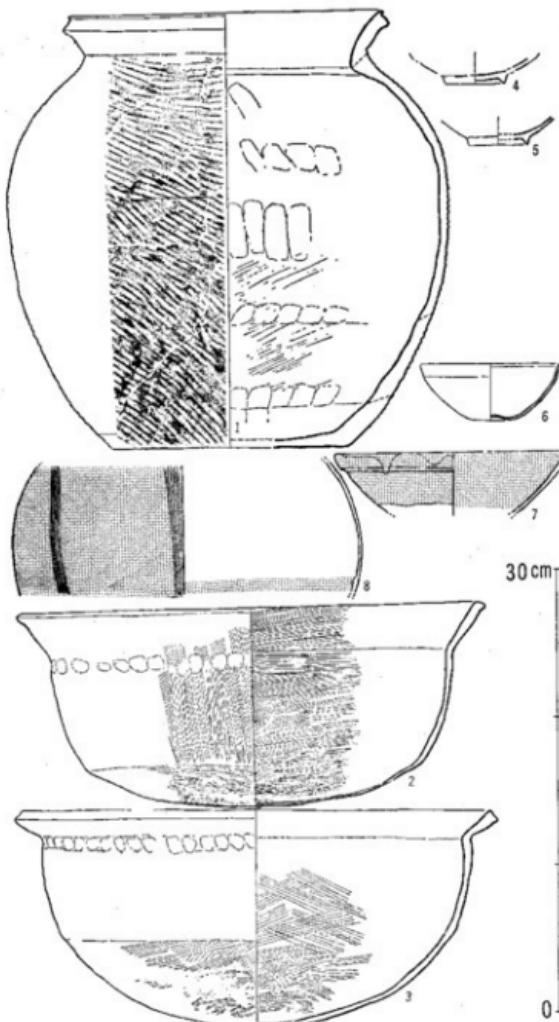


図25 中世包含層の遺物

8) 中世の包含層(図版第十二、図25)

土器としては、図25があり、このほかに、釘状の、小鉄断片が存在したが、本来の形は不明。土器のうち図25の(1)は、高さ約30cmの壺で、灰青色の瓦質。表面に、やや斜めの平行凹目があり、内面には凹圧痕があり、その上に刷毛目整形が見られる。

遺物は土器のみであり、確実に住居址に伴ったものは、図24の(1、2)のみである。(1)は高さ18.5cm、口径16cm、口縁部には3本の凹線をめぐらし、台脚部先端にも2本の凹線をめぐらす。底部は円盤貼り付けである。内面下半には刷毛目が見られるが、外面は火を受けて荒れが激しく詳細は不明。しかし、胴最大の径部分に刺突文は付いていない。(2)も同様な台脚部である。

図24の(3、5)は、北の台状部分の表土から、(4、6)は溝Cのかなり上層から出土した。(3～5)はすべて口縁端部を内傾させながら上下に拡張し、この部分に数条の凹線をめぐらす。(3)は頸部に刻み目の付いた貼り付凸帯を持つ。(6)は小断片ではあるが、口径38cmに及ぶ大形の高壺と思われ、口縁端上面に、3本のにぶい凹線がめぐり、その上に更に6本の櫛目による波状文がえがかれている。壺の立ち上り部分には、上下を逆転した、二段の鋸歯文がめぐっている。胎土は黄褐色。

(2、3)の土鍋は、ともに口径32cm前後で褐色の土師質、内外面に刷毛目が見られ、胴下部の底部へ移行する部分に、多少屈曲を付ける。両者とも外面には媒の付着が多い。

(4~6)の小挽形土器は黄白色で、きめのこまかい土質。(4、5)には、断面三角の小さい高台が付くが、(6)の底部は指圧により小さい中凹を作る。なお(6)には、口縁部に小さく外反するくせを持つ。

(7、8)は、白色胎土の磁器である。(7)は、やや黄色を帯びた灰白色的釉が、内面と外面の上半にかなり厚くかけられている挽形品である。(8)は(7)より、なお淡黄灰色を呈する釉がかけられており、内面の一部にも器胴を横にめぐるように付けられているが、破片のため詳細は不明であり、図示したこの土器は天地が不確実である。外面には釉の下に、細い6本の櫛がき線が胴に上下に数ヶ所付けられていたものと思われる。

四、遺物より見た各遺構の年代

1) 墳墓遺構

墳墓遺構に関しては、遺物の個別説明で見た通り、遺構別による遺物の差違は大変くないものであった。

壺形土器では、溝A、穴状遺構「ニ」「ト」などに長頸壺の形態を残すものが存在したが、これも当地方で從来より弥生時代後期前半とされる上東式土器の長頸壺より、口縁部の上部への拡張、頸部の短縮、頸張りの拡大など、すべての点において、新しい要素を示していた。また同時出土の甕形土器も、器高の短縮、口縁端部の上方への拡張というような、新しい要素が見られた。また高环形土器では、脚柱の短縮、環部立ち上がり、上方へ長くのびる形は、上東式の範囲を大きく出る新しい要素であった。

また頸部に沈線を持たぬ壺を持った遺構において、壺形品は、上方に垂直に立ち上る二重口縁を持ち、頸部の退化が顕著であった。しかし、他の器形のものは、すべて先にあげた溝A、「ニ」「ト」などの遺物と比較すると、それぞれを区別することは出来なかったのである。

ただ溝Cの一部で見られたように、高環脚柱部が、円錐形に近くなり、やや長くなる傾向の一群もあった。

これ等、各遺構の傾向を総合して検討した場合、從来、当地方で、最古の土師器とされる酒津式土器よりは、やや先行する要素に思われる。しかし各器種で、個々の断片を取り上げて、酒津式に混入した場合、両者の区分が分明でないものもあり。

以上の状況から見て、女男岩の墳墓遺跡は遺構面で見られた先後関係が、個々に遺物面で先後関係としてとらえられる状態には無く、全体として弥生後期後半の、しかもかなり終末に近い時期から、酒津式土器使用の始まる、かなり短期の時期に作られた遺跡と思われる。この中で各遺構は、遺跡の検討から或る程度推定された先後関係を持って順次作られたものであろう。

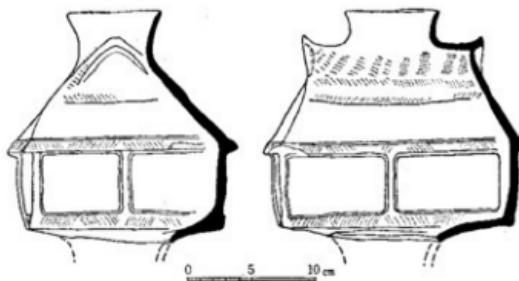
2) 住居址

住居址及び、それと同時期と思われたわずかな資料は、すべて弥生時代中期後半の凹線文が発達した時期のものであった。弥生時代中期後半の頃、後に墳墓遺構の作られた台地上に、複数の住居が作られていたことを示している。

3) 中世の包含層

白磁の碗は從米、宋の白磁で、平安末から鎌倉時代も古い時期に輸入された、と考えられてきたものである。また瓦質の壺は、須恵器の系譜を引く中世瓦器であり、口縁部の作りや、器胴のバランスから見て、鎌倉期の後半に考え得るものであろう。椀形品から見た場合、高台は低くなっているが丁寧に作られており口径も、大して矮小化されていない点、また底部凹底のものも、口縁の近くに屈曲するくせを持つ点などから、必ずしも室町期に下す必要はない。土鍋も同様の時期が考えられる。

以上の点を総合して考えると、これら中世のものは、まず、鎌倉期後半ごろのものと思われた。



鳥取県倉吉市東郷町藤津出土の家形土器

(倉吉市史による、名越勉氏原図)

附 女男岩遺跡出土人骨について

寺 門 之 隆

入手した資料は四肢骨を主体とした1体分と思われる石膏でかためた骨格である。保存は極めて悪く、石膏につつまれた土塊の間に、僅かに骨質の存在が断片的に認められるのみであり、歯もエナメル質を残すのみである。このために、以下の考察は、主として歯にもとづくものである。

歯種が明らかにされたのは、左側上顎の側切歯、第2大臼歯の遠心半分、第3大臼歯の夫々歯冠である。側切歯切縁の咬耗は、エナメル質が全面に摩耗する Martin や Brocca (註1) のいう1度、柄原 (註2) の分類では3段に相当する (図版第十二の1)。なお、この歯冠幅は、7.8mmである。第2大臼歯は、前述のように近心部は失われているが、咬耗はエナメル質に僅かに認められるのみで、Martin や Brocca (註1) の1度、柄原 (註2) の1段に相当する (図版第十二の2)。第3大臼歯の咬耗は殆んど認められず、その歯冠幅は10.2mm、歯冠厚は12.4mmである (図版第十二の3)。なお、これらの計測値は、すべて上条 (註3) の日本男性 (現代) のそれよりも大きい。また極めて不正確ではあるが、この資料のうち、左右の下腿骨の取り上げの際石膏に残された押し型から、この最大長は350mm程度と推定され、これは、城 (註4) の古墳時代男性の数値の範囲内にある。

以上から、本人骨は、上顎第3大臼歯が萌出して間もない、あるいは、第3大臼歯が萌出しかけた、即ち、17~22歳、すくなくとも25歳以前の男性のものと推定される。

註1 MARTIN-SALLER, 1957. Lehrbuch der Anthropologie Band 1, Stuttgart

註2 柄原博、1957、日本人歯牙の咬耗に関する研究、熊本医学会雑誌第31巻補冊4

註3 上条雍彦、1962、日本人永久歯の解剖学 (口腔解剖学II^b)、東京医科歯科大学解剖学教室

註4 城義雄、1938、古墳時代日本人人骨の人類学的研究、人類学雑誌第1輯

IV 辻山田遺跡

間壁忠彦・間壁貞子

一、遺跡の立地と概要（図1、2）

王墓山丘陵の中央部から西に向って延びる尾根は、女男岩遺跡から更に西へ進むと、南へおれる。それは、女男岩遺跡の南に見おろされた大池を北と西からとりかこむような形をとる。このあたりは、王墓山丘陵の南西部にあたり、大字は西尾、小字は辻山田に属する。この尾根上は、女男岩遺跡よりやや低く、標高は最高所27.5m、全体に26~27mを示し、もともと山畑になっていた。

尾根のすぐ西を南北に走る県道矢部線ぞいでは、従来も土取りが盛んに行なわれ、尾根は西側から削りとられ、常に新しい断面をみせていましたが、圃地造成とは関係なく、以前からしばしば注意してきたその断面観察でも遺跡の存在は知られていてなかつたし、数次にわたる分布調査でも遺跡として、チェック出来ていなかつた。ところが、工事着手の直後の第四次調査中、弥生式土器片が発見され、それにもとづいて、かなり変形のはげしい尾根上を広く発掘した結果、次々に四カ所にわたって土壙墓群を確認したもので、小字名をとって辻山田遺跡とした。辻山田遺跡の尾根上からも、女男岩遺跡と同様に南へ向くと上東遺跡、北へ向くと矢部の部落をのぞむことが出来る。女男岩遺跡と辻山田遺跡とは、立地の上からは一連の遺跡とみられるものであろう。

二、遺跡の状況（図版第十三の（1）、図26）

女男岩遺跡から西へ延びる尾根の中で、女男岩遺跡中央土壙墓のある高所から南西70mにあたる標高31.5mの高所はぶどう畑となっており、この部分を中心に、第二次調査の折、女男岩遺跡との関係で、各所にトレンチを入れ調査をしたが、遺跡とは認められなかつた。その部分から70m西方、女男岩遺跡から西方130mに標高27.5mの高所があり、その間の鞍部で27.5m高地の東に接した部分に、まず土壙墓群と思われる遺構が認められ、これを辻山田遺跡東地点とした。27.5m高地上と、その西及び北の一段低い畑にも溝状遺構と土壙墓群が知られ、これを辻山田北地点とする。ここから尾根は南におれ、ほぼ同じ高さで南方に続くのであるが、辻山田北地点から20mあまり南よりの尾根上にも、土壙墓群と溝状遺構が存在し、これを辻山田中地点とした。さらに尾根上を南へ25mの地点に、同類の土壙墓群と溝状遺構が発見され、辻山田南地点と名付けた。

これらの東、北、中、南の四地点とも、尾根上は畑地としての削平が進んでいたし、尾根の斜面にも段々畑が作られて、旧地表は著しく変形され、旧地形の骨組が残っているにすぎなかつた。そのために、残存した遺構もかろうじて遺構の下底面のみをとどめるだけとなつたものが多かつたのである。その上、同じ尾根上に中世のものと考えられる墓穴も掘られ、土壙墓にともなう穴状遺構とも思われる状況を示しており、それとの識別がかなり困難でもあった。さらに畑地用の小溜池あるいは、水溜用の小さな堀がいくつか作られており、その一部には、すでに埋めもどされていたものまであって、溝状遺構と区別するにかなりの努力を要するものまで存在した。

以上のような状況の遺跡であるから、本来の遺跡の全貌をあきらかに出来たとは考えられないが、おおかたの様相は、残存した遺構から推定できると思われ、以下に順次、地点ごとに記述するもので

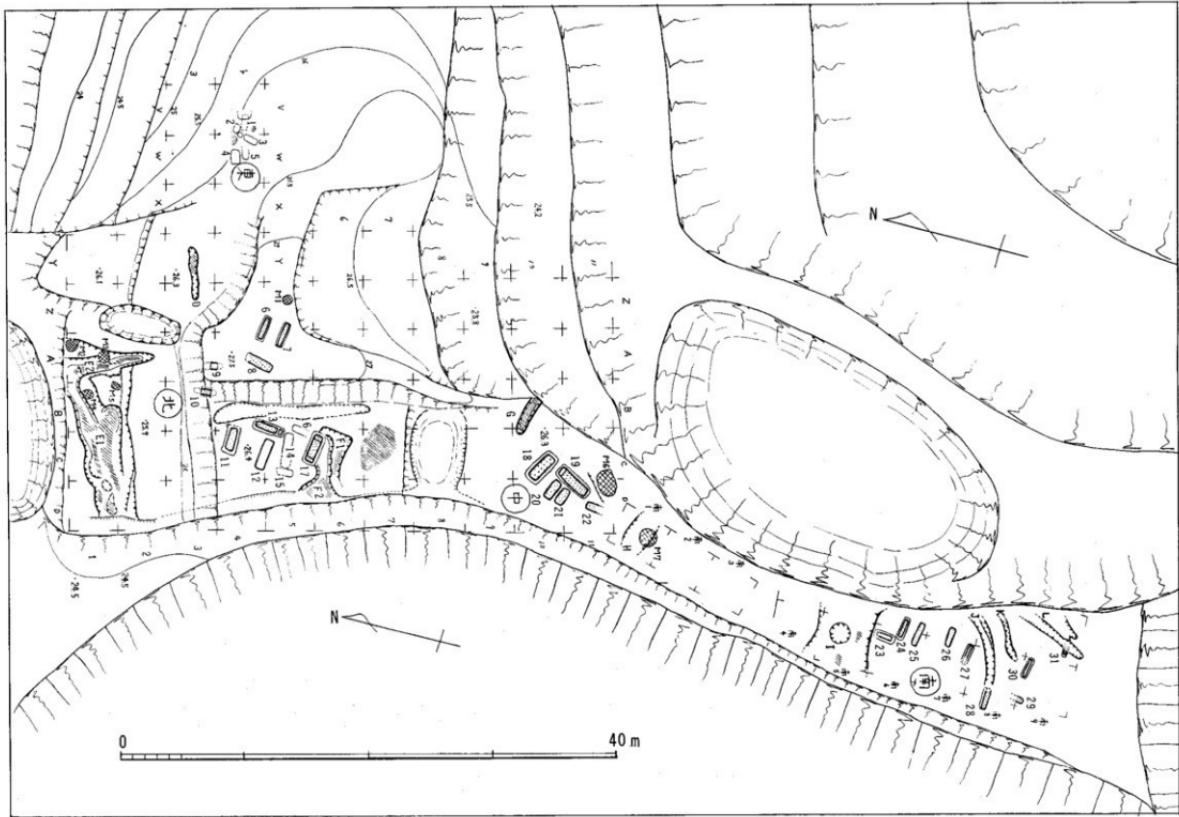


図26 辻山田遺跡の地形と遺構

ある。それに先だって遺跡・遺構の全形図(図26)および、部分図(図27~33)に使用した記号など概要を示しておきたい。

調査の過程で、東、北および中地点については、東から西へV・W・X・Y・Z・A・B・C・D、北から南へ1~11の記号を付した4m角の区画を、それより南については、尾根地形に制約されて、区画の向きを南西に変えて、北から南1~3および4~9の区画を設定したが、それらを遺構図に書き入れて遺構の部分図が、遺跡全形図のどの部分にあたるかを知らせる手がかりとした。

土壇墓の番号は、東、北、中、南の地点順に1~31とし、溝状遺構については、出土した土器類を女男岩遺跡の土器と関連させて記述する便宜上、女男岩遺跡で使用した溝A~Cに統いて、土壇墓と同じ順で、溝D~Lの記号を与えた。また、中世の墓穴についてはM1~M7とした。遺構断面図の基準高に印した数値は、標高値である。

A. 辻山田遺跡東地点(図版第十三の(1、2)、図26、27)

標高27.5mの最高所から、10mあまり東によった部分で、尾根筋の北よりの地点にあたり、V4、W4区にわたった地点である。耕土直下の地表面にかろうじて、遺構の残骸と考えられる部分が発見された。遺構と推定されるものは、尾根に平行または直交する土壇墓とみられる地表面への掘り込みの基底部分が五ヵ所と穴状遺構の基底部かと思われる部分が、比較的近接して存在した。

この地点は、

表土上面から地
表面までが、削
られて大変浅く
なり、そのうえ
地表面上には、
後の攪乱により
著しい凹凸がみ
られたため、部
分的にわずかに
とどめられるに
過ぎず、土壇墓
の全形も推定部
分が多く、正確
に把握することは
出来なかっ
た。また、遺構
相互の切り合い
関係も確かめら
れていない。

土壇墓1は、

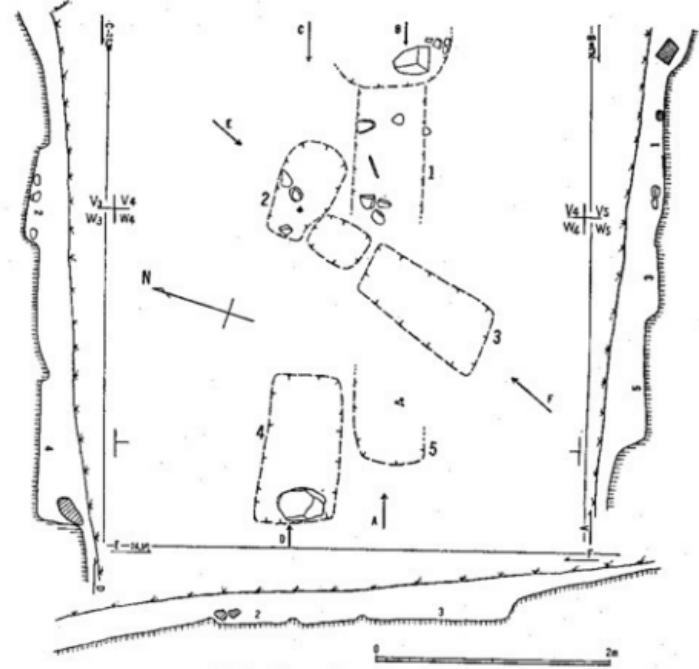


図27 東 地 点

表土下の地山上面に、わずかに有機土を含む薄い層が尾根筋に平行して東西にみられ、有機土層下に、刀子状をした鉄器一点が検出され、土壙墓床面と推定された。土壙墓床面の幅は50cmばかりと思われるが正確ではない。床面をおおう有機土中には、若干の自然石が含まれ、土器片も認められた。床面の長さも、東西両端とも他の遺構と思われる掘り込みと重なっていて確認できなかったが、1.5mを越すことは確実と考えられる。土壙墓1の東には、地山を掘り込んだ穴状遺構と考えられるものがあり、穴の中には有機土と自然石および土器片が存在したが、東部は既に削平されて、全形を確認できなかった。

土壙墓2は、土壙墓1の北西に接し、ほぼ平行する長さの短いものであった。掘り込みは不明瞭な部分が多く推定の域を出ないが、幅50cm、長さ90cmで不整形ながら、有機分をわずかに含む層の下に一部で朱と思われる痕跡と鏃と考えられる鉄器断片一個が発見された。床面上の有機土中に、自然石を含むことは土壙墓1と同様である。土壙墓2の南西に接して、小さい方形の掘り込みを認めたが、性格はあきらかでない。

土壙墓3は、土壙墓1と重なる様に南西に接し、尾根と直交する形で、ようやくにして存在が認められた。ほぼ長方形を示し、長さ約120cm、幅約50cmを計る。土壙墓3の西側には、土壙墓4と5が相接し、尾根に平行してならぶ。

土壙墓4は、北側に位置し、長さ120cm、幅60cm、西端の掘り込み上にやや大形の石があった。土壙墓5は、西端の痕跡のみをとどめ、東半は、確かにないため、長さはあきらかでないが、幅は約60cmと思われ、地山床面上のうすい有機土中に土器片を含む。また、土壙墓4と5の間に長頸壺が一個発見され、これはほぼ完形に復元された。

辻山田遺跡東地点で認められた遺構は、上記のものであったが、この地点で遺構がさらに附近に延びていたかどうかは、先にも記したように、すでに畑地として古くから削られていて確認することは出来なかった。

B. 辻山田遺跡北地点（図版第十四～十六、図26、28～31）

北地点は、東から西へ延びた尾根が、南に屈曲する場所にあたる27.5m高地上と、その北および西の畑地にかけて発見された遺構群であり、Y・Z・A・B・C・Dの1～7にわたる区画中にひろがっている。

27.5m上の高地に土壙墓6～8の三基があり、その北側の一段低い畑地にやや東へ寄って、上部の大半を削りとられた溝状遺構Dの下端が残存した。溝Dの西で、土壙墓6～8の北西には、山畑の切り岸にかかる、ようやく一部床面のみをとどめた土壙墓9・10があり、その北の一段低い畑に大きな溝状遺構Eがある。溝Eの南に続く一段高い畑地は、土壙墓6～8のある27.5m高地よりは一段低く、西側にあたる。ここには土壙墓11～17があり、その南に溝状遺構Fがある。

これらの遺構のうち土壙墓は、たがいに平行または直交する位置にあり、それは尾根に対し、ほぼ平行か直交かの関係にもなるのであり、土壙墓がたがいに切りあうものはほとんどない。溝状遺構も、土壙墓とはほぼ同様な向きを示し、それぞれ土壙墓群のはざれで尾根を区画するような位置にある。

溝Dと溝Eの間には小さな水溜の堀があり、溝Eの畑の北側にも小溜池がある。土壙墓11～17、溝Fのある畑の東端で、土壙墓6～8の西側切り岸の下に溝状遺構と区別し難い様な掘り込みがみられ

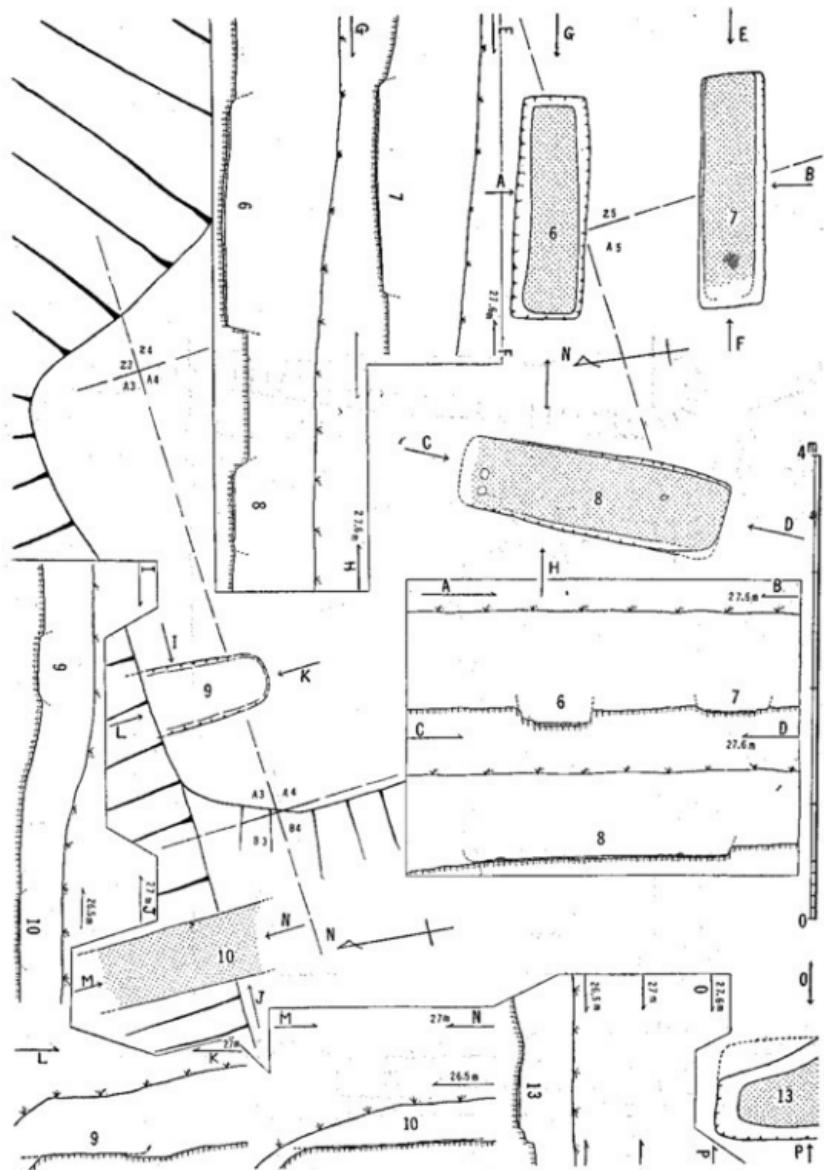


図28 北地点27.5m高地上と切り岸中の土壤墓

たが、溝底の粘質土の堆積状況などからみて他の溝状遺構とは異っており、水溜の細長い堀が埋められたものと考えた。また、その南の切り岸の下にもかなり深い同様な様相を示す堀のあとが認められたのである。

そのほかに、土壙墓6、7の東側に一個と、溝E中に四個の不整形な円形の掘り込みが認められたが、これは先の土壙墓や溝状遺構とは直接には関係のない後の時期の墓穴であった。

大略以上のような遺構の配置が知られた辻山田遺跡北地点は、切り岸を作り、削平されて四段にわかれた畑地にわたっていたが、本来は27.5m高地から北と西へゆるく傾斜した一連の尾根頂上部にあたる部分を占めていたのである。

1) 土 壙 墓

a. 27.5m高地上の土壙墓（土壙墓6～8）（図28）

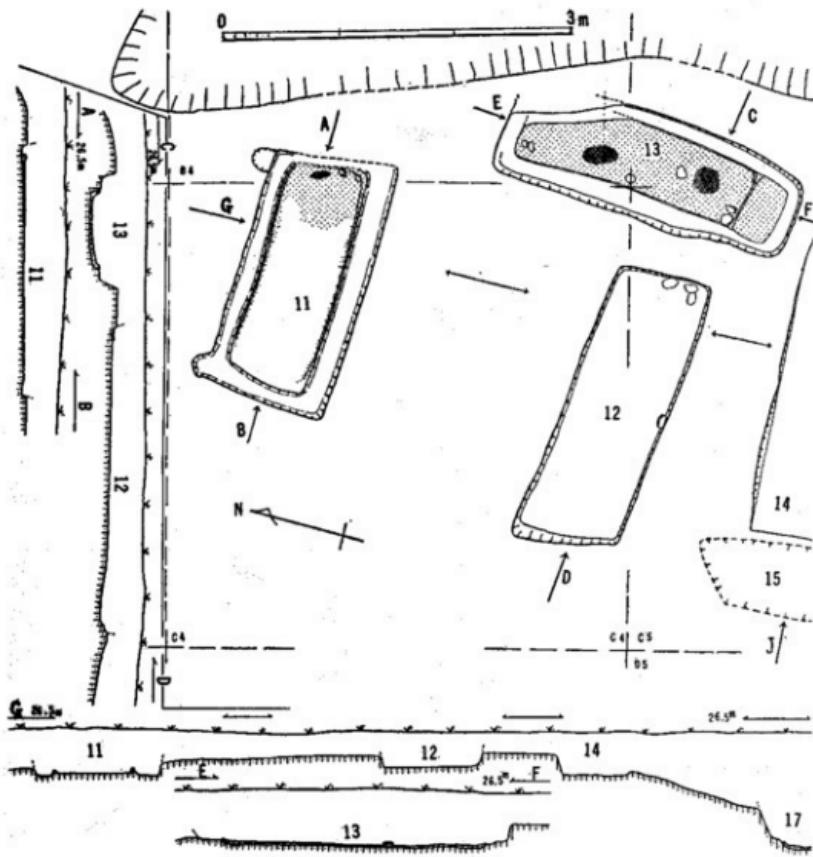


図29A 北地点西側段畑の遺構 (1)

土壙墓6、7は東西に長く90cmの間隔をおいて平行し、その西110cmの所に土壙墓8が直行した位置を占める。地表から土壙墓床面までは、70cm～80cmもあるが、そのほとんどは、近世の陶磁器片までを含んだ攪乱層で、この地点に石地蔵がまつられていたことと関係してか、一度削られた後に、土盛りが行なわれたことが確認されたのである。そのために、実際に確認された遺構は上擴掘り込みの下端が深い所でも15cm、浅い所では2～3cm残っていたにすぎない。しかし、土壙の底面は、すでに枯死していた巨松の根で壊されていた土壙墓8の北端をのぞき、三基ともほぼどめられていた。三基とも長方形土擴掘り込みの長辺に平行して、土壙底でわずかに段を作り、床面は段よりも2～4cm低い。床面は、ほぼ平らで1～3cmの厚さに粘土が敷かれている。粘土床の大きさは、6は幅40cm、長さ175cm、7は幅45cm、長さ180cm、8は幅60cm、長さ推定210cm、7の床面西端近くには朱を思わせる痕跡を残す。8では、北端床面に二個、南端近くに一個の石が粘土中にくい込んだ形でおかれて

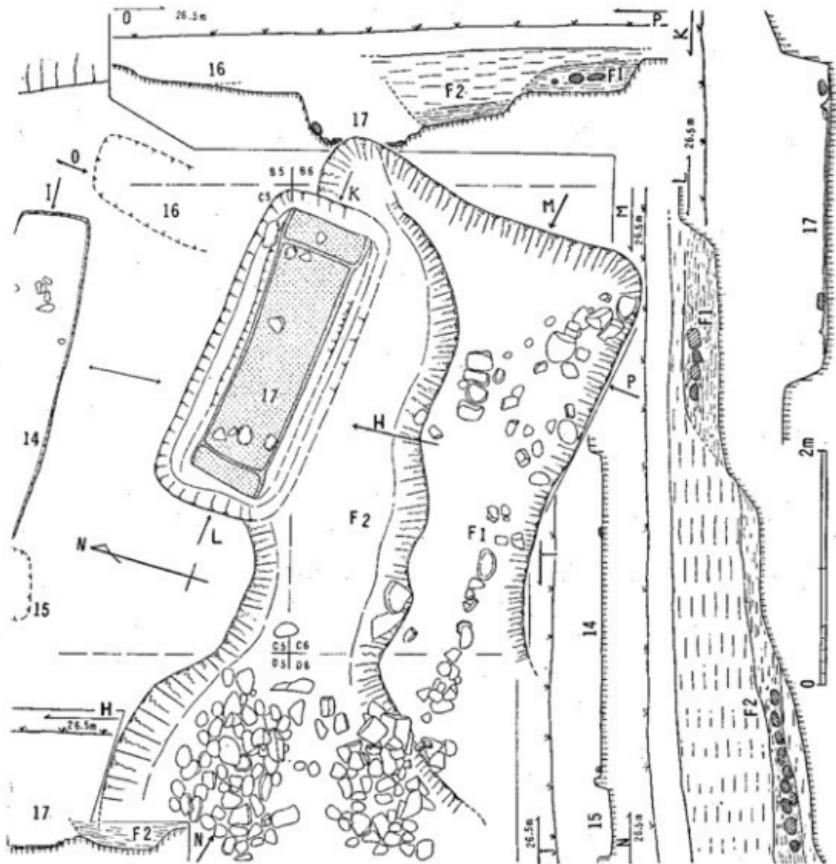


図29B 北地点西側段畑の遺構 (2)

いた。三基とも副葬の遺物は全く認められなかった。土壌をおおう土層中にはわずかながら土器を含んでいたが、土壌周辺におかれた現位置の土器ではなく、攪乱されている可能性が強い。

この三基の土壌墓は、他のこの地点の土壌墓にくらべ床面のレベルが50cm余り高く、本来の地形は、現在みられる1mを越す地表の高低差ほどではないが、北地点土壌墓中では、最高所に位置していたと考えられる。しかし、これら三基の土壌墓をとりまく周辺の地形に何らかの加工が加えられていたかどうかは、その後の地形の変化が著しく、確認できなかった。なお、この三基の土壌墓の南に続く、やや平坦な畑地も全面調査したが、耕土下がただちに地山となり、二、三の土器片が耕土中に認められたにすぎない。

b. 切り岸中の土壌墓（土壌墓9、10）（図28）

ほぼ南北に向いて平行した二基の土壌墓が、27.5m高地北西の切り岸中に、からうじてその一部をとどめていた。古くから行なわれていた畑地造成の際の攪乱がはげしく、さらに岸に生育した草木の根で荒らされ、床面の一部だけが残されていて、掘り込みの状況などは全く不明である。

二基のうち、東に位置する土壌墓9は、幅50cmで南北半部にあたる長さ約1mの部分が残存する。残存部床面も荒れていて確かに、床面は平らで粘土敷きの痕跡は認められない。その西1.8mに土壌墓10の床面が南北両端を失って残存していた。床面は、地山上に厚い所で2cmばかりの粘土が認められ、粘土面は平らで幅55cm、残存長140cmを計る。残された粘土面にも攪乱が及び、粘土中から発見された玉類や青銅小断片が、古い時期に破碎されていた状態を示すのである。そうした状況であったので、粘土面上で残存部中央やや南よりの東縁で小勾玉一点と管玉二点を認めたほかは、攪乱された土まじり粘土を全部採集して、水ごしし、点検することによって、玉類と青銅小断片を検出したのである。

土壌墓9、10の北側にも、もとはほかに土壌墓が存在したかも知れないが、段畑にするために削平されているので、確認できなかった。なお、土壌墓9、10の床面はほぼ同レベルで、6～8に比べ約50cm低い。

c. 西側段畑の土壌墓（土壌墓11～17）（図29A・B）

土壌墓6～8のある27.5m高地の西側で約1mの高さを示す段畑切り岸の下には、南北約15m、東西7～8mの畑が、標高26.4m前後の高さで作られていた。この段畑の北半部に七基の土壌墓が検出された。そのほとんどは、表土下30～40cmで達する地山面に、土壌掘り込みの下部をようやくにしてとどめる状態で残存していた。畑の表土面は、ほぼ平坦にみえたが、地山面は北から南へわずかに傾斜しており、土壌墓底面も、北のものが高く、南のものほど低い状況を示し、もともとの地形も北にやや高かったと思われた。この部分の土壌には副葬品は全くみられなかった。

土 壤 墓 11

畑の北端に近い位置の土壌墓11は、東西に長い長方形を示し、東端がやや不明瞭であるが、掘り込みの底面で長さ220cm、幅110cmを計る。地表下30cmばかりの深さにからうじて土壌面のみを残していた。土壌底面の四周に、幅15～20cmで、深さが2～3cmの溝状部分を作り、その内側のわずかに高くなった部分に、ごく薄く粘土が敷かれていた。粘土床部分の長さ180cm、幅70cm、粘土床面はほぼ平坦になっていた。粘土床面の東端部に朱と思われる痕跡があり、東南隅に小石が二個粘土にくい込ん

で認められた。掘り込みの北長側の両端に突出部かと思われる部分があったが、耕作土直下のことであるので、本来の掘り込み痕かどうかは明らかでない。

土 壤 墓 12

土壌墓11と平行して南190cmに、土壌墓12が存在する。長さ240cm、幅80cmで、地表下約30cmに掘り込みの下端のみをとどめていた。床面はほぼ平らに作られ、粘土は認められない。床面東端部に三個、中央部南側の縁ぞいに一個石がおかれ、床面のレベルは土壌墓11とはほぼ同じであった。

土 壤 墓 13

土壌墓13は、土壌墓12のすぐ東側で長さ260cm、幅80cm、南北に長軸をおいて存在した。東北の隅は削られているが、掘り込みの底の四周は、幅15cmくらいがわずかに高くなつて段状を呈する。その内側の幅60cm、長さ230cmに厚さ1cmばかり粘土を敷いてあり、粘土面上の両端と中央部に石がおかれていった。床面は、ほぼ平坦で粘土床の両端から60~70cmのあたりに朱と思われる痕跡が二カ所あった。粘土床面の南から35cmばかりの所に長軸に直交して、幅2~3cmの帯状に粘土が盛り上る部分がみられる。この粘土の帯状盛り上り部分は、粘土床上に納めた木棺底部の端の痕跡か、小口板の痕跡を示すものであろう。床面は、土壌墓11、12よりやや深い。

土 壤 墓 14

土壌墓12の南80cmへたてて、東西に向いた土壌墓14がある。長さ270cm、幅60cmで、土壌の掘り込み下端部をかろじて検出できた。床面は、平らで粘土は用いないが、東端から50cmばかりの所と、西端部に小石がおかれ、床面上にわずかに有機分を含む土が認められた。

土 壤 墓 15, 16

土壌墓14の西に幅50cm長さ100cmの掘り込みが南北に向いて検出された。やや不整形であるが、床面は平坦であり、小形の土壌の可能性も考えられるので、一応土壌墓15とした。また、土壌墓14の東に幅50cmで、南北に向いた掘り込みを認め、これもあり明瞭ではないが、土壌墓16とした。北半部分の1mが残るのみで、南半は削られているが、全体として、大きな土壌とは思われない。

土 壤 墓 17

土壌墓14から、南へ約1m離れて、東西に向いた土壌墓17があった。土壌墓14のあたりからわずかながら地山面が南へ低くなり、本来の地形も土壌墓17の附近では、低くなつてたと思われるが、他の土壌よりも掘り込みも深く、床面のレベルも低い。表土上面から、地山切り込み上面まで約70cm、土壌底面まで約1mを計る。土壌の床面は、土壌墓11~16と較べると50~60cm低い。掘り込みの下端で長さ250cm、幅90cm、土壌の長側にそって幅約10cmの段をもち、段から6~7cm掘りくぼめて、その上に2cmほどの厚さの粘土が敷かれている。粘土床は幅70cm、両短側に粘土を敷かない部分を残して、長さ240cmの粘土床の両端近くと中央部には小さい石をおいてある。床面は平らであるが、粘土床両端から20cmと25cmのところに、長軸に直交する粘土の帯状の高みがあつて、土壌墓13の一端にみられたと同様、木棺の底板の端か小口板の痕跡と思われる。これによると、粘土床の長さは、240cmに達するが、粘土の帯状突出部の間隔は190cmである。西側の粘土帯状突出部から30cm東の附近に遺骸の歯と思われる痕跡が認められたが、すでに粉状になつていた。

この土壌墓は、のちに溝Fによって、南部上半が切り込まれていたが、土壌床面は、ほぼ完全に残

存していた。

2) 溝状遺構

a. 溝D (図30)

土壇墓6～8がある27.5m高地の北側には、高さ1mあまりの崖があって、その下段は東側で畠となり、西側には水溜の掘がある。この段も、もとの地形を削って、ほぼ平坦にしたものである。この畠地部分の表土下約70cmの深さで、地山にわずかな凹みが認められ、東西に延びる溝状遺構の基底部分と考えられたので溝Dとした。段畠を作る削平で、大半を失って、溝の底がかろうじて残ったもので、溝と認められる部分は、長さ約4m、幅30～60cmであるが、本来は、さらに大きい溝であったと思われる。溝の底に厚さ5cmばかりの堆積土がある上に、有機分を含む土が入り、その中に花崗石の自然石がまじり、土器片をかなり含んでいた。土器片は、溝におかれた土器が、その場でつぶれた様

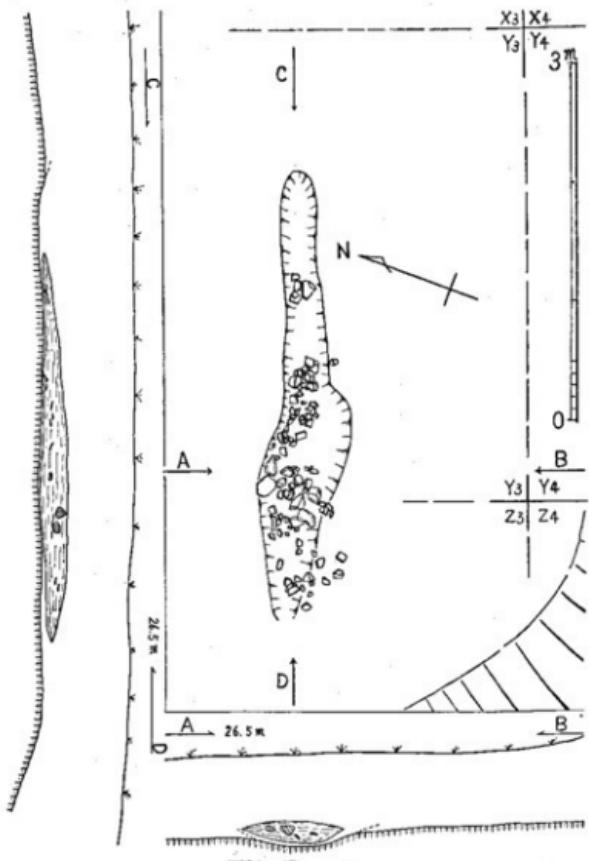


図30 溝 D

な状況で、有機土中に石と共に存在したが、その後の削平で、削りとられた部分が多くだったので、復元出来たものは少なかった。溝中の石も土器も溝底の地山面より、やや上ったレベルに堆積する有機土中に含まれることが注目されるのである。

溝Dは、土壇墓6と9に最も近く、6mの距離にあり、現状の土壇墓と溝状遺構の関係でいえば、土壇墓6～8、又は土壇墓9などと関連するものとしなければならないであろう。しかし、土壇墓より溝Dが東へずれており、あるいは溝Dのすぐ南にも土壇墓があったかも知れないが、削平されてしまっていて、確かめることは出来なかった。なお、溝Dの底面と土壇墓6～8の床面の高低差は80～90cmを計る。また、溝Dの

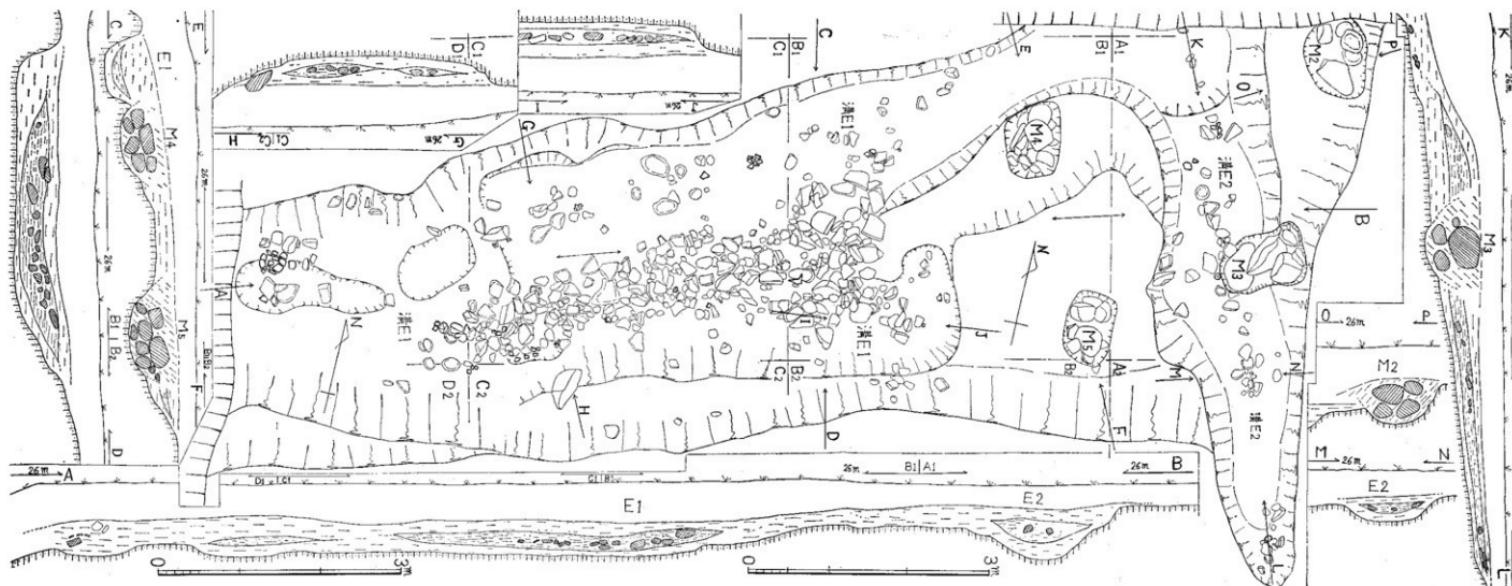


図31 满 E

北側は、約10mにわたってほぼ平坦な畑となっていたのでここも調査したが、遺構・遺物ともに見当らなかった。

b. 溝 E (図31)

土壇墓9、10がある切り岸と土壇墓11~17のある西側畑の北側は、標高25.8~25.9mで、ほぼ平坦な東西約16m、南北11mばかりの畑となっていたり、その北側には溜池があって、その部分で急に切りたって低くなる。その南半部は畑を作る時に地山面を削ってしまって、遺構の検出は出来ないが、地山面はもともと北にやや傾斜していたと思われ、その畑地の北半部に、溝状遺構が残存していた。溝状遺構は東西に14m、南北に4~6mを計る大きなもので、溝全体を溝Eと名付けた。

溝全体としてみると東西に長くみえるが、溝の東端部分は南北に延びる溝を形成していて、実は東側部分の南北溝と、西側の東西溝との二つの溝がL字状につながったものである。そこで東西溝の部分を溝E 1とし、南北溝を溝E 2とした。

東西に延びる溝E 1は、全体として幅4~5mにおよぶ広いものであり、その南側部の地山へ掘り込みの状況をみると、二段に掘られた形を示している。一段目の掘り込みは、現在確認できる地山面からほぼ30cm、地表下約60cmで、二段目の溝で大部分を切られ、溝E 1の東南端部に溝底の一部をとどめているにすぎない。しかもその部分に中世の墓穴が掘られていて、溝底が、ほぼ平坦であったことが知られるだけである。そのため、この一段目の掘り込みが墓域の一方の縁に加工を加えて墓域の地形を整えただけのものであったか、土器や石を堆積させる本来の溝であったのかは明らかでない。二段目の掘り込みは、溝E 1の東端部に一段目の溝底を一部残して、それより西にだけみられる。掘り込みの深さは、現地表面から90cmにおよび、溝底は、ほぼ平らであり、溝底地上に、すこし有機分を含んだ土層が、約40~50cmの厚さに堆積している。この有機土を含む土層の中に、やや有機分の多い土がレンズ状に入っていて、その層の中に花崗岩の自然石を主とし、わずかに河原石をまじえた石と、土器片が含まれている。溝底には、溝底の東西に並んだ三個所で、5cmばかり深くなつた凹所がみられる。これらは溝の中に、さらに掘り込みを加えた穴状遺構であるのか、溝の一部を深く掘り込んだ痕跡なのかは明らかでないが、やや有機分の多いレンズ状に認められる土層が、図31のA-B断面にみられる様に、東西二つに別れるので、あるいは、一度に掘られたものではなく、二度以上にわたるもののが、連続した結果、この溝の二段目の掘り込みが出来たものであるかも知れない。

溝E 1の北部は、一段目の掘り込み底を残した東端部の北側をも切り込んだ溝となって東西に延びており、溝中の堆積有機土が図31のG-H断面にみられるように、南北二つのレンズ状を示し、溝中に堆積した有機土中の石の入り方も含めて、二段目の切り込み溝の北部を切って、さらに三段目の溝が掘られて、溝が北に拡大されたような状況を示す。この部分の東端は、溝E 2の北端につながって、北側の切り岸の崖で切られて消滅している。溝E 1の西端は、溝Eのある畑の西側の切り岸で切られる。溝E 1は、全体としては、西と北の切り岸に向って、溝底のレベルが傾斜しており、本來の地形で低かった方向に傾斜を持っていたものと思われる。

溝Eの西側にも、一段低い平坦な畑があったが、溝Eの畑面より1.3mばかり低く、削平されていて遺構も遺物も発見されなかった。

溝E 2の地山掘り込みが、E 1の三段目掘り込み東端から南にまがって続いた状況を示すことは、

先にも記した通りである。溝E 1 の三段目と溝E 2との掘り込みの前後関係は、同時であったことを含めて、土層による確認は出来なかったが、溝中の土器からみると溝E 2 のものは、溝E 1 の土器の中に含まれる要素の中では後発的な性格を示したのであった。溝E 2 の上面は、北で広く2.5m、南では狭く1mとなるが、溝底は全体に幅約1mで、溝底面はゆるいU字形を示すのである。溝中の堆積状況は溝E 1 と同様である。現状の溝E 2 は、南北の長さは6.5mであるが、南端は畑の南部の地山削平部分で、舌端状に消失しており、本末は、さらに南に続いている可能性もある。北端は、北側小溜池に続く急な切り岸で切られて消滅している。溝E 2 は、南から北へ向って溝底が著しく傾斜し、南と北では60cmを越す高低差を示す。溝E 2 の東側斜面に二基の中世墓穴があったが、これについては、溝E 1 の一段目切り込み中の二基の墓穴と共に後に記す。

溝Eは、位置関係からみると、土壤墓9~17と関係する遺構であると思われるが、そのほかにも、溝Eと土壤墓9~17の間で、地山を削平されている部分に、さらに別の土壤墓が存在した可能性も考えなければならないであろう。なお、溝底と土壤墓9~16などの床面との高低差は約1mを計る。

c. 溝 F (図29B)

溝D・Eが辻山田北地点の北端部の東西にあったのに対し、溝Fは南端に位置する。土壤墓11~17のある畑地の南部にはほぼ東西に向いて掘られたものである。溝Fを全体としてみると、東西長約6m、南北幅約2.5mを計り、東西向きの土壤墓とはほぼ平行している。溝Fも、南側の地山掘り込み痕が二段に掘られていて、二度にわたって、溝が掘られたことを示している。まず南側一段目の地山掘り込みを残す溝が掘られ、続いてこの溝の北半により深く地山の掘り込み痕を残す二段目の溝が掘られたと考えられる。南半に浅い溝底を残す一段目の溝を溝F 1 とし、北半に深く掘られた二段目の溝を溝F 2 とした。

溝F 1 、F 2とも溝中に有機土がつまり、有機土の中位に、特に有機分の多い上層が認められる。その部分に、花崗岩の自然石と土器片を含むことは、溝D・Eなどと同様である。

溝F 1 の底面は表土下60cm、地山上面から30cm掘り込まれ、溝F 2 は、さらに20~50cm深く掘り込まれている。溝の西端では溝F 1 の部分はほとんどなく、全て溝F 2 で掘りなおされた状況を示す。溝F 1 、F 2とともに、溝底は東に高く西が低い。また溝の西端は、この地点の西側の切り岸の崖で切られている。溝F 2 は、土壤墓17の南半の上部を切り込んで掘られていて、土壤墓17の上部にも、溝F 2 の有機土層とそれに含まれた自然石および土器片がおおっていた。溝F 2 の溝底と土壤墓17の床面はほぼ同じレベルを示したが、F 1 の床面より見ると17の床面は、はるかに深い位置にあった。この状況は、土壤墓17が、溝F 2 より古くから存在した事を示してはいるが、床面の高低差だけでは、溝F 1 と土壤墓17の先後はつけ難かった。

溝Fの南側でも、有機土層とそれに含まれた自然石および土器片が耕土下で発見されたが、このうち土器片の中に溝F 1 中の土器片と接合するものがいくつかあり、溝F 2 が掘られた時に、溝F 1 に含まれていた有機土層が、南側に掘り上げられて堆積していたものと判断したのである。

溝Fとあたかも直交するように、東側に認められた溝状の痕跡は、畑地の水溜の堀のあとであったことは、先にも指摘した。溝Fの南方の一段低い畑にある掘り込み痕も、また同様な水溜の堀のあとと思われた。したがって溝Fは、辻山田北地点で確認された遺構の中で南端のものであり、北地点西

側段烟上の土壤墓11~17と関係をもつものと考えられた。

C. 辻山田遺跡中地点（図版第十七、図32A・B）

辻山田北地点から南へ向いた尾根は、細まって南に続く。北地点西側段烟の南で一段低くなった部分に既に埋められていた水溜の堀があったが、その部分から南に行くに従って再びわずかに高くなり、中地点の遺構があるB・C・Dの10・11区のあたりの現地表は、26.2mの標高を示す。この中地点の東側は段烟の切り岸の崖となり、西側では、土取りの崖がせまっていた。この地点では、北端の東側部分に、溝状遺構Gの基部が残り、南端部分に溝Hがあって、その間の南北約10mの間に5基の土壤墓が近接して検出された。北から順次土壤墓18~22とした。

1) 土 墓

a. 土 墓 18

北端にある土壤墓18は、尾根に直交して東西に向く。地表下約30cmの地山面から、長さ280cm、幅140cmの長方形の土壤が掘られ、掘り込みの深さは、地表下85cm、土壤下端の長さ240cm、幅90cmを示す。土壤の北側では、土壤底面より5cmくらい高い位置に幅5cmほどの平坦な段を作っている。ほぼ平らな土壤の下面上の全体に粘土が敷かれているが、粘土の堆積状況は、土壤下面に一様の厚さでみられるのではない。西端部の約30cmの間は、粘土が2~1cmの厚さに敷かれ、続いて、その東側で上方へ垂直に7~8cm粘土は厚くなり、粘土の厚さ全体は10cmばかりとなる。その厚さで粘土は東に185cm続き、粘土の床東端から西へ25cmの所から再び薄くなる。粘土床の長辺に当る南側と北側は、盛り上るように内側で厚くなつて、粘土の厚さは12cmになり、つづいて中央部では60cm幅に約10cmの厚さを示す粘土層上面にはほぼ垂直におりるのである。粘土層は、10cmの厚さ全体にわたつてほぼ同様な堆積状況を示すのであるが、下面から1cm~2cmのあたりの東端近くで、わずかに朱の痕跡が認められると共に遺骸の歯が粉状になつたものがみられ、これを床面と考えた。この面とほぼ同じレベルで土壤中央部にも、一部に骨粉となつた遺骸の痕跡が認められたのである。従つて土壤掘り込みの底面から1~2cmあがつたレベルの床面の上にも約8cmの厚さに粘土が堆積していたことになり、これは、木棺の上部をつつんでいた粘土が、床面に落下したものと推定できるのである。

床面の幅は約60cm、長さ185cmばかりと推定され、それよりも広く土壤掘り込みの下面全体に粘土が敷かれ、その上に底面のほぼ平らな木棺が安置されたのである。そうして、木棺の底板の大きさは、床面として認定されたのは幅60cm、長さ185cmと一致していたものと思われる。床面の北西端には、粘土床中に小石が一個認められた。

また、粘土床面と推定された幅60cm、長さ180cmの長方形部分と地山掘り込み穴の間の部分には、地山の土と同種の土がつめられていたものであろう。この土は、後にもそのままの形で残り、土壤墓内面側の四周に当つた部分では、ほぼ垂直に粘土が付着した部分を残していた。これは、木棺が腐朽して、木棺をつつんでいた粘土が床面上に落下した後も、木棺の形を土にとどめたことになり、その形状を伝ずるならば、木棺は床面からほぼ垂直に立ち上る形態のものであったと推定されるのである。それと共に、粘土上面の南側長側の上部に細い帶状の突出部が、木棺側面の埋め土と平行してみられ、垂直におりた埋め土の内面との間に細い溝状部を作つてゐるのは、木棺の南側長側をまいた粘土が木棺の腐朽後に落下した時に偶然出来たものであったとすれば、合理的に説明できると思われた。

いずれにしても、土塙墓18は、使用されていた粘土が、女男岩・辻山田両遺跡中で知られた全ての土塙墓中で、群を抜いて多く、しかも本棺を粘土まきしていたことの判明した唯一の例であった。その事実だけから、この土塙墓は、他の土塙よりかなり特殊性を持つかとも思われるが、この18号の立地地点とか、他のほとんどの土塙と同様副葬品が認められない点などから見て、女男岩中央土塙ほどの特性が認め得るものか否かは疑問である。

b. 土 塙 墓 19

土塙墓18の東半部南側に約60cmの間をおいて、土塙墓18と直交する南北方向に長軸を置く土塙墓19の掘り込みがある。長方形の土塙掘り込みは、表土下約40cmの地山上面で長さ275cm、幅100cm、地山上面から40cmで、表土上面からは80cmに当る土塙下面では長さ245cm、幅70cmを計る。土塙墓19と18

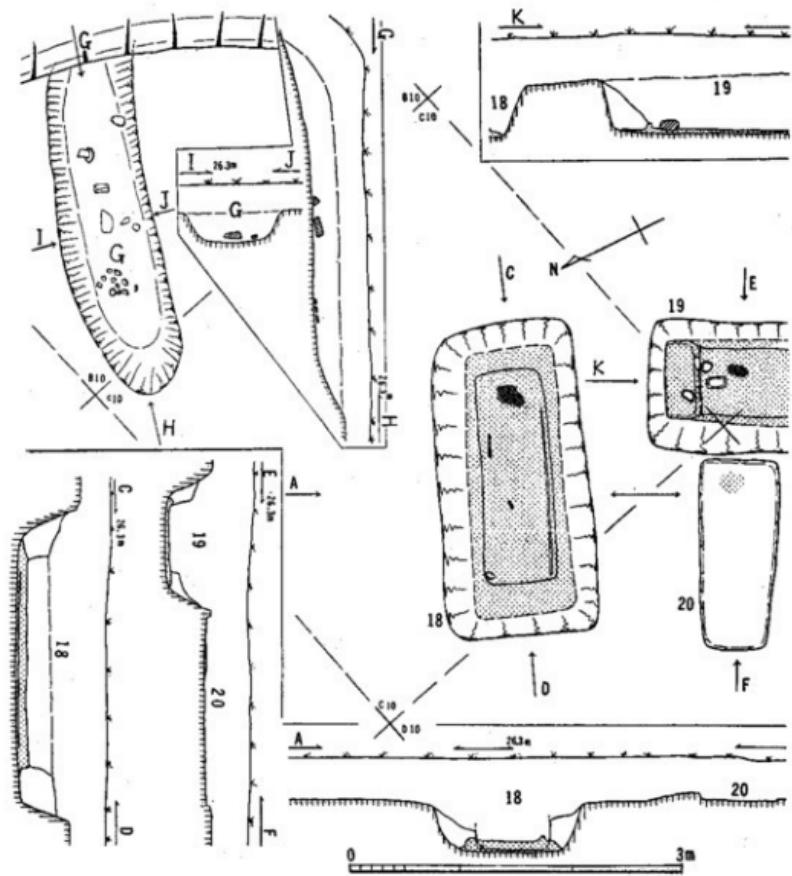


図32A 中地点の遺構(1)

の掘り込み底面は、ほぼ同じレベルを示している。掘り込みの底面は平坦でその上に厚さ2cmばかり粘土を敷き、粘土床の両端部には2~3個の石が、粘土面にくい込む様におかれていった。

粘土床北端部から20cmほどの所に粘土の帶状突出部がみられ、粘土床上におかれた木棺の底板の端か、小口板の痕跡を思われる。東西の長側ぞいと南端部では、粘土床南端から内側へ約20cm、東側で7~8cm、西側で12~13cmのところまで、地山の土と同種の埋め土で、かたくしまった部分が、ほぼ垂直におりていたことが認められる。それは、北端の粘土帶突出部附近では確かめられなかったが、土壌墓18で木棺と土壤掘り込みの間に埋められていた土と同種類の性格を持つものと考えられるのである。その埋め土の状況を信じ、また東端の粘土の帶状突出部を木棺の端部痕跡とするならば、納められた木棺の大きさは、長さ190cm、幅60cm程度のものであったことになり、棺の側面は、底面からは

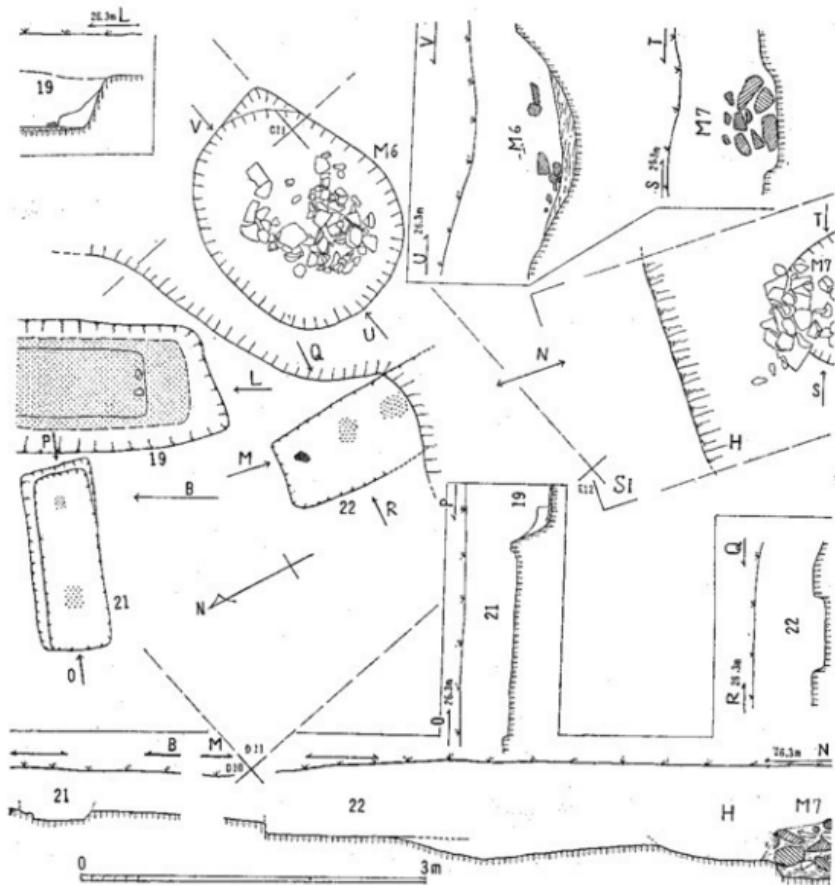


図32B 中地点の遺構(2)

は垂直に立ち上る形態を持っていたことにもなる。そして、土墳墓18と19は、掘り込みの大きさも、木棺の大きさも、ほぼ近似したものであったとすることが出来るのである。土墳墓19にも副葬品は認められなかったが、粘土床東端部にわずかに朱と思われる痕跡と粉状になった遺骸の歯の痕跡が知られた。

c. 土 墓 20, 21

土墳墓19の北部西側縁に接して、土墳墓20が東西に長く存在し、そのすぐ南に接して、平行に土墳墓21があった。共に、地山面から5cm前後の掘り込み痕が認められたにすぎず、土墳底面をようやくに残していただけであった。

土墳底面は20で、表土上面から40cm、21は45cm、20が21より5cmほど高く、18や19の底面よりは約30cm高い位置にある。20、21とも、底面は平らで、部分的に粘土敷きの痕をとどめている。20は長さ170cm、幅70cm、21は長さ160cm、幅60cm。21は南側の一端と北側にわずかに段を作り、東端に浅い溝状部をとどめている。20、21ともに副葬品は認められなかった。

d. 土 墓 22

土墳墓21の南に南北に向いて、土墳墓22が知られた。土墳墓21より底面は約30cm低いが、地山面が南に下るので、ようやく、基部を残すのみであり、南端は欠失している。現存部長170cm、幅65cm、床面の一部に粘土敷きのあとをとどめ、北部床面にかすかに朱と思われる痕跡をとどめる。副葬品は発見されなかった。

2) 溝 状 遺 構

a. 溝 G

土墳墓18の北約2.5mにほぼ東西に向いた溝Gが幅約1m、長さ3mにわたって、地山面をU字状に掘り込んでいる。尾根上を横断する様な位置にあり、東端は、東側の崖に入りて消失し、西端は、尾根幅の約3倍までが確認されたにすぎない。溝底は、東に低く西に高くなっている。地山への掘り込みは深い所で20cmあまりを示し、溝中にはうすい有機土が堆積する。有機土中に自然石と土器片が含まれるが、土器片の包含状況は、溝の上部の大半が後に削られた状態を示すので、溝は、現存するものよりも本来幅が広く、さらに西方へも延びていたと思われる。現状では尾根の東方にかたよっているが、中地点十賀墓群の北端部を区切った溝であったことは確かである。溝底は、土墳墓18、19より浅く、20、21より深い。

b. 溝 H

土墳墓22の南側で、尾根が細まりかけるところに、東西向きて尾根を横に切断する溝が、幅約2mにわたって地山を切り込んでいた。この溝も上半部は、削られてしまっているので、溝の基底部のゆるいU字形の凹凸部分のみが認められたものである。そのため、もとは溝幅が更に広く、土墳墓22に接して掘られていたと思われる。既に記してきた溝と同様に溝中には有機土があり、土器片も含まれるが、溝中に後の時期の墓穴が掘られているため、溝中の堆積物の残存状況は大変悪かった。溝底はどの土墳墓よりも深い。

土墳墓19と22の東側では地山が東に向いて傾斜していたが、これは本来の地形によるものと考えられ、特に加工を加えた痕跡とは認められなかった。なお、その部分にも一個の墓穴が検出されたが、

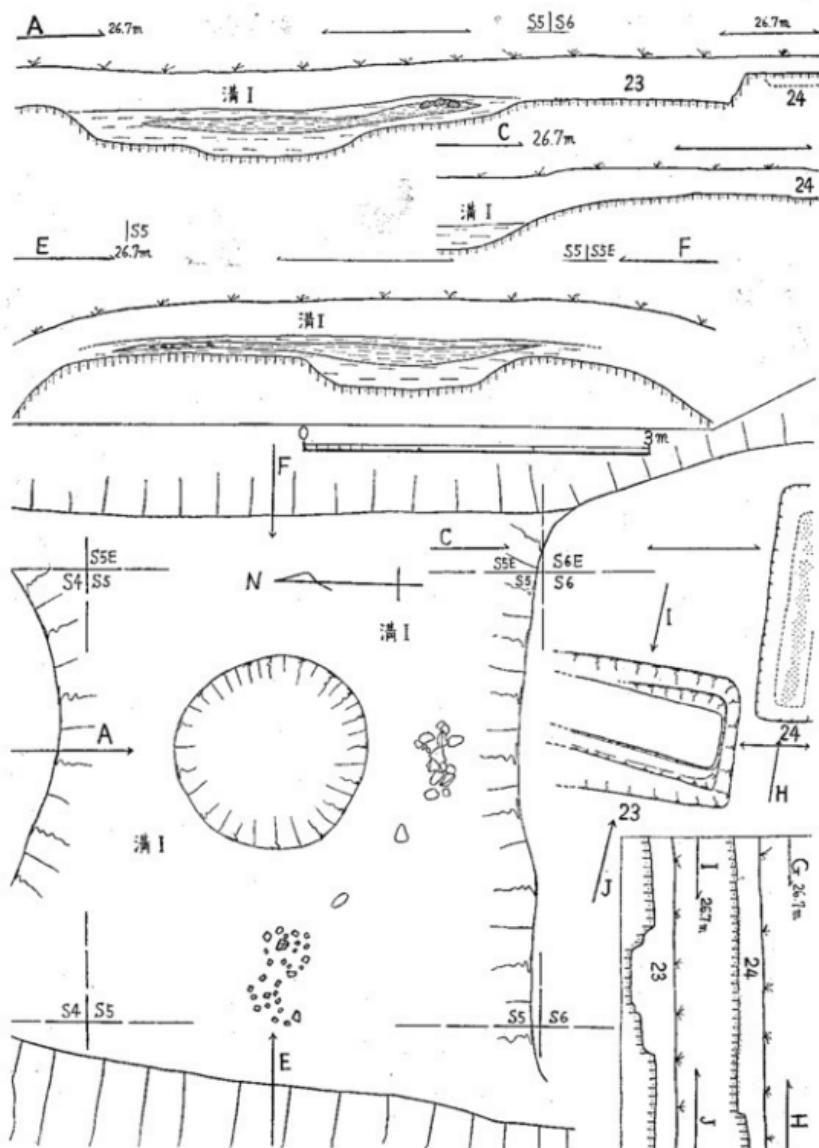


図33A 南地点の遺構(1)

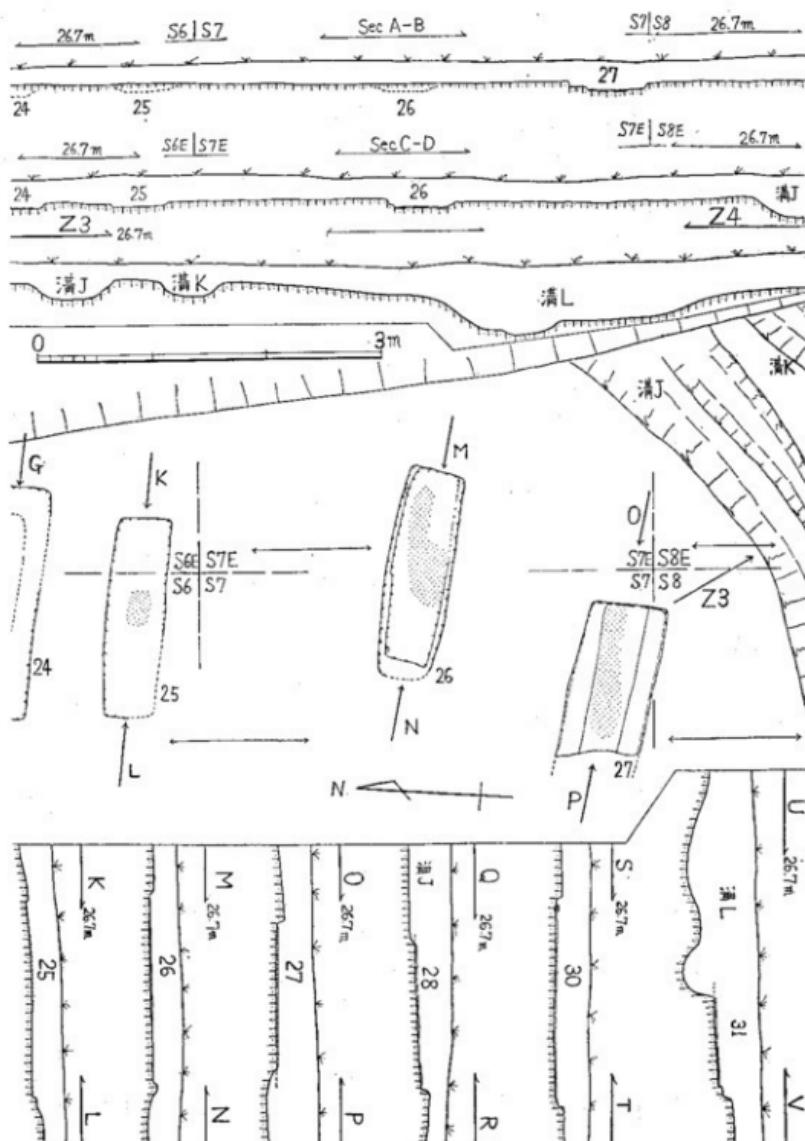


図33B 南地点の遺構(2)

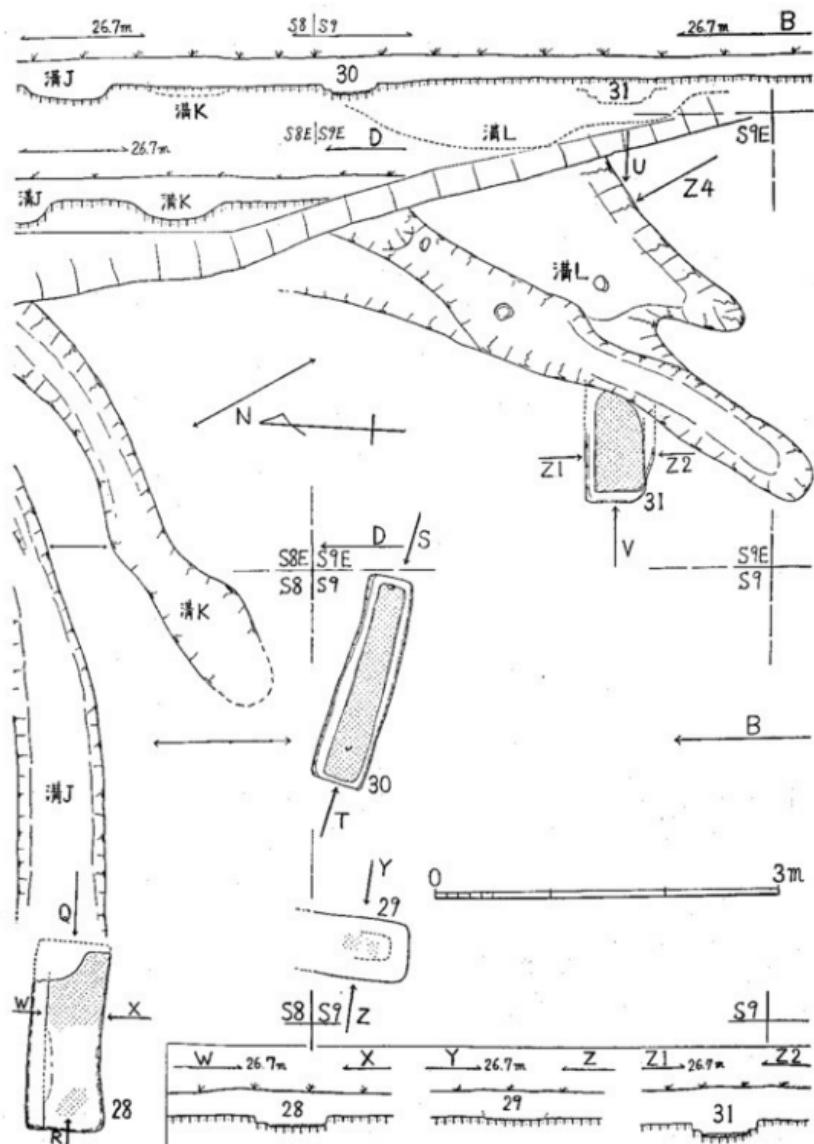


図33C 南地点の遺構(3)

土壙墓や溝状遺構とは全く別の時期のものであった。

D. 辻山田遺跡南地点（図版第十八、図33A・B・C）

辻山田中地点から尾根は細まり、馬の背状になって南に続き、約20mばかりで尾根上の平坦部は再びひらがりを見せる。その部分の南北20mにわたって南地点とした土壙墓23~31と溝状遺構I・J・K・Lがあった。南地点は、中地点よりわずかに高く標高26.5m前後を示す。

1) 土 壙 墓

南地点は、20cm前後の耕土直下が地山となり、かなり削平が進んで、地表面も切り下げられていたと思われ、土壙墓は下面がようやくに残るものがほとんどで、床面にまで耕作の跡が達しているものさえ多かった。合計九基検出されたどの土壙墓にも副葬品は認められなかった。

a. 土 壙 墓 23

南地点の北端を区切った構Iと北端部を重ねる様に南北に向いて、土壙墓23があった。地表面を二段に掘り込み、西側長側部は三段に掘り込んだ土壙で、掘り込み上部の幅は110cm、地山上面から約20cmの深さが残存する。北端は溝Iと重複していて確かめられないが、現存140cmの長さを示す。床面となる掘り込み最下面是平らで、幅50cmを計る。床面には粘土は認められないが、うすく有機分を含む土が存在した。

b. 土 壙 墓 24

土壙墓23の南東に接して東西向きの土壙墓24がある。地山上面から2~3cmの深さで、長さ200cm、幅60cmの床面の存在が知られたにすぎないが、平坦な床面の中央部に細長く粘土敷きの痕跡をとどめている。

c. 土 壙 墓 25

土壙墓24に平行して南側60cmへだてて、土壙墓25がわずかに床面部分のみを残していた。長さ175cm、幅50cmで、平らな床面の中央部に粘土の痕跡をとどめている。

d. 土 壙 墓 26

土壙墓25から180cm南に、東西向きに平行して、土壙墓26が、基底の4~5cmを地山中に残存させていた。両長側は二段に掘られ、わずかに段を持っていた。床面は平らで、粘土敷きのあとを残す。西端部は耕作の穴で消失しているが、長さを推定することは出来て、約180cm、幅は55cmである。

e. 土 壙 墓 27

土壙墓26の東南120cmの位置に、これも東西に長軸を向けて平行した土壙墓27が、西半部を畑の穴で消失して残っていた。残存した東半部も基部の5cmばかりをとどめるにすぎない。残存長120cm、幅70cmの底面は、南北の両長側ぞいに幅15cmばかりのごく低い段を作り、中央部に細長く粘土敷きのあとをとどめている。底面は平坦に作られる。

f. 土 壙 墓 28

土壙墓27の南を溝Jがほぼ東西に走るが、平坦面の西半で消失しており、その西側に土壙墓28が、東西に長軸をむけて認められた。東端部は溝Jと重なっていて消失しているが、推定長160cm、幅60で、地山上面から6~7cm残存する。北側長側ぞいに低い段を作り、床面は平らで、床面上に粘土敷きのあとをとどめている。

g. 土 墓 29

土墳墓28の南にようやくにして、土墳墓と認め得る痕跡をとどめた土墳墓29がある。地山への掘り込み部分は、ほとんど認められないが、床面と思われる部分に粘土敷きのあとをわずかにとどめていて、南北に長軸をおいたものと思われた。

h. 土 墓 30

土墳墓29の東に、東西に長軸をおいた土墳墓30がある。地山上面から7~8cmの深さに掘り込みがあり、長さ185cm、幅45cm。掘り込み底の四周に幅せまい低い段を持って、その中に平坦な床面を作り、粘土をうすく敷いてある。床面東端部に粘土中にくい込んだ小石があり、床面西方端近くに遺骸の歯と思われる粉状になった部分が認められた。

i. 土 墓 31

土墳墓30の東南に、長軸を東西に向けた土墳墓31が認められた。東半は溝Iと重複していて、確認できないが、西半部では地山から約20cmの深さの掘り込みをとどめる。幅60cm、残存部の長さ約1m、四隅にせまく低い段を持つもので、床面は平坦に作り、うすく粘土敷きをしている。

この南地点の土墳墓で注目されることは、北、中地点の土墳墓粘土床に比較して、土墳墓の床に敷かれた粘土床の幅が、床幅よりもかなり狭く、あたかも床の中央部分だけに細長く敷かれた観がある。この点は、他地点のものと異なる特徴であった。

2) 溝 状 遺 構

辻山田南地点の溝状遺構は、四箇所で認められ、北地点や中地点の溝状遺構が土墳墓群の区域の端を区切る位置に限られていたのに対し、南地点では、土墳墓群のある地域の中ほどにも認められたのである。

a. 溝 I

南地点の北端で、尾根幅が南に広がろうとする所に、土墳墓群の北端を区切るように、尾根を横断する溝Iが掘られている。溝幅約4m、東西の長さ約5mで、東西の切り岸の崖へおちている。溝底は地表下50cm~70cmで、ゆるいU字形を示し、溝中に有機土が堆積し、有機土層の中部は、やや有機分が多く、その中に若干の自然石と土器片が含まれていた。溝上も、かなり削られて変形を受けていたのであり、有機土中に含まれる土器片や石のあり方もそれを物語る状況であった。もともと含まれていた土器の多くは、流出しているものと思われた。

溝Iの中央部には、円形の深い部分があり、これは、溝中の有機土の中に土器や石が含まれることと共に、女男岩、辻山田両遺跡の多くの溝状遺構と共通する性格と考えられる。この溝Iが、南地点土墳墓群の北端を区切るように掘られている点も、共通する要素として、とりあげることが出来る。

b. 溝 J

溝Iの南に土墳墓23~27の五基が並び、その南に溝Iから9mばかり離れて、溝Jが、ほぼ東西に向いて掘られている。溝の長さ現存長約5m、溝幅70~80cmで、地山上面から深い所で20cmばかりが確認された。溝は東に深く、東端は切り岸で消失し、西端は、土墳墓28と重複する部分で、消失し、その西には続いていない。溝底はゆるいU字形で、溝中には、有機土が認められず、自然石や土器片の含有も知られなかった。溝の上部が削平されているとはいえ、土器片などの包含があれば、わずか

でも残ると思われるが、こうした点は溝A～Iまでとは違った特徴として注目される。それと共に、溝Jが弧状に彎曲を示し、弧の内側を北に向けて、かなり整然とした溝状の形を示すことも注意をひくのである。

c. 溝 K

溝Jの南に60～70cm離れて、溝Jとほぼ平行した溝Kがある。溝幅は約50cmで溝Jより少しせまく、溝底もやや浅いが、溝のかたちは似かよっている。東端は切り岸で消失し、西端は切り岸から、4mばかりの所まで確かめられ、その西には続いていない。溝底が東へ低くなっていること、有機土や土器片を含まぬことも溝Jと同様であった。

d. 溝 L

南地点東南端に、北東～南西むきの溝Lがある。北東端は、切り岸へ消え、南西に浅くなつて、消失する5～6mの長さの溝である。全体としては、溝幅は2m近くもある様にみられるが、溝の掘り込みは二段になっていて、広く深い溝の中に、幅60cmばかりの深い溝が掘られているのである。溝中には、他の溝の様な顯著な有機土はみられないが、二、三の自然石が認められ、地山面から15～20cmばかり掘り込みを残すだけの幅広く浅い溝中には、あるいは有機土が堆積していたかも知れない。しかし、その中にさらに20cmばかり深く掘り込まれた溝によりとりのぞかれたり、後の耕作で失われたのであろうか。

深く細い溝中は、やや有機土質で、この溝だけみると細く長い形をした溝J、Kと類似した形を思わせる。この溝の中から、小形の土器が出土し、南地点の同類の溝J、K、Lの中では、ただ一個所の遺物発見地となり、溝Iのわずかな土器と、この遺物が、南地点遺構の年代を考える手掛りとなるのである。

E. その他の遺構

辻山田遺跡は、これまでみてきたように土壙墓群と溝状遺構で構成される四個所の地点からなるものであったが、そのほかに北地点から中地点にかけては、土壙墓群とは直接の関係を持たないと考えられる土器片と石器が、若干散在的に発見された。これらは女男岩遺跡の一角によくやくとどめられていた弥生中期後半の住居址と同様な時期を示し、辻山田遺跡の附近にも、同時期の住居址の存在したことが推測される。しかし、段畝としての地形の変更が著しいために、遺構としては何一つ検出されなかつたのである。

次に、すでにふれてきたように、北地点と中地点では、土壙墓群よりもはるかに降った時期の墓穴が7基(M1～M7)発見された。

墓穴M1(図26)は、北地点27.5m高地の東より部分にあって、直径80～90cmの不整円形の穴が掘られ、溝状遺構に堆積していた石より少し大形の自然石と有機土がつめられていた。この墓穴には伴出品は認められなかった。

M2～5(図31)は、北地点の溝Eの東部にあり、不整円形の掘り込み中に大形の自然石と有機土がつまっていた。M2～5の周辺で、溝Eの堆積土をおおう有機土あるいは、炭を含む層が、墓穴をもおおう様に認められ、その中に備前焼の断片、土器類の碗、皿、小皿、鉄器断片が含まれていた。これらは、墓穴の年代を知る手掛りになった。

M6・7(図32)は、中地点にあり、M6は中地点土壙墓の東側に、M7は溝H中に掘られていた。ともにはぼ円形に掘り込まれ、M6には比較的小さい自然石がつまり、石の中には若干の川原石を含んでおり、瓦の断片もつめ石と同様に利用されていた。M7は、大形の石がつまり、掘り込み下部から、五枚の土師質小皿と漆碗の断片かと推定される漆膜が発見された。

このほか南地点でも、同じ様な時期と考えられる土師質土器が発見され、ここにも、同類の遺構があったかも知れないが、畠地としての削平が進んでいて、確認できなかった。

また、北地点27.5m高地の北西端には、近世の石地蔵がまつられていたが、これに伴うと考えられる地下遺構は認められなかったのである、この石地蔵は、この地点に近い团地内に移転された。

以上のような概要を示した辻山田遺跡の尾根は、もともとさらに南に向って延びており、それに従って遺跡も南地点の南にひろがっていた可能性も考えられるのである。しかし、团地造成前の土取りで、南地点の南端まで切りくずしが進んでいて、もはやそれを確かめることは出来なかつた。ただ、土取りの断面には、以前から常々観察してきたにもかかわらず、遺構らしいものや遺物は見当らなかつたことは、先にも述べた通りである。

三、遺 物

辻山田遺跡から発見された遺物の大部分は、溝状遺構中に包含されていた土器であった。そのことは女男岩遺跡での状況と共通するのである。ただ東地点だけでは、土壙墓とその周辺に伴出した土器があり、二基の土壙墓には副葬品もあった。また、辻山田全体として、土壙墓群とは時期を異にした遺物がわずかながら認められている。まず、土壙墓群に関する遺物を東地点から順次記して行く。

A. 辻山田遺跡東地点の遺物

1) 土 器(図版第十九の(2)、図34)

東地点の土壙墓群には、それともなった溝状遺構は認められておらず、女男岩や辻山田の他の地点のように溝状遺構の遺物はないが、土壙墓周辺に土器を伴い、女男岩一辻山田の多くの地点で土壙墓そのものには、土器を伴わなかつたのは対照的であった。土壙墓群に接して認められた一個の穴状遺構からも土器が発見された。全体として、遺構上面が大変はげしく削られていたので、伴った土器の大部分は流失し、その一部をとどめるもので、もともと土壙墓群に伴った土器のごく一部が残存したにすぎないものである。

a. 壺形土器(図34の1、3~6)

土壙墓4と5の間で発見された長頸壺(図34の1)が復元されたほかは、図示できるものは底部だけである。長頸壺は、外反した口縁端を拡張し、端面に四本の浅い凹線をめぐらしている。長い頸部には縦に刷毛目を加え、細い沈線をめぐらし、頸部と胴部の境の頸部沈線下に列点文をめぐらす。器胴外面は、刷毛目整形の上をへらみがきし、内面はへらけずりしている。明瞭な平底部には、焼成後にあけた穴がみられる。他の底部破片も平底で、内面はへらけずりしている。胎土は、わずかに砂粒を含み茶褐色を呈する。

b. 小形壺(図34の7)

直口の細長い口縁部から胴部に移行する部分に一本と、胴部最大径部分に二本の突帯をめぐらす。

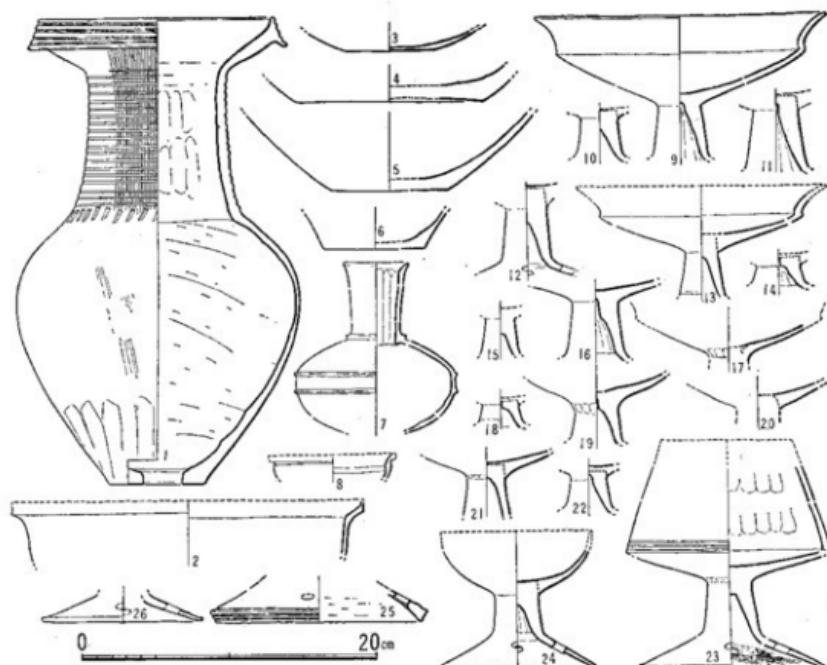


図34 東地点の土器

器制は張りが強い。胎土は、他の器種の土器と区別できないものである。

c. 鉢形土器 (図34の2、8)

小断片であり、全形を推定できないが、口縁部がやや上方に拡張された形を示し、(8)は小形のものである。

d. 高环形上器 (図34の9~22, 24~26)

一般にやや砂粒の少ない胎土を持ち、環部は急に外反する口縁を貼り付けるのを原則とする。それらは環部の口径が、深さにくらべて広い形態をとる。(24)はボール状の環部を持ち、胎土には小さい砂粒が多い。環部は、脚柱部上端のぐるりに貼り付けられ、脚柱上面にも環部貼り付けのとき、ぬり土をして形をととのえている。脚柱部の裾は急にひろがり、四つの円孔があけられるのが普通である。脚漏部は丸味をもっているものが一般的であるが、(25)は脚端を拡張させて平らな端面をつくり、浅い凹線をめぐらす。(25)の裾部円孔は、

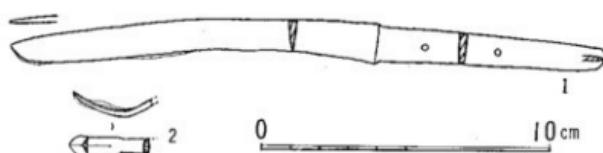


図35 東地点の鉄器

五孔あけられていたと推定される。

e. 台付小壺形土器（図34の23）

高环と同様な脚部の形状と胎土を示し、脚柱部上端に高环と同じ手法で、小壺の底にあたる部分を作り付け、高环の环部外反部分にあたる貼りつけを内傾させて、長く作ったものである。小壺部分の底から稜をもって屈曲した部分に三本の細く浅い弦線をめぐらしている。高环脚部として図示したものの中にも、この種のものの台脚部を含むかも知れない。

以上に記した東地点の土器は、從来この地方で、弥生後期の前半期に属する上東式の特徴をよくあらわしたものであった。また、上東遺跡などの住居に關係した遺跡でみられる同時期の土器と比較して器種、作り、胎土とも墳墓の土器という点で、特性を示すということは認められない。

2) 鉄 器（図版第十九の（1）、図35）

東地点の土墳墓群五基のうち、1と2からそれぞれ一点ずつ鉄器が、いずれも床面と思われる場所から発見されている。

土墳墓1の鉄器（図35の1）は刀子状を示し、長さ21cm弱、幅1cm強、厚さは2mmを計る。刃部はやや内彎し、約8cmの長さを持つ柄部には目釘穴が二孔あく。木質が附着した痕跡はみられない。

土墳墓2の鉄器は長さ約3cm、幅6mmばかりの小断片ながら、鉗の刃部の形状を示す。そのうち、刃部は約2cm、中央に稜をもち、刃部と柄部の境で屈曲し、刃部先端はわずかに上反する。

二点の鉄器は、いずれも上東式の時期の土墳墓の副葬品であったと考えられる。

B. 辻山田遺跡北地点の遺物

北地点では、溝D、E、F中に包含されていた土器が主な遺物であり、土墳墓10からだけ玉類などが検出された。

1) 溝Dの土器（図版第二十一の（2～3）、図36、37）

北地点北東端にあった溝Dは、造構の下端をとどめただけであったので、溝の構造の全体については、あきらかでなく、また、溝中に包含されていた土器のうちの一部が残存していたにすぎないのであった。

a. 錐形土器（図36の1～4）

(1) は卵形に近い器胴に外反した口縁部がつく。口縁外面がふくらみをもち、口縁内面は内彎ぎみになり、口縁端は丸味をもって終る。器胴外面は荒れていて、確かにないが、細い平行たたきの上を刷毛目調整していると思われ、内面はへらけずりしてある。肩部には、わずかに外彎するくせをみせる。底部は、丸底に近く作りながらも平底の痕跡をようやくとどめたというような形を示す。底部内外面に、はげあとがあり、これは、焼成後に孔を開けたあととみられる。

(2、3) は、球形に近い器胴に外反した口縁をつけ、口縁端は丸味をもつ。底部は、やや大きいながらも不安定な感じの平底となり、肩部には心もち外彎するくせをもっている。器胴外面は刷毛目、内面はへらけずりしてある。錐形土器は茶褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。

(4) は二重口縁の口縁部破片である。口縁の上方にたち上る部分はやや外方にひらいて貼り付けで作られている。器台の可能性もある。

b. 錐形土器（図36の5～7）

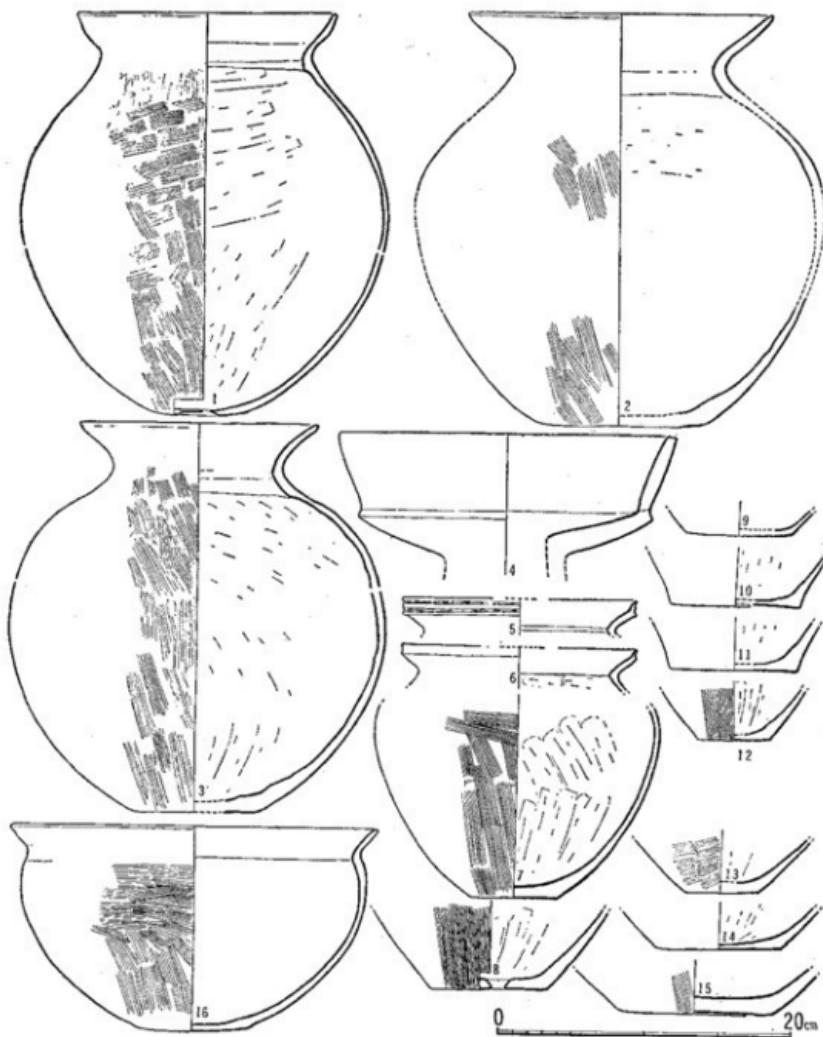


図36 溝 D の 土 器 (1)

口縁部(5、6)は、やや上方に拡張され、(5)は口縁外面ににぶい凹線をめぐらす。(7)は胴下半部で、不安定な感じの平底を示し、胴外面に刷毛目、内面はへらけずりする。胎土、色調とも壺形土器とかわらない。

c. 鉢形土器(図36の16)

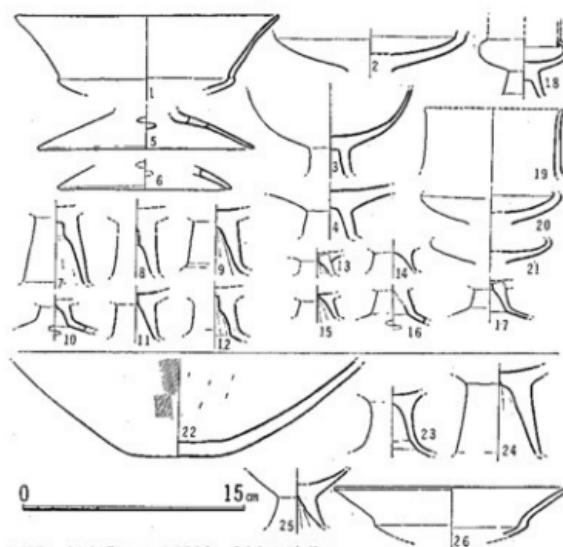


図37 (上)溝Dの土器(2)、(中)土壙墓6
・7附近の土器、(下)27.5m高地南方の土器

變形土器と似た胎土を示す鉢形土器は、半球形に近い胴部に外反する口縁部がつく。底部は、大変不安定な平底をもち、外面は刷毛目調整している。内面は、へらみがきで丁寧に作ってある。

d. 底部 (図36の8~15)

壺、甕、鉢のいずれかの底部と思われるもので全て平底。外面は、刷毛目のものとへらみがきのものがあり、(13)だけは、細い平行たたき目を残す。内面は、たたき目のものを含めて、原則としてへらけずりしている。(10, 11)は、あるいは東地点などから流出して来た古い土器が混入したかも知れない。

e. 高杯形土器 (図37の1~17)

杯部は、一本の稜をもって長く外反する口縁を持つものとボール状になるものがある。脚柱部から急に外にひらく脚端部は、やや内彎ぎみになり四つの円孔があく、脚柱部はやや長いものと短いものがあり、棒さし穴を残すものも認められる。杯部は、脚柱の上部外側に貼り付けられた作りを示す。高杯の胎土は、やや精撰されて、砂粒が少ない。

f. 台付小壺形土器 (図37の18~21)

高杯と同じ胎土で作られ、高杯と区別できない台脚のつく小壺で、脚柱部に貼り付けられた壺の底部から、丸味をもって上方に彎曲し、扁平な感じの壺胴部から広口の口縁が長くたち上る形を示している。器形に大小が認められる。

以上は、溝Dで発見された土器であったが、図37に同時に図示した(22~24)は、溝Dの南方尾根上で6、7号土壙墓の上層をおおった攪乱層中で検出され、(25~26)は、さらに南の畠表土中で採集されたものである。付近の地形から考えて、溝Dが関係したと思われる溝Dの南西部土壙墓とかかわりをもつ土器と思われ、溝Dの土器とも、ほぼ同時期にあたると考えられるが、わずかの断片であり、それ以上に問題にすることはできないものである。

溝Dの土器で、ほぼ全形の知られた壺、鉢、高杯、台付小壺形土器などの形状は、從来酒津式とされたものと相似た性格を持ちながら、壺や鉢の形状は、底部がさらに不安定なものとなり、器胴がより球形に近く、胴張りにくらべ器高が短くなったりする性格を持っている。また、二重口縁のもの

は、口縁外反も強くなっているのである。これらは、酒津式よりも後発的な要素として指摘してよい事象だと考えられる。

それに対し、底部だけとなった断片の中には、特に古い形の(10, 11)をのぞいても、なおより安定した平底を示すものもあった。これらは小断片であって、くわしく論じるにたる資料ではないが、やや古い要素を示しているとも思われる。しかし、それは同じ北地点の溝Eや溝Fで、一個所の溝が、一時に掘られたものではなく、幾度かにわたったことが知られていて、それに伴って、溝に含まれた土器にも変化があったことを考えると、溝Dでも同様に、一度だけで溝が掘られたのでなく、時期的に前後にわたる溝が重複していたとも考えられ、削平されて溝の基底部だけを残す現状では、それを構造上は明確に出来なかったにすぎないのかも知れない。そのような事情があったのであれば、比較的新しい形態を示す土器のみが復元でき、古い要素をもつものが断片となっていることは、古い溝の上を新しい溝が切り込んで、古い時期の土器の多くを掘り出したあとに、新しい土器が主に堆積していた結果を示すとも考えさるのである。すると、溝Dの土器の中には若干新古の別があってもよいわけであり、主体となるものは酒津式よりもやや新しい要素を示したが、先に記した古い要素を持つ底部などをともなって、主体となった土器に先行するものも含まれていると思われる。しかし、そうした例外を含んでいても、溝Dの主な土器は、上に述べてきたような時期としてよいであろう。

2) 溝Eの土器(図版第十九の(3, 4)、第二十の(1, 2)、図38~40)

北地点北西端に位置する溝Eは、東西に延びる溝E 1と南北にある溝E 2とにわかれていたので、溝中に含まれていた土器も一応溝E 1、E 2にわけて記述する。

a. 溝E 1の土器(図38, 39)

溝E 1は、遺構の上では三段に掘られた痕跡を示し、さらに溝中にも凹所があって、数次にわたって溝が形成されて行ったと推定された。しかし、溝中の土器は、同一個体のものが破片となって広く散乱し、溝の部分によって、含まれた土器片を区別することは出来ない状況であった。それは、数次にわたって掘られたと推定された溝の各部分で、土器が含まれている有機土が別の土で埋まらないうちに、重複しながら次々に溝を掘り加えて行った結果、土器片が混合して含まれたものと思われた。そのため、溝E 1で発見された土器は、全体として記述せざるを得ないのである。

特殊土器(図38の1~3)

特殊器台と特殊壺と思われる表面丹ぬりの土器片である。(1)と(2)は、同一個体かと推定され、特殊器台の基部と筒形部にあたる。基部たち上りの上端に方形断面の突帯をめぐらし、その部分から内側に屈曲した裾部をめぐって細い沈線文帯と上むきの鋸歯文を描いている。鋸歯文上端部附近には円孔が透し穴としてあけられるが、円孔の数は、破片となっていて推定できない。裾部から、急に上方にたち上る筒形部には細い沈線文が帯状にめぐらされる。筒形部には、たが状突帯がめぐらない形態と考えられる。

(3)は、特殊壺の頸部と推定され、細い沈線文がめぐらされている。

器台形土器(図38の4~8)

(4)は、器台上縁と下縁を貼り付け二重口縁に作り、中央柱状部は、上に内傾する。柱状部に方

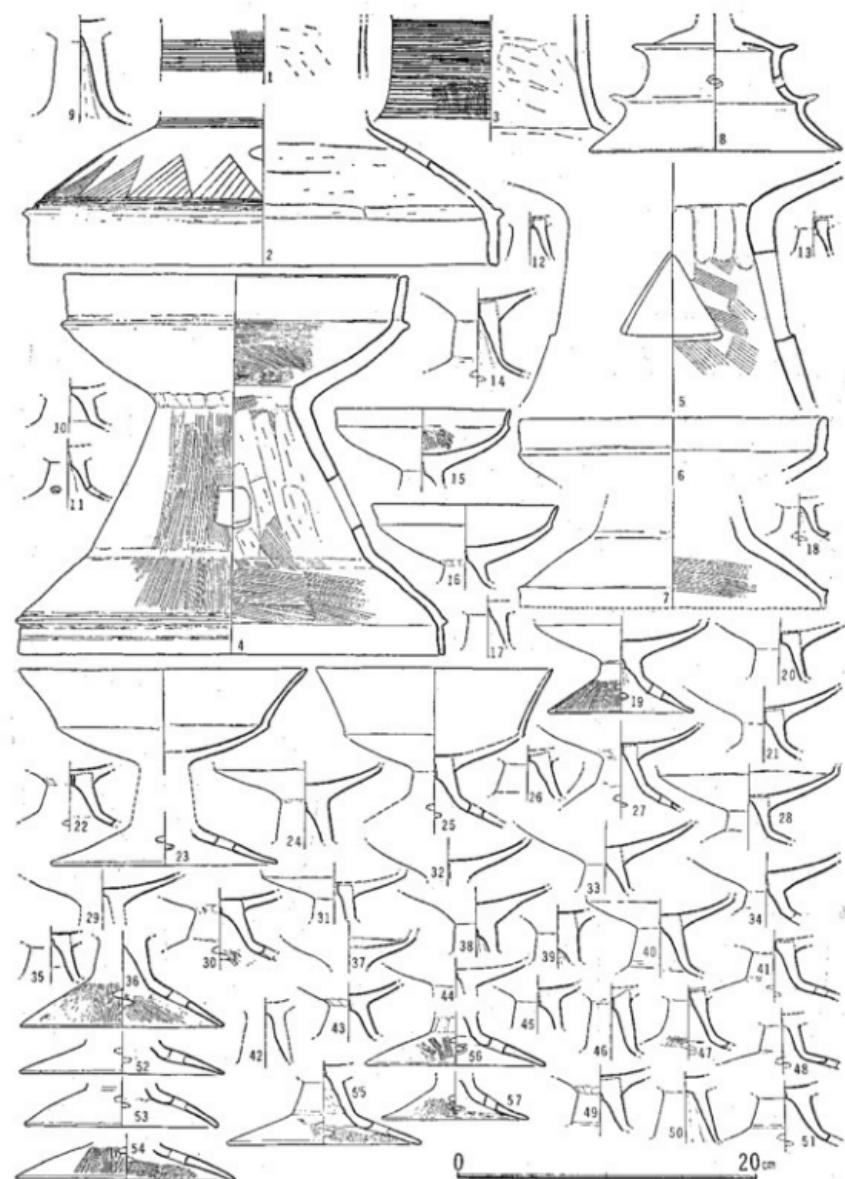


図38 溝 E 1 の 土 器 (1)

形透し穴を四個あけている。内外面とも刷毛目調整がみられ、柱状部内面は、縦方向にけずり痕をとどめる。

(5～7)も、(4)と類似した作りの器台であり、(5)は筒形部に四個の三角形透し穴があけられている。

(8)は、二度にわたって稜をもって屈曲する高杯形部状を呈し、二本の稜の部分は著しく外方に突出した形を示す。二本の稜の間の部分に、四個の円孔透し穴があくので、その他の作りの上では、天地をきめにくいが、脚部であると推定した。

高杯形土器（図38の9～57、図39の1・2）

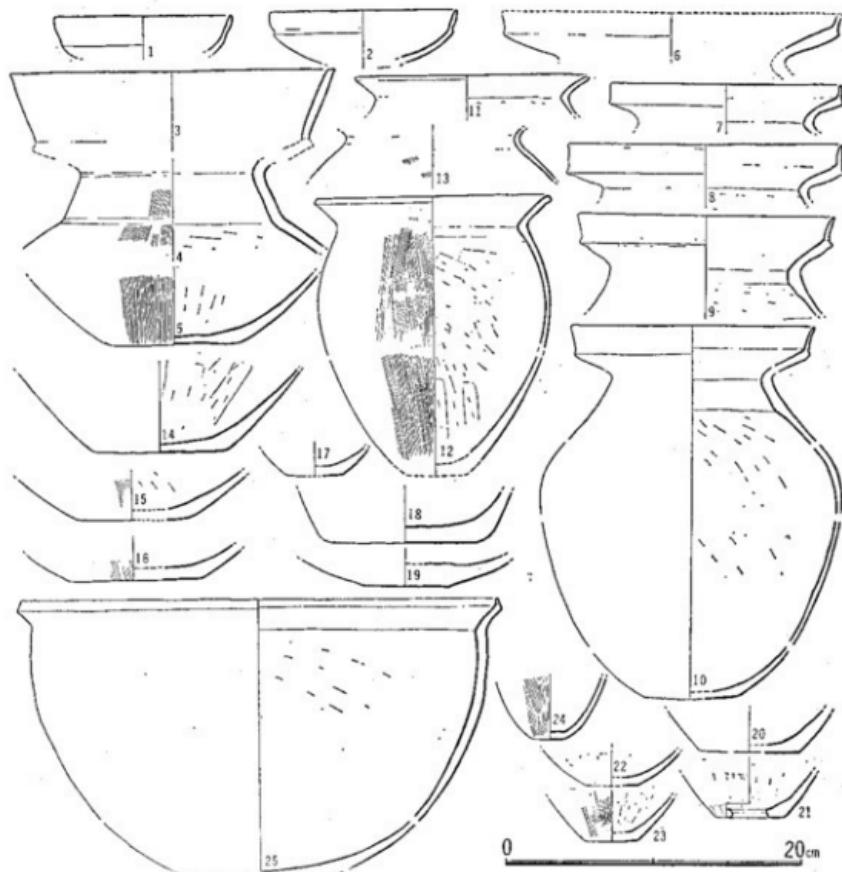


図39 溝 E1 の 土 器 (2)

溝E 1の土器中で最も数が多い器種で、他の器種に比較すると胎土は精撰され、砂粒が少ない。杯部に長く深い外反部を貼り付けた形状のもの（図38の23、25）と、碗状の上部をわずかに上方にまげるもの（図38の15・16、図39の1・2）の二種がある。図示できたものは前者が少ないが、特に口縁部がうすく、小破片となりやすいためで、もともとは、この形の高杯の方が多かったと思われる。

上方にすぼまる形の脚柱部は、短いものとやや長手のものの両者があり、柱状部の上方内側に拵し穴をとどめるものが多い。脚柱上端の周辺に、杯部を貼り付けて作り、脚柱上端にあたる杯内面中央にも粘土をぬって、杯部と脚柱部が連結される。

脚柱部から急にひろがる裾部は、わずかに内彎ぎみのくせを持つものが多く、四円孔があけられる。裾部の内外面に刷毛目のみられるものが多く、端部は薄く、丸味をもって終結する。

壺形土器（図39の3～10）

(3～5)は、それぞれ口縁部、頸部、底部であるが、胎土や作りからみて同一個体の破片と思われる。張り付け二重口縁は、やや外方にひらき、上方に向って内傾する頸部をもち、底部は、平底につくられている。頸部から器胴外面は刷毛目、胴内面はへらけずりしてある。

(6～10)は、それぞれに大小があるが、口縁が上方に立ち上りを見せ、頸部が短く、くの字状に屈曲する壺である。(9、10)でみると、肩部に外彎のくせを持ち、(10)は、やや長目の器胴で、不安定ながら平底に作る。胴内面はへらけずりしている。

甕形土器（図39の11～13）

くの字形に外方におれまがっただけの口縁を持つ甕で、口縁部は外反ぎみに作られる。器胴内面はへらけずり、外面には刷毛目がみられる。

鉢形土器（図39の25）

半球形の器胴に不安定な感じの平底がつき、外方に屈曲した口縁端を上方に拡張している。器胴部の調整は、器面があれていて観察できない。

底部（図39の14～24）

壺、甕、鉢の底部は、一応平底に作られたものばかりである。原則として外面は刷毛目、内面はへらけずり、(21)は焼成後にあけられた穴がみられる。

b. 溝E 2の土器（図40の1～15）

壺形土器（図40の1～3）

(1)は、直立する頸部の上端をわずかに外反させ、上方にたち上りを作った薄い器壁の土器で、胴外面はへらみがき、胴外面に押圧痕を残している。(2、3)は、口縁端を上方に拡張した頸が短く、くの字状に屈曲した壺形土器である。

甕形土器（図40の4）

口縁を上方に立ちあがらせた器壁の薄い甕で、口縁外面に描がき平行線がめぐっている。

底部（図40の5～10）

壺、甕などの底部と思われるものは、安定性のよくない平底。外面はへら調整または刷毛目がみられ、内面はへらけずりしている。(10)は焼成後に穴があけられている。

高杯形土器（図40の11～14）

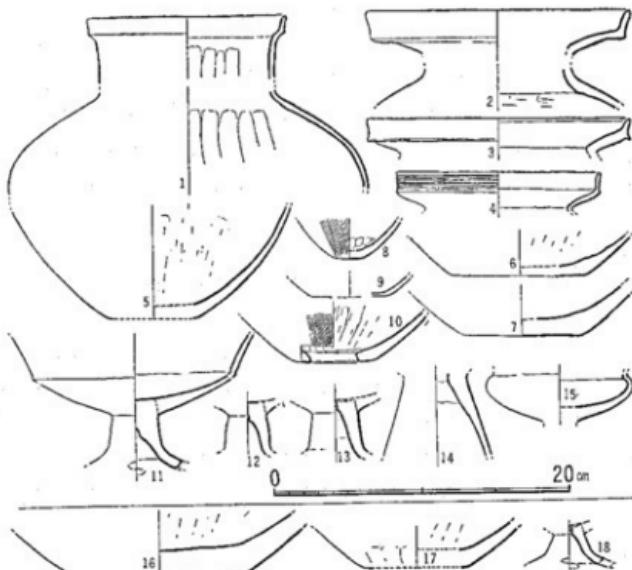


図40 溝E 2の土器(上)、土壤墓9付近の土器(下)

上方に内傾する柱状部の上端部四周に貼り付けられた杯部をもつもので、杯部口縁は、上方に屈曲して長く外反する。脚柱の内側上端には棒さし穴のある場合が多く、脚柱が特に短いものはない。胎土には砂粒が少ない。

台付小壺形土器 (図40の15)

高杯と同様な胎土で、浅い壺形の器胴を示し、高杯と同形の脚がつくものである。

その他溝E近辺の土器

そのほかに図40の(16~18)は、土壤墓9のある切り岸附近で発見され、切り岸で荒れた土層中にあったものである。溝Eが、関係を持ったと思われる土壤墓の近くにあったので、ここに図示した。わずかな断片であり、溝Eの土器と形状において区別できないものばかりである。

溝E 1の土器は、特殊壺と特殊器台に、弥生後期終末的な要素をとどめるが、他の各種の器形は、一般に酒津式に属するものと考えてよいと思われる。特殊でない器台形土器は、酒津式では数少ないものであるが、倉敷市の酒津一水江遺跡の中に含まれる新屋敷遺跡と呼ばれた岡山県南部上水道水源地から出土した一例(弥生式土器集成資料編1 PL 11の26)と類似し、また口縁の上方拡張の状況や、柱状部が上方に向って内傾する作り方は、酒津式の壺の作りとそっくりであり、酒津式の時期と考えてまず間違いないものである。一般的な土器が全て、酒津式に含まれる内容の中に入るものであるから、特殊壺と特殊器台の断片も、それだけを古く考えるわけにはいかず、特殊な器種については古い要素がとどめられているものと考えなければならないのである。

溝E 2の土器は、量が少ないので充分な比較は難しく、高杯の脚柱部の感じなどにやや新しい要素も見られるが、全体としては、やはり酒津式の範囲の中に入れられるもので、溝E 1の土器の中にわずかな時間幅を認めるとすれば、その中では新しい要素のものに近いという程度に理解しておきたいと思う。